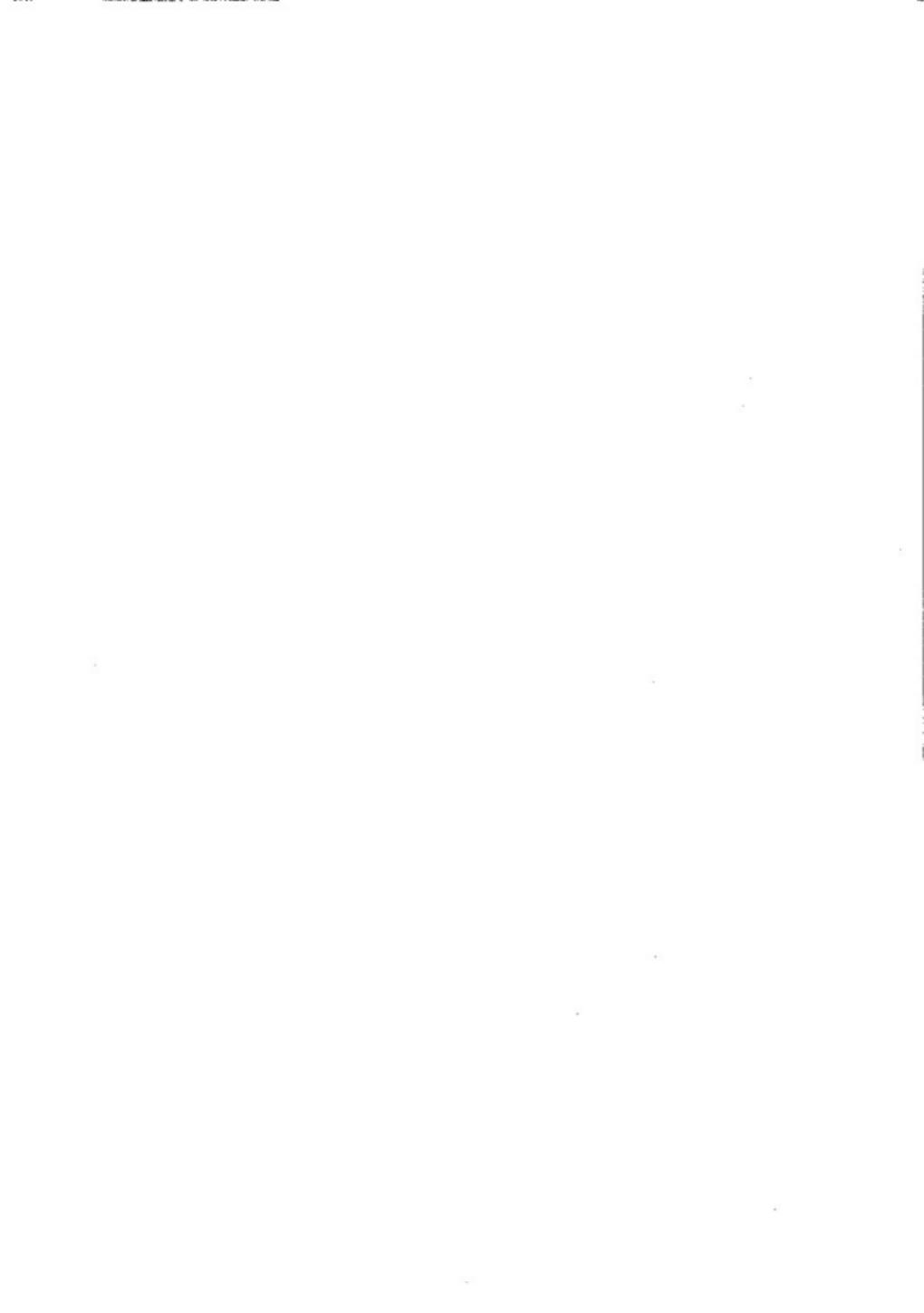


加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・Ⅲ

—中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う—

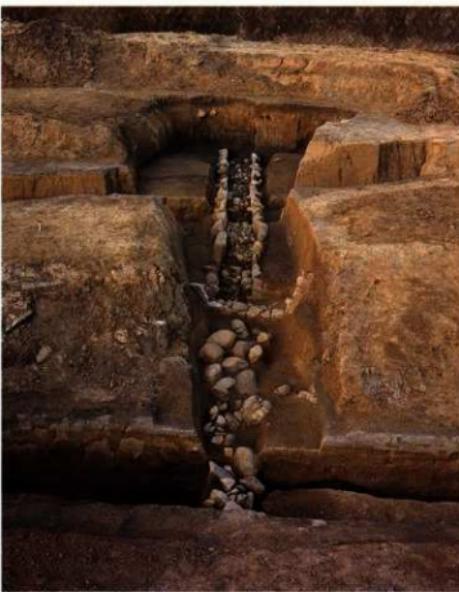
2004年3月

大阪府教育委員会





駕田古墳全景（南西から）



石組溝全景（南から）

はじめに

6世紀から7世紀にかけて、河内の葛城山麓、河南町平石川右岸段丘上に、谷間を見下ろす古墳が下流から上流へと築かれました。このうち、昭和40、50年代に内部調査が行われたアカハゲ古墳やツカマリ古墳に、精美な切石の埋葬施設が構築され、葬送にあたっては漆塗り籠棺や緑釉棺台が用いられていました。7世紀中頃の造墓活動を特徴づける学術的にも貴重な成果として知られています。ところが四半世紀を経てこの地区に大規模な整備事業が計画され、それに伴う事業地全体の文化財調査がはじまると、かつての調査成果に倍する重要な発見が相次ぎました。平成12年度の加納古墳群の1・2・5・6号墳、13年度のシショツカ古墳、そして今回報告する14年度の駕田古墳等々です。シショツカ古墳の東北に接して築かれた駕田古墳は、ひとつの墳丘に同時にふたつの石室を設ける双室墳と呼ばれる形態をとっています。さらにこの古墳の東では、古代宮都の石溝と見まがうかのような8世紀代の立派な石組の溝が、段丘斜面に築かれていることも判明しました。どれをとりあげても予想を超える発見です。このように平石谷は火和と河内を繋ぐ要路上の位置も相俟って、その重要性は今後ますますクローズアップされるでしょう。

本府教育委員会としましては、この地区的整備事業について関係機関と十分に調整を図りつつ、文化財の保護に努めていきたいと思っています。今後もこれまで以上に地元の方々や広く府民の皆様にご協力をよろしくお願い申し上げます。

今回の発掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆様ならびに関係機関に深く感謝申し上げます。

平成16年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 向井 正博

例　　言

1. 本書は、中山間地域総合整備事業「南河内ごせ地区」に伴う、南河内郡河南町所在加納古墳群・平石古墳群の発掘調査概要報告書である。
2. 調査と遺物整理は、大阪府環境農林水産部の依頼を受けて大阪府教育委員会が実施した。
3. 調査は、文化財保護課調査第二グループ主任技師桥本哲を担当者として、平成14年7月より平成14年11月まで行った。遺物整理は、調査管理グループ技師林日佐子、同小浜成を担当者として、平成16年3月まで行った。
4. 本書に使用した国土地理院国土地標第VI系に基づき、括弧内には世界測地系の数値を書き加えた。方位は座標北、標高はT.P.で示している。特に必要な場合は磁北の表示を加えている。
5. 航空写真は、和歌山航測株式会社に委託して実施した。なお、撮影フィルムは同社において保管している。
6. 遺構・遺物の写真撮影を（有）阿南写真工房に、石器の実測を（株）アルカに委託して実施した。
7. 調査と遺物整理にあたり、下記の機関および方々から格別のご協力とご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げます（団体五十音順・団体内五十音順・敬称略）。
- 赤井毅彦（河南町教育委員会）、木下光弘（河南町給食センター）、竹本勇、吉年研一（北加納地区委員長）、北野耕平（神戸商船大学）、堀田啓一（高野山大学）、森村健一（堺市教育委員会）、江浦洋（財團法人大阪府文化財センター）、置田雅昭（天理大学）、奥田尚（奈良県立橿原考古学研究所）、西谷安一（平石地区委員長）、岩瀬透、上林史郎、岡本敏行、山本彰（府立近つ飛鳥博物館）。
8. 発掘調査および遺物整理・調査概要の作成に要した経費は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。
9. 本書は、桥本が執筆、編集し、第3章については、奈良県立橿原考古学研究所共同研究員奥田尚氏から玉稿を賜った。
10. 本概要は、300部作成し、一部あたりの単価は3,329円である。

本文目次

はじめに

例言

第1章 調査の契機と経過	1頁
第2章 調査の概要	7頁
第3章 駕田古墳の石材の石種とその採石地	39頁
第4章 まとめ	43頁
付 章 平成13年度の調査の概要-シヨツカ古墳以外の調査区	46頁
遺物観察表	78頁

挿図目次

第1図 平石谷古墳分布図	第17図 第10調査区断面図
第2図 南河内こごせ地区事業位置図	第18図 第11調査区平面図
第3図 平成14年度調査区位置図	第19図 第11調査区断面図(1)
第4図 平成12~14年度調査区位置関係図	第20図 第11調査区断面図(2)
第5図 第1調査区北壁断面図ほか	第21図 第11調査区駕田古墳平面図
第6図 第2調査区断面図	第22図 第11調査区駕田古墳埋葬施設平面図
第7図 第3調査区断面図	第23図 第11調査区駕田古墳東西石室前方立面図
第8図 第5~7調査区断面図	第24図 第9~11調査区出土土器
第9図 第3・5調査区拡張部溝・落ち込み平面・断面図	第25図 第10調査区出土榛原石
第10図 第3・5調査区拡張部ピット群平面・断面図	第26図 第12調査区断面図
第11図 第1~3・5・7調査区出土土器	第27図 各調査区出土石器
第12図 第8調査区断面図	第28図 駕田古墳の石材の石種
第13図 第8調査区出土土器	第29図 平成13年度調査区位置図
第14図 第9調査区断面図	第30図 第2調査区横穴式石室跡平面・断面図
第15図 第9調査区石組溝平面・断面図	第31図 第3調査区断面図
第16図 第10調査区平面図ほか	第32図 第1~3トレンチ断面図
	第33図 第4・5トレンチ断面図

第34図	第4トレンチ拡張部流跡平面・断面図	第41図	第13・14トレンチ出土土器
第35図	第2調査区・第4トレンチおよび拡張部出土土器	第42図	第15トレンチ出土土器(1)
		第43図	第15トレンチ出土土器(2)
第36図	第9トレンチ平面図	第44図	第15トレンチ出土土器(3)
第37図	第9トレンチ出土土器	第45図	第15トレンチ出土土器(4)
第38図	第12・22トレンチ出土土器	第46図	第16・19~21トレンチ出土土器
第39図	第10・12・22トレンチ平面・断面図	第47図	第20・21トレンチ平面・断面図
第40図	第11・13~19トレンチ断面図	第48図	各トレンチ出土石器

卷頭写真図版目次

駕田古墳全景

石組溝全景

写真図版目次

図版1	調査区全景	図版20	第8調査区出土土器・輪羽口
図版2	第1調査区	図版21	第9・10調査区出土土器
図版3	第3・5調査区	図版22	第10・11調査区出土株原石・土器
図版4	第9調査区	図版23	各調査区出土石器ほか
図版5	第9調査区拡張部石組溝(1)	図版24	第3調査区断面
図版6	第9調査区拡張部石組溝(2)	図版25	第4トレンチ拡張部
図版7	第9調査区拡張部石組溝(3)	図版26	第9・12・22トレンチ
図版8	第10調査区(1)	図版27	第14・15トレンチ
図版9	第10調査区(2)	図版28	第20トレンチ(1)
図版10	第11調査区 駕田古墳(1)	図版29	第20トレンチ(2)
図版11	第11調査区 駕田古墳(2)	図版30	第2調査区・第4トレンチおよび拡張部出土土器
図版12	第11調査区 駕田古墳(3)	図版31	第2調査区・第4トレンチ拡張部ほか出土土器
図版13	第11調査区 駕田古墳(4)	図版32	第9・12トレンチ出土土器
図版14	第11調査区 駕田古墳(5)	図版33	第12・14トレンチ出土土器
図版15	第11調査区 駕田古墳(6)	図版34	第15トレンチ出土土器(1)
図版16	第11調査区 駕田古墳(7)	図版35	第15トレンチ出土土器(2)
図版17	第11調査区 駕田古墳(8)	図版36	各トレンチ出土石器
図版18	第1・2調査区出土土器		
図版19	第1~3・5・7調査区出土土器		

第1章 調査の契機と経過

平成11年度から大阪府教育委員会文化財保護課が環境農林水産部からの依頼を受けて実施している加納古墳群および平石古墳群の発掘調査は、平成10年から平成16年にかけて圃場整備を実施する予定の「南河内ごせ地区の農空間整備事業」に伴って、事前に当該地の埋蔵文化財の分布・内容を把握してきている。本事業が、農作業の省力化・効力化を図り、大雨災害を受けにくい農地・農業施設を作り、豊かな自然遺産と歴史資源を有効に活用しつつ、都市住民との交流型農業の展開に寄与することを目的とする以上、いうまでもなく発掘調査で得られたデータに照らして事業との整合を図りながら、最大限埋蔵文化財の保護策を講じなければならない（第1・2図）。

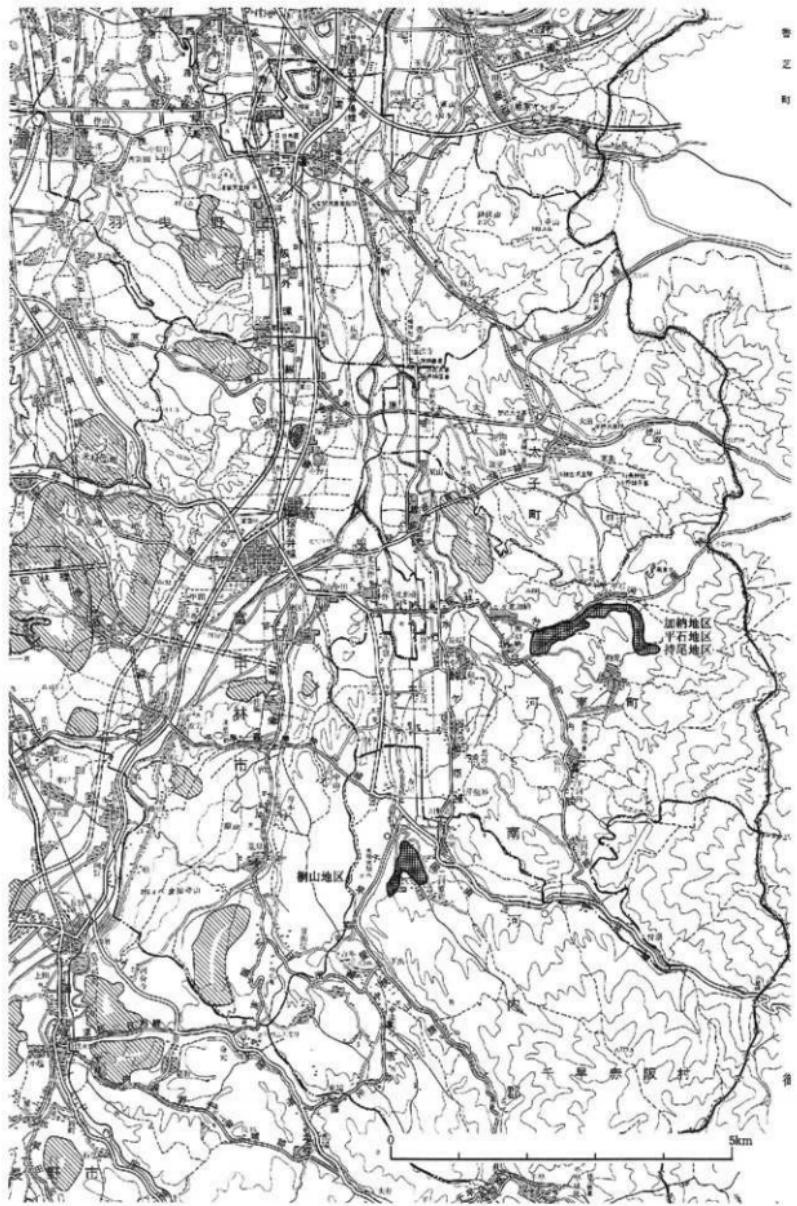
河南町加納・平石・持尾地区と千早赤阪村桐山地区的55.7haにおよぶ圃場整備対象地には、多くの歴史・文化遺産が知られている。のことから本課は事業主体の大坂府環境農林水産部と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、まず平成11年度に加納・平石地区、桐山地区において試掘調査を実施し、埋蔵文化財の分布を把握した。その調査結果に基づき平成12年度には加納地区と桐山地区で発掘調査を実施し、特に加納地区では加納1・2・5・6号墳を中心とする古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳の内容を明らかにした。残存状態の良好な加納1号墳については環境農林水産部と協議の上、若干の工法を変更して、保存が図られることになった。次いで平成13年度には前年の結果を踏まえ、加納・平石両地区にわたり、総面積10,150m²について発掘調査を実施し、試掘調査の段階で初めてその存在が確かめられていたシショツカ古墳の内外の状況や規模等を掴んだ。その結果、この古墳が古墳時代後期から終末期の様相を示すことが判明した。そこで加納古墳群では石室全体を良好にとどめる2号墳、そしてシショツカ古墳については、農林水産部との協議を重ねて圃場の嵩上げを行ない、旧地形の破壊を極力抑えて地下に保存する方策を探った。

平成14年度は、シショツカ古墳の東で総面積1,399m²を対象として発掘調査を実施し、新たに古墳1基を確認したほか、整然とした石組溝を検出した。これらの遺構の上面には盛土が施され、いずれも埋没保存されることとなった（第3・4図）。

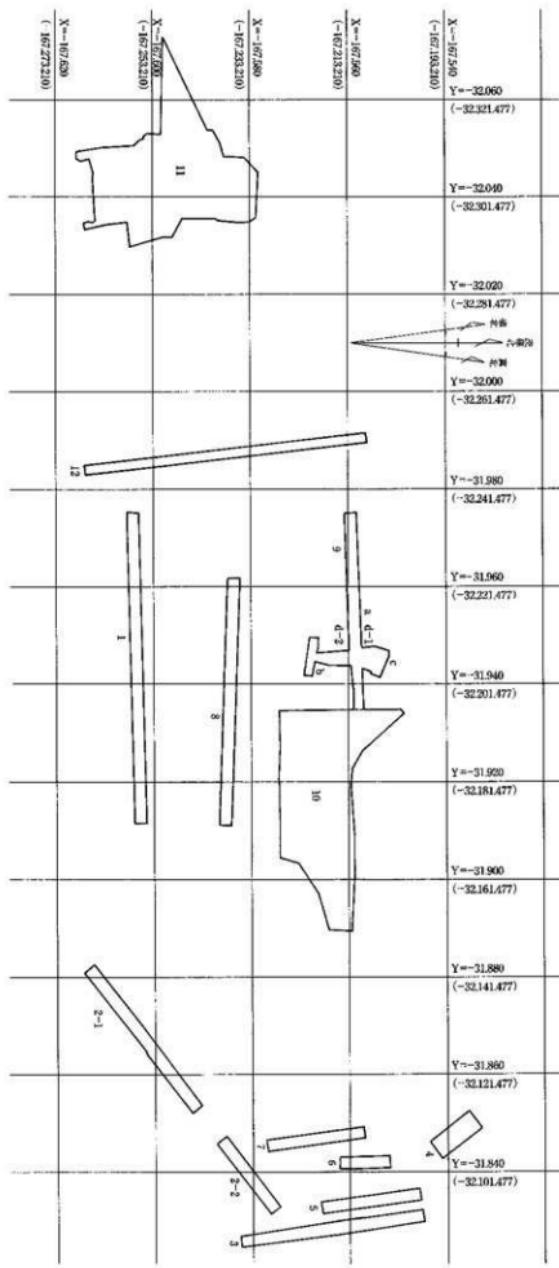


第1図 平石谷古墳分布図

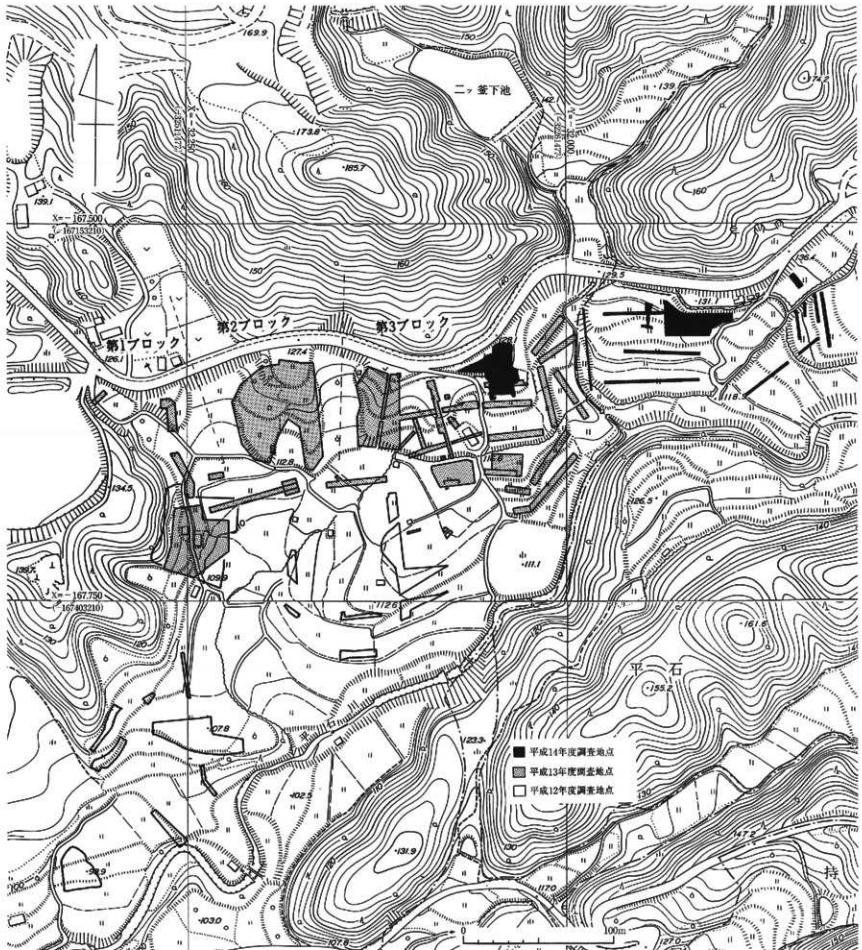
- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1 加納古墳群 1号墳 | 9 同大原古墳 |
| 2 同 2号墳 | 10 同バチ川古墳 |
| 3 同 5号墳 | 11 同バチ川 2号墳 |
| 4 同 6号墳 | 12~15 同ツカマリ北古墳他 |
| 5 同 7号墳 | 16 平石古墳群（無名古墳） |
| 6 平石古墳群シヨツカ古墳 | 17~19 一須賀古墳群P支群 2~4号墳 |
| 7 同アカハゲ古墳 | 20~23 同M支群 2~5号墳 |
| 8 同ツカマリ古墳 | 24 鶴田古墳 |



第2図 南河内こごせ地区事業位置図



第3図 平成14年度調査区位置図



第4図 平成12~14年度調査区位置関係図

第2章 調査の概要

平成14年度は、釜下池（竜ヶ池）の谷筋の東で南に張り出す山麓部を中心として東西約250mの間において、計12箇所の調査区を設けて調査を実施した。この山麓部（第1調査区）は現在その外周に沿ってコンクリート壁をめぐらせた資材置き場となっていて、本来の山麓斜面はその地下に埋没した状態であり、今回の圃場整備事業の対象外である。したがって調査はコンクリート壁の南側一帯を発掘する形となった。この調査区の西側に取り付く形で設定した第9調査区では南北方向の石組溝が検出された。また谷筋を隔てた、13年度発掘のシヨツカ古墳の北東に接する第11調査区では尾根の先端を利用した双室をもつ方墳が新たに発見された。以下各調査区の概要を述べる。

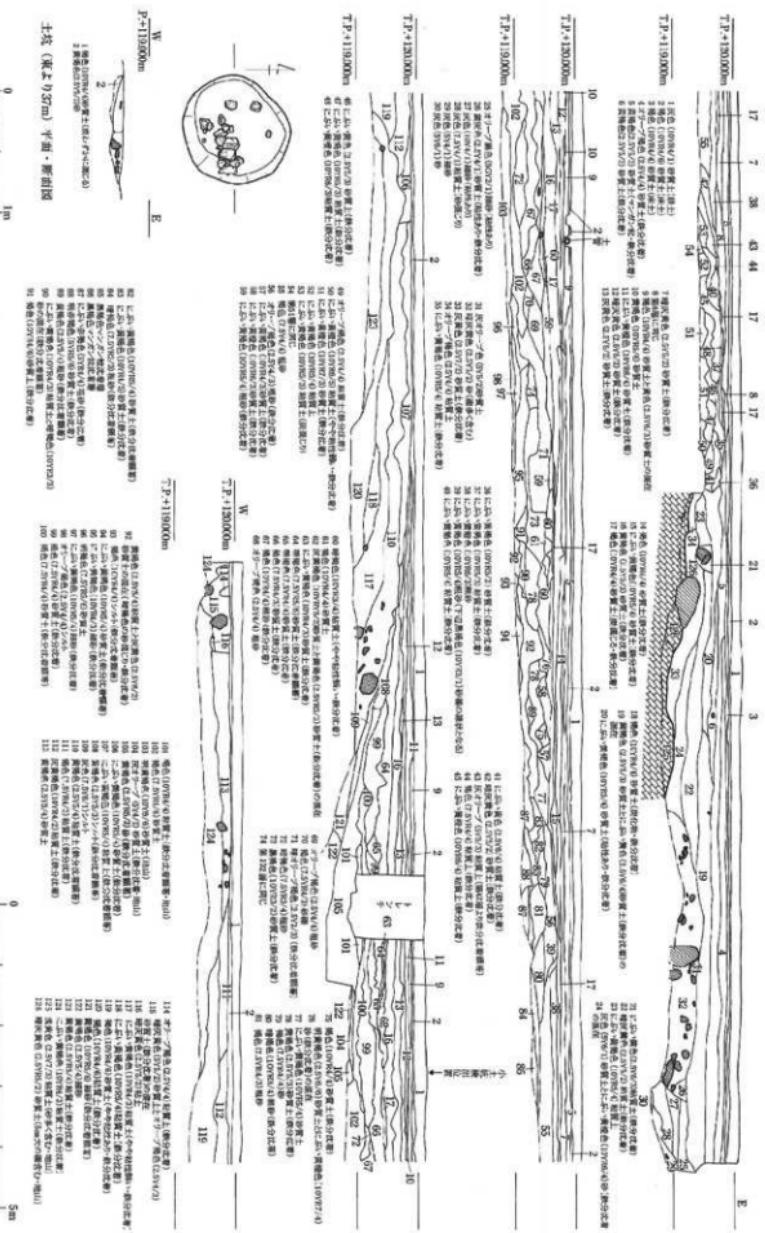
第1調査区（第5・11図）

第10調査区の南に東西に設定した幅2.0m、長さ64.0mのトレンチである。北壁断面に現れているように、東端から11.0mと46.0mのあたりに、かつての南北方向の流路の肩の西上がりの堆積層のラインが認められる。それより西の107層以下には粘質土を含む比較的締まった土が堆積している。しかしこれらの土層もかつての南北の流跡であり、結局西端より5m付近の床土直下の黄褐色砂質土（113層）を肩として、それより東側は砂～砂質土を主体とする流水堆積土である。この土層からは土師器・須恵器・瓦器・磁器など奈良時代～中世の遺物（1～10）が包含されている。おそらく中世には北西の二ッ釜池から下降し、平石谷に流れ込むいくつかの谷筋の流れがあったのであろう。幕藩時代の史料に基づいて、「北加納式二ッ釜池の如く、堤切流れ場合度々で、その都度見分・普請を願ひ出なければならなかった。」と述べられている（野村豊『水利史料の研究』）ようには、何度も出水に見舞われたその名残と考えられる。

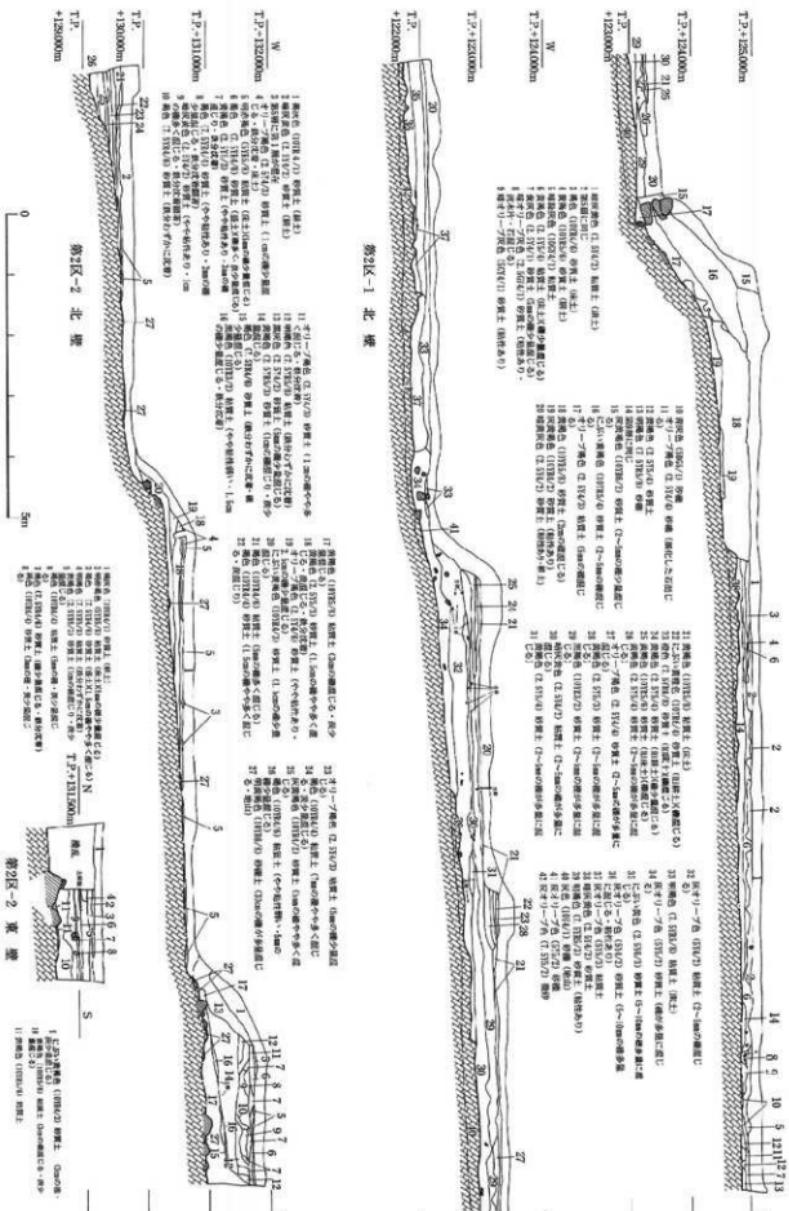
東端から37.0mの105層下で径1.0m、深さ0.15mの浅い円形土坑が検出され、疊に混じって土師器片が混入していた。遺物の時期は不明であるが、流水堆積以前の土地利用の痕跡と考えられる。トレンチ西端の床土下の112層でサヌカイト製槍先形石器未製品が出土している。

第2調査区（第6・11図）

第1区の南東に里道・水路を挟んで北東～南西方向に3～4段の棚田が築かれた舌状に下降する丘陵がある。この丘陵は擁壁によってT.P.130.0～132.0mの上段とT.P.125.0～122.0mの下段に分かれ、各段に幅2.0m、長さ上段19m、下段38mのトレンチを設定した。上下両段において地山を削平して段差をつけ、棚田を造成し、結果として遺物包含層が二次堆積するに至った状況が観察された。重層する旧耕作土には土師器・須恵器・磁器・瓦器などの遺物が包含されているが、下段に設定した2-1調査区では須恵器・土師器が目立つ。さらに弥生後期の土器片やサヌカイト剥片が出土している。



第5図 第1調査区北壁断面図ほか



第6図 第2調査区断面図

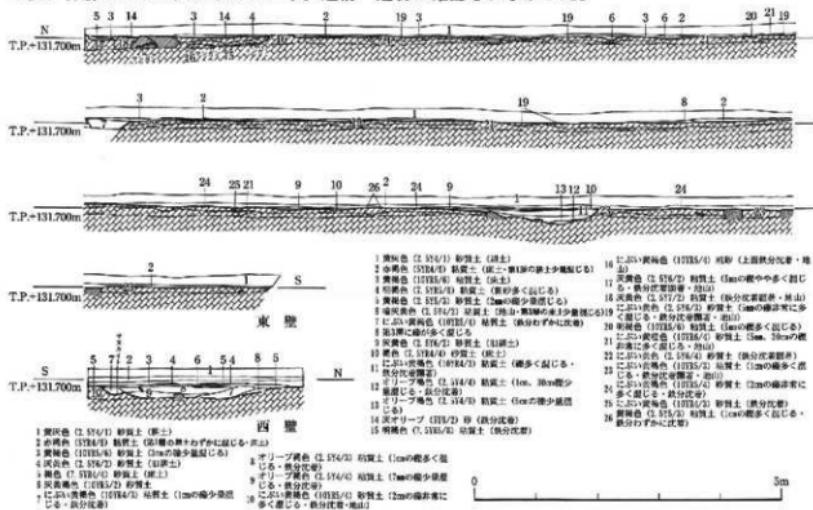
第3調査区（第7・11図）

第2調査区の上段トレンチ（2-2調査区）の一枚上の棚田に設定した南北方向のトレンチである。幅2.0m、長さ37.5m。粘性のある床土下は砂質土の地山となる。南端部ではこの地山面で幅1.5～2.0m、深さ0.2mの東西溝を、北端では西壁際で幅3.0mの浅い落ち込みを検出した。この棚田一帯は圃場整備によって切土となる箇所にあたっているので、遺構の拡がりを追跡するため、第3区の西側に平行して設定した第5区との間も拡張して調査することとした。

その結果、第3区で検出された溝はさらに西に延び、第2-2調査区の最高点あたりまで続いた。それより西は第2調査区で確認された棚田造成の際の段差によって断ち切られていることが判明した。溝には粘質土が堆積し、北側から投棄された礫がこの堆積土に混入していた。またこれらの堆積土を除去すると溝の南肩付近に径0.2～0.3mのピットが検出された。そしてそのピット群に繋がるピットがさらに南の地山面でも検出された。それらのピットの拡がりは5.0×3.5mの範囲で認められるが、柱穴の並びや規模などからみて小屋程度の建物が想定される。それらとは別に、一辺0.5mで、四壁が若干被火して赤変し、中に炭が混じった方形土坑が検出されている。土質や位置関係、しっかりととした掘り方からみてこの土坑はピット群とは関係なく、農作業用に関連して掘り込まれたものではないかと考えられる。

第4調査区

第3調査区の北に、北東～南西に通る里道を挟んで設定した。この地点は北東から南西にのびる谷筋にあたっている。耕土下は廃棄物の混じる埋め土であり、地元では昭和50年代の土石流災害の後、谷筋を埋めて田にしたという。遺構・遺物は確認されなかった。



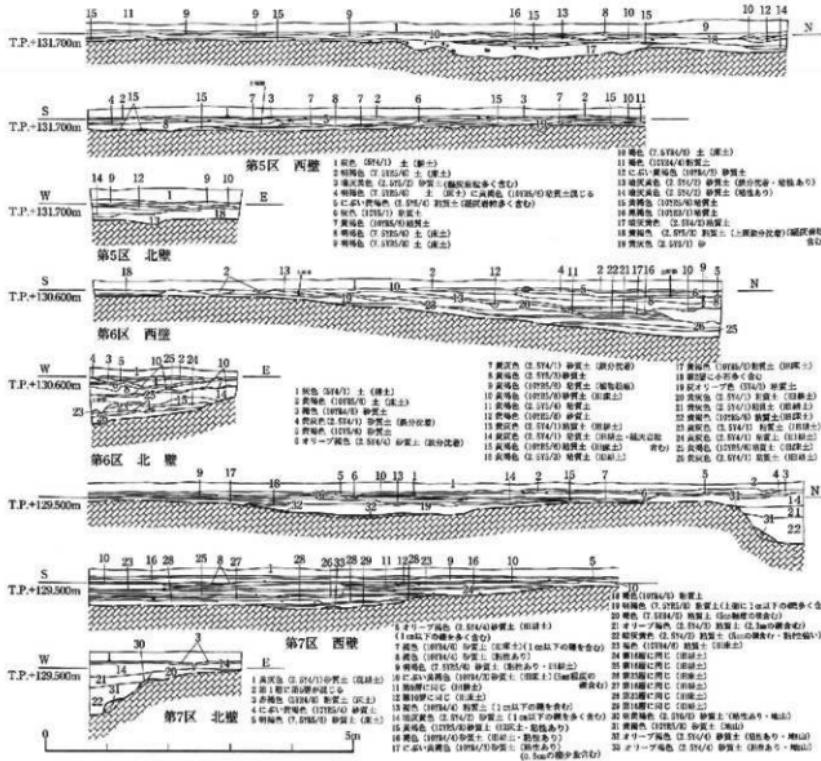
第7図 第3調査区断面図

第5調査区（第8・11図）

第3調査区の西に平行して設定した幅2.0m、長さ20.5mのトレンチである。堆積土は第3区と同様であるが、第3区の北端で検出した落ち込みの続きが確認できた。落ち込みでは土師器・須恵器の破片（45・46）が混入する。

第3・5調査区拡張部（第9～11図）

切土工事の対象となる上記の第3調査区と第5調査区で、若干の遺構を検出した関係で、両トレンチの間にも遺構が存在するかどうかを確認するため拡張したものである。結果、南部では第3調査区の溝やピットの範囲、北部では落ち込みの全体を検出したが、それ以外には遺構は認められなかった。落ち込みは幅3.0m、長さ6.0m、北東～南西方向に延びて、西はその下の棚田への傾斜部で断ち切れている。方向はこの調査区の丘陵が延びる方向と同じで、平坦な棚田に造成される以前の自然地形に沿う窪地の名残と思われる。しかしその堆積土である暗黄色の土質はこの落ち



第8図 第5～7調査区断面図

込みにのみ特徴的で、出土遺物も土師器・須恵器に限られ、棚田造成以前の状況を伝える痕跡であろう。遺物は細片が多いが、須恵器壺蓋（43）はつまみを除いて全形を知りえるもので、その時期は7世紀中頃と思われる。北東のアカハゲ古墳までは約90.0mを隔て、同じ丘陵の南西端にある位置を考えると、注意される遺物である。

第6調査区（第8・27図）

第5調査区の一段下の棚田に設置した幅2.0m、長さ10.0mの南北トレンチである。現耕土以下数層の中世耕作土の下は北に低く、南に高い地山面となる。丘陵の傾斜面を削平して狭隘な棚田を造成していった様子がうかがわれる。地山面に堆積した17層からサヌカイト剥片が出土している。

第7調査区（第8・11図）

第6調査区の一段下の棚田に設けた幅2.0m、長さ20.0mの南北トレンチである。耕土以下の堆積状況は第6調査区と同様、中世耕土層となっており、土師器小皿（47～49）が出土している。また床土からは近世磁器片と腐蝕の著しく形状の不明な青銅製品片が出土している。

第8調査区（第12・13・27図）

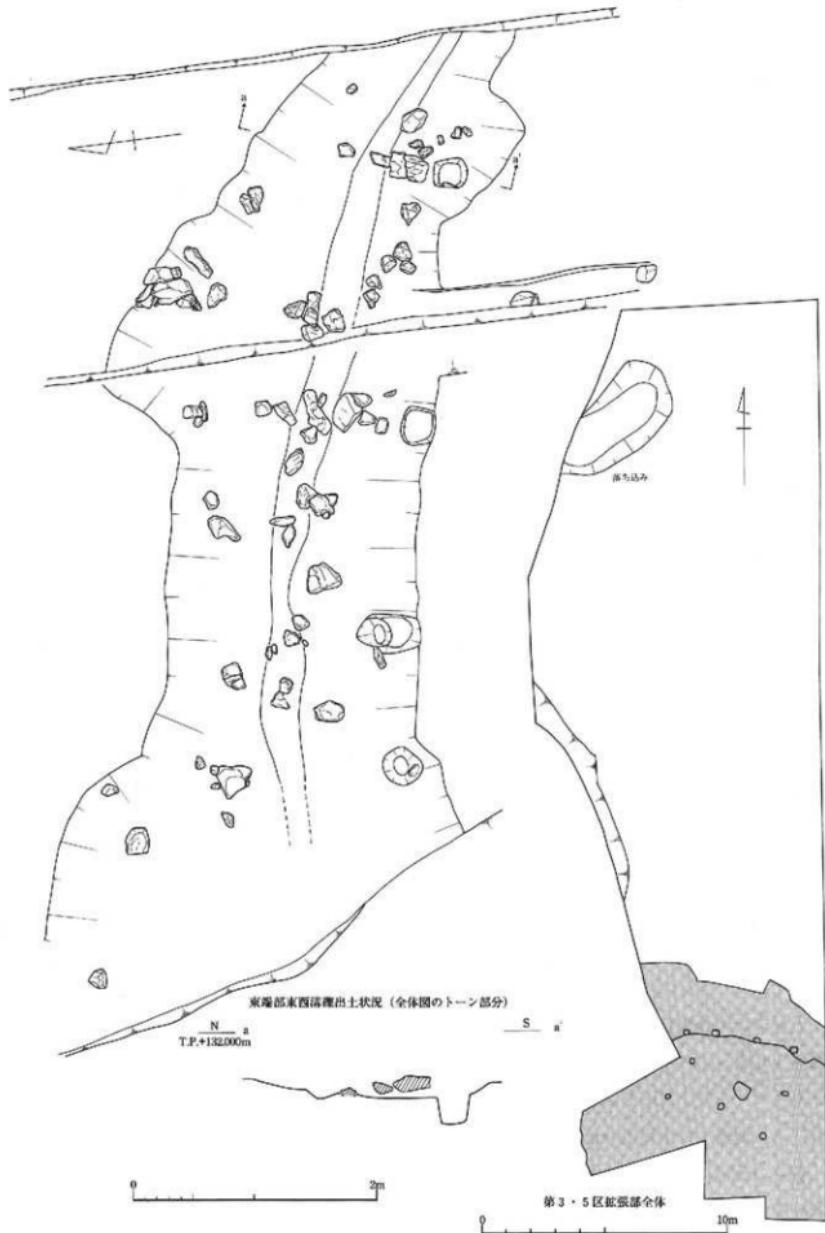
第1調査区の北側の1段上の棚田に設定した幅2.0m、長さ51.0mの東西トレンチである。現耕土下の数層の旧耕作土の堆積を経て、東西に大きく二つの流水堆積の痕跡を認める。トレンチ東端から西へ8.5m付近までは、第4調査区で確認された北東～南西にかけての旧谷筋の西側斜面、またトレンチ西端から東へ27.0m付近までは第1調査区で述べたニッ釜池のある谷筋に連なる北西方向からの旧流跡となっている。そしてこの2つの流水堆積層の間で礫を多く含む砂質土地山が隆起する。したがって第8調査区では東西両方向から平石谷に流れ込んだかつての地形が観察される。またその地山面上では耕土・床土下の地山を1.5m四方を掘り込んで、耕作の妨げとなる1.2～1.3mの四角い転石を落としこんでいる。平石谷の棚田によくみられる田畠の開闢の知恵である。

東西の流水堆積土には、土師器・須恵器・瓦器・磁器など古代・中世の遺物が含まれている。また備の羽口（70）やサヌカイト製槍先形未製品などが出土した。瓦器椀・白磁皿・土師質羽釜などの中世遺物などから12～13世紀頃の堆積が考えられる。なお床土より銅錢が出土しているが腐蝕が激しく錢種は不明である。

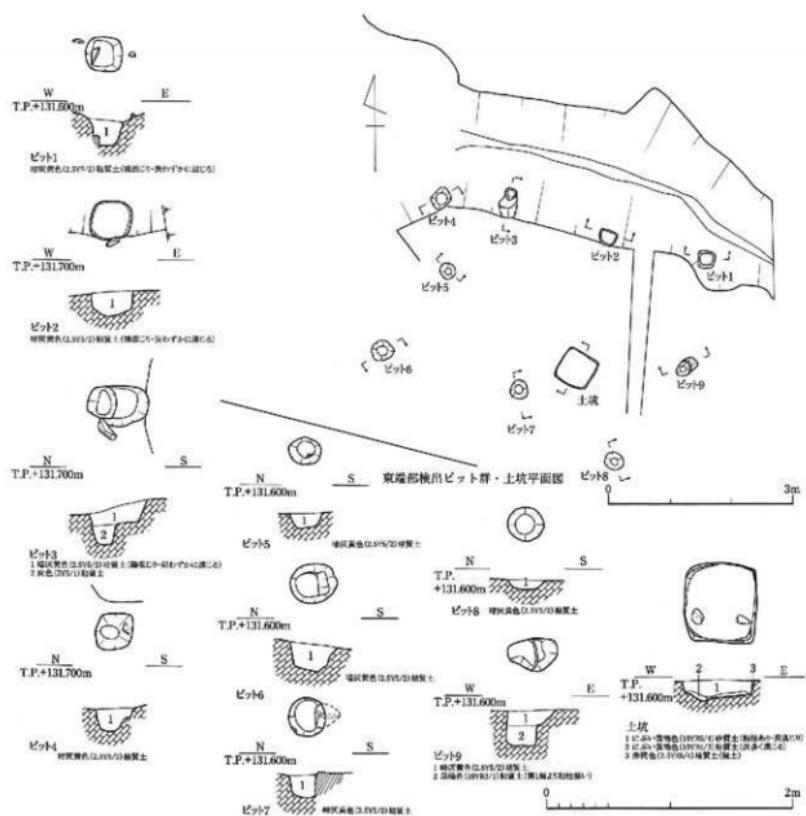
第9調査区（第14・24図）

第8調査区北側の2段上の棚田に東西に設定した幅2.0m、長さ40.0mの東西トレンチで、東端は第10調査区に接する。東端より西へ10.0mで、このトレンチに直行する形をとる南北方向の石組溝が検出されたため、それを追跡せんと北へ5.5m、南へ9.0m拡張した。

石組溝より上は、ほぼ水平な堆積を示す中世耕土層が堆積し、奈良時代の土師器・須恵器に加えて瓦器・土師器小皿など中世遺物が出土する。しかし石組溝より以下の土層は水平ではなく、自然堆積とは思えない乱れた層界ラインが観察される。おそらく北西のニッ釜池の谷筋に派生する旧谷地形を埋めた一連の埋積上であり、その作業の最終段階で石組溝が設置されたと考えられる。



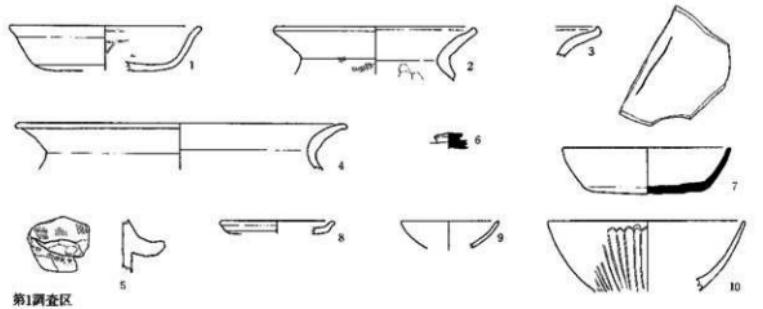
第9図 第3・5調査区拡張部溝・落ち込み平面・断面図



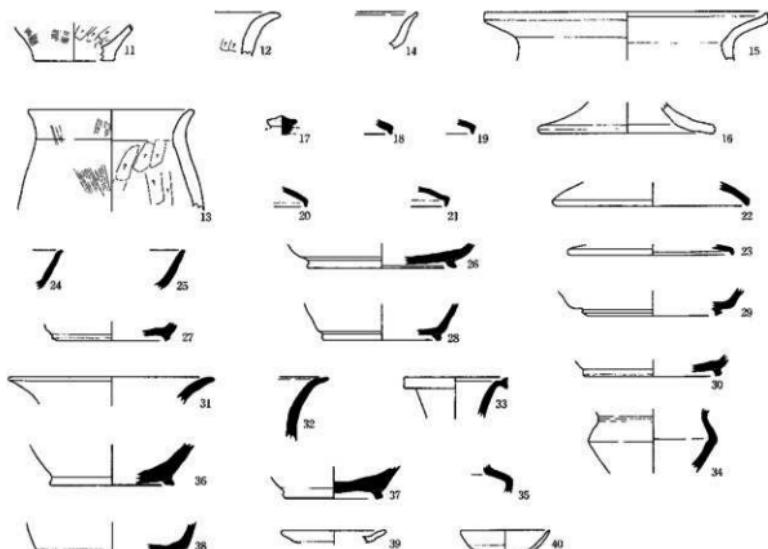
第10図 第3・5調査区拡張部ピット群平面・断面図

この埋積土の一部から土師器の皿(74・75)が、また石組溝内堆積土より須恵器坏身(79)が出士しており、これらの遺物によって石組溝の施工時期としては8世紀前半を考慮できる。

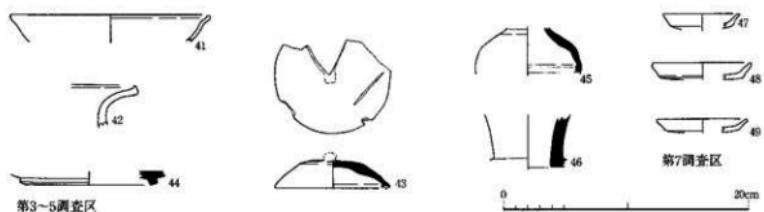
石組溝の中軸線は北側で磁北との振れN-11°40'~12°-Eを測る。南北延長16.5mを検出した。南端より北へ5.5~6.0mのところは上下の棚田の段差にあたり、ここでは上段の棚田の石垣が一部コンクリート壁を用いて補強されていた。ここを境にして北側には石組溝の原状がよくとどめられ、一方南側では南端の一部を除いて全体的に搅乱され、石もかなり取り去られていた。おそらく現在の石垣にもそれらの石が転用されたのであろう。しかし南側の搅乱部にかろうじて残った底石や側石などからすると、当初石組溝は現在のような段差をもって設置されたのではなく、勾配10°~15°の傾斜をつけて構築されたと考えられる。なぜなら境付近の南側の石はほとんど外されているが、



第1調査区



第2調査区

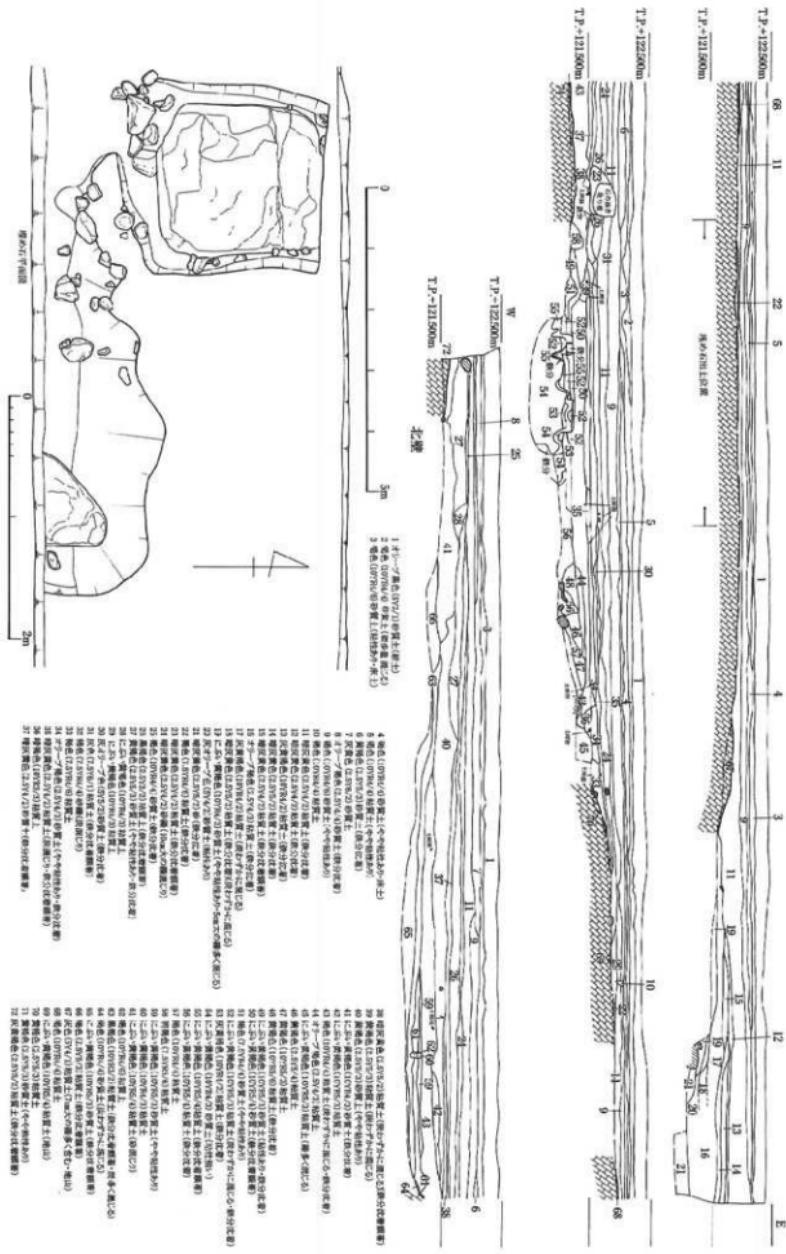


第3~5調査区

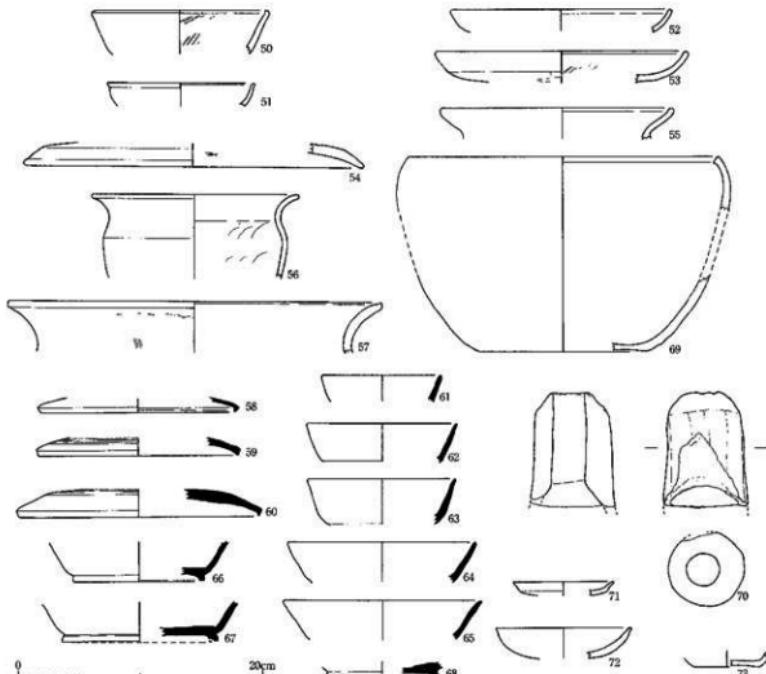
第7調査区

0 1 20cm

第11図 第1~3・5・7調査区出土土器



第12図 第8調査区断面図



第13図 第8調査区出土土器

これは後世(中世に)この箇所で段差をつけるために本米の傾斜部を切り取って明確な上下2段にしたと思われるからである。北側は調査区外であり、また南側にはそれに続く石敷きは確認されなかった。

原状をとどめる北半部でみると、最初に50.0~80.0cmの長手の川原石を内法50.0~60.0cmをとって据え、次いでその長手の石の間に30.0~40.0cmの石を平坦面を内側にして面を揃えて並べる。その後底面に5.0~40.0cmの砾を充填している。自然の川原石のみならず割り石も用い、敷くというより立てるような状態で凹凸の目立った溝底となっている。底石の間隙に当地の終末期古墳に特徴的な石材である榛原石の破片が確認された。これは紛れ込んだものではなく川原石の間に差し込んだ状態である。周辺の古墳から遊離した石材を二次的に利用したのかもしれない。

第10調査区（第16・17・24・25図）

平石谷では終末期の主要古墳がすべて南に張り出す丘陵先端部に築かれている。その目でみれば第10調査区は今回の調査で最も有望な立地条件をそなえている。しかし冒頭に述べたように、残念ながらコンクリート擁壁に取り巻かれた北側は調査区外であり、今回の調査区はその崖下という位置になる。この調査区はその擁壁沿いに東西45.0m、南北15.0~25.0mにわたって丘陵裾部を

巡る形で設定した。現耕作土以下には累々と水平に積み重ねられたかつての旧耕作土があり、その下には斜面堆積した流土が観察される。そして地山は黄褐色の粘質土であるが、それすら流土となっていて、特に西壁断面ではそれが顕著に認められる。平成13年度の第3調査区において数段の棚田に対し設定した南北縦断面に観察されたのと等しい堆積状況である（本書付章第3調査区参照）。したがってここでも幾度か斜面堆積して形成された丘陵を棚田造成していく様子をうかがうことができる。これらの層からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・サヌカイト・陶磁器の破片が出土するが、地山直上に堆積した粘質土（中央ベルト断面55・60層）では弥生土器・土師器片を含み、それより上位の土層に混入するような中世遺物は認められない。このことから棚田造成は中世に始まるとみられるが、それ以前の遺構も北側丘陵上に存在した可能性がある。

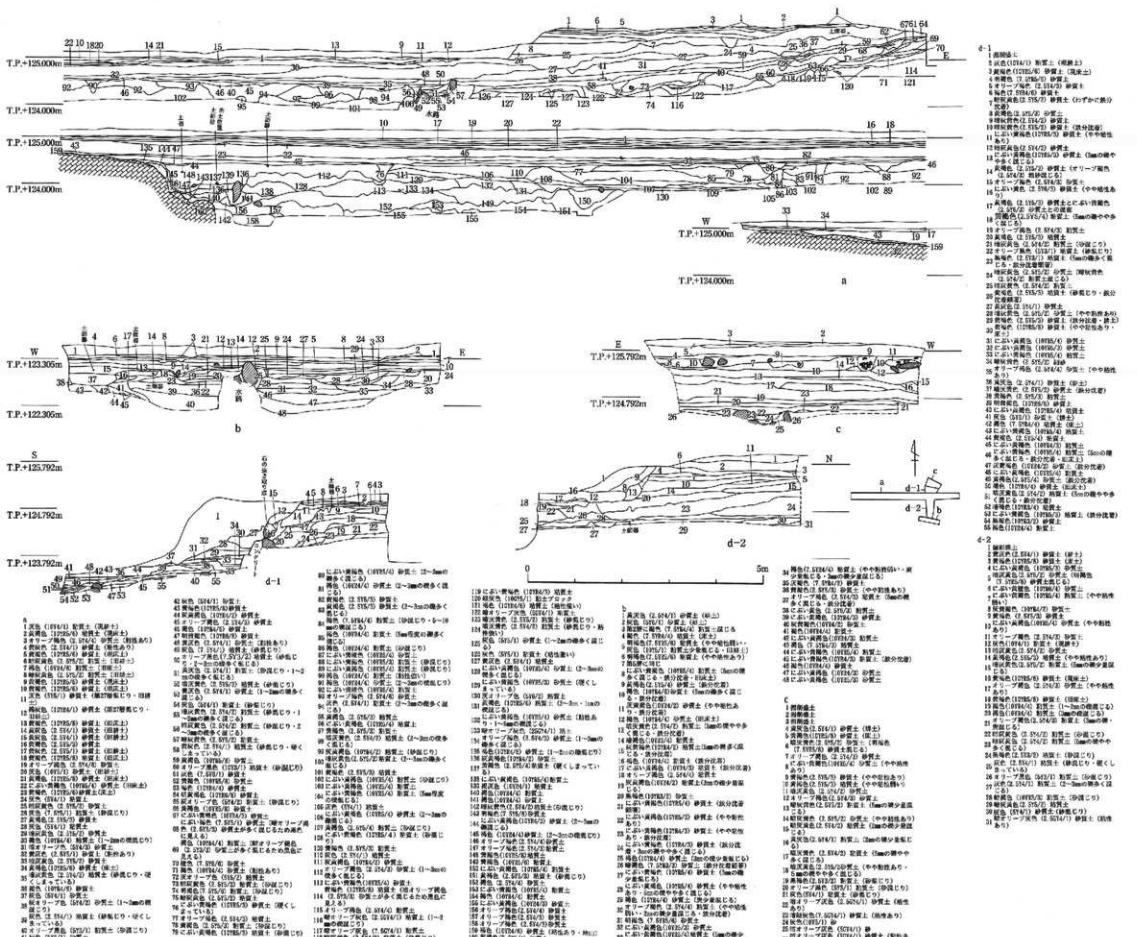
中央断面観察ベルトを挟んで西半部では、地山斜面に北から南へ筋を引くように流れ下った粗い砂の溜まった流水跡が検出された。礫を多く含み、摩滅した中～近世の土器片が少量混入していた。その礫の中に榛原石の破片が10数点紛れていた。側面を加工した破片もあり、当地の終末期古墳に用いられるような詰め石と思われる破片もある（107～109）。またベルトを挟んで東側では径20.0cm、深さ45.0cmのピットが検出された。検出時は須恵器の坏身底部片（93）がそのピットの上に被せられた状態であり、それを外すと検出面より深さ20.0cmまでは空洞となっていた（第16図平面・断面図参照）。ピット内の堆積土は2層に分層され、上層は泥土のような軟質なシルト、下層は逆に鉄分が沈着して硬化した状態であった。

検出された遺構は以上のように限られているが、斜面堆積土出土遺物中にみられる須恵器高坏坏部片（91）や榛原石片（107～113）などの出土状況からみてこの丘陵裾より高い北側の尾根の張り出し部に古墳の存在していた可能性は高いといえよう。ただし大規模な外部施設を伴うような古墳は以上の結果からは考えがたく、平石古墳群の中でも却って山中に築かれたような規模の古墳の存在が想定できるかもしれない。

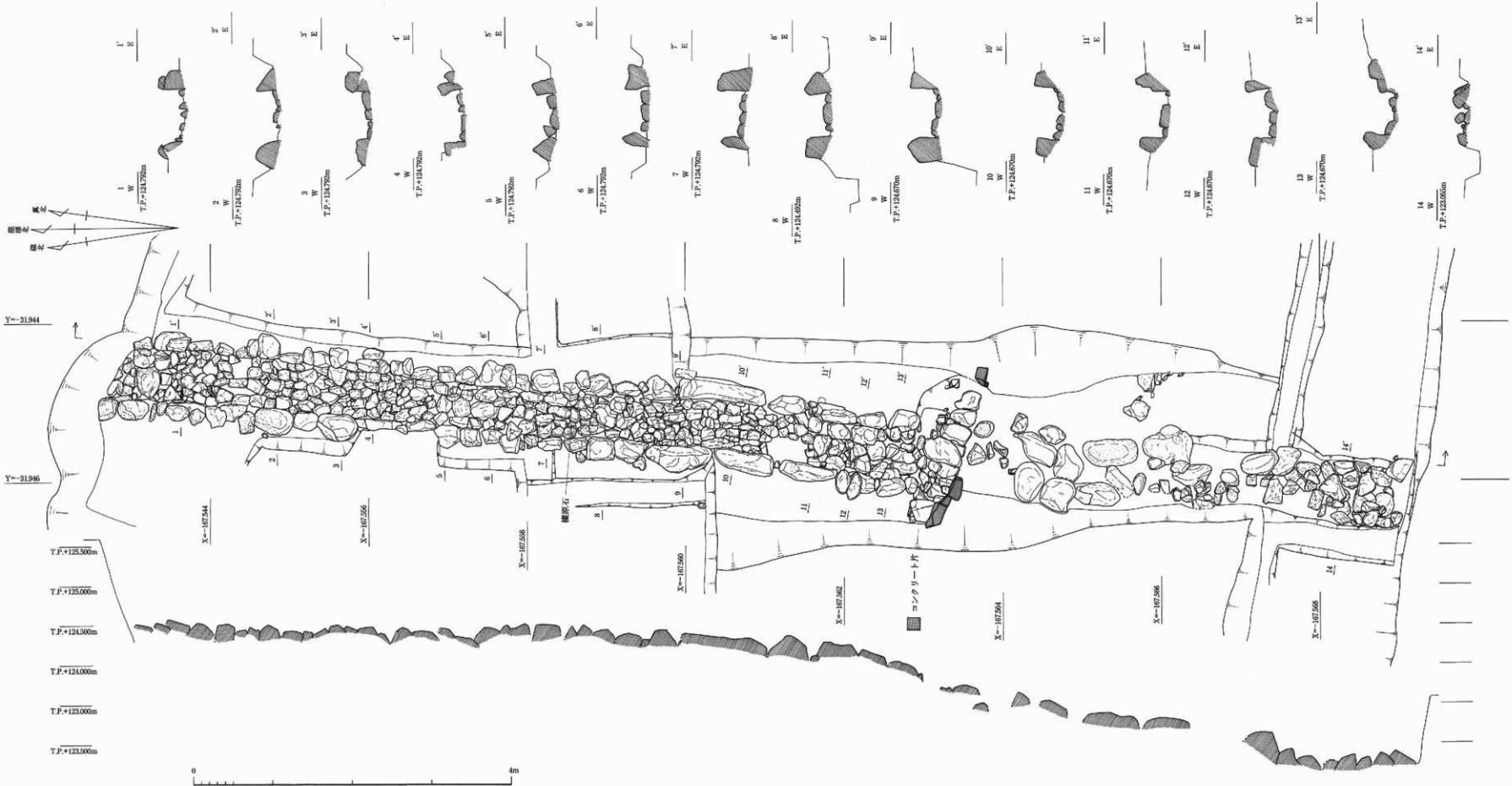
第11調査区（第18～24図）

この調査区は本書付章で報告する平成13年度第20トレンチの東端にあたる。前回の調査ではここには南北溝が検出されていた。しかしトレンチ南側のコンクリート擁壁（高さ3.5m）が、今回圃場整備事業によって取り去られることとなったため、事前に取り外しを行なったところ、その壁面に東西16.0m余にわたって古墳の石室正面、墳丘盛土、堀削、石室構築土などが露呈し、その結果新たに古墳1基が発見されるに至り、約450.0m²の範囲で調査を実施した。ただし今回の調査では埋葬施設の内部調査は行なわず、古墳の規模・形状・残存状況を確認するにとどめ、古墳は圃場整備事業では盛土を行なって保存されることになった。

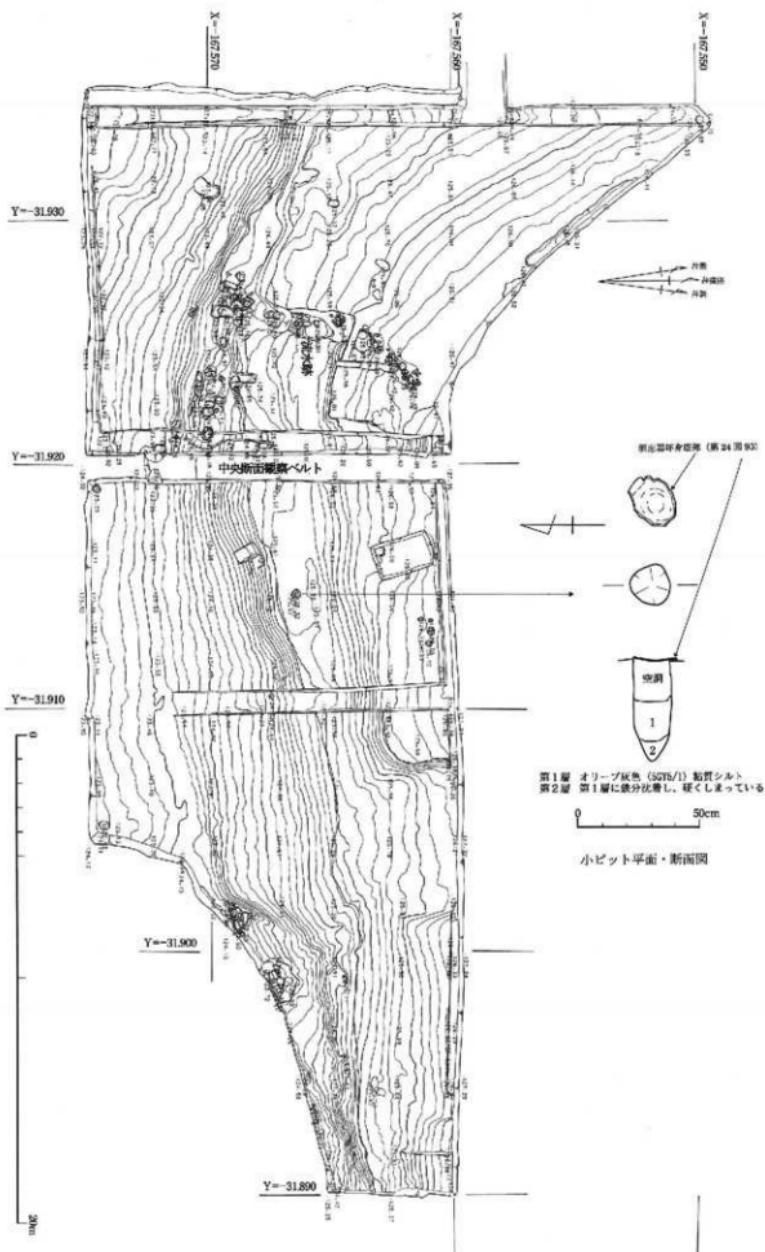
位置 前年度調査したシショツカ古墳の北東約50.0mに張り出す尾根の南端にあたり、シショツカ古墳に非常に接近している。地籍図には「駕田」とあるので、「古墳」と命名した。背後にはシショツカ古墳の場合と同じく、標高238.9mの「一の禿」から派生する主尾根に連なる標高186.5m



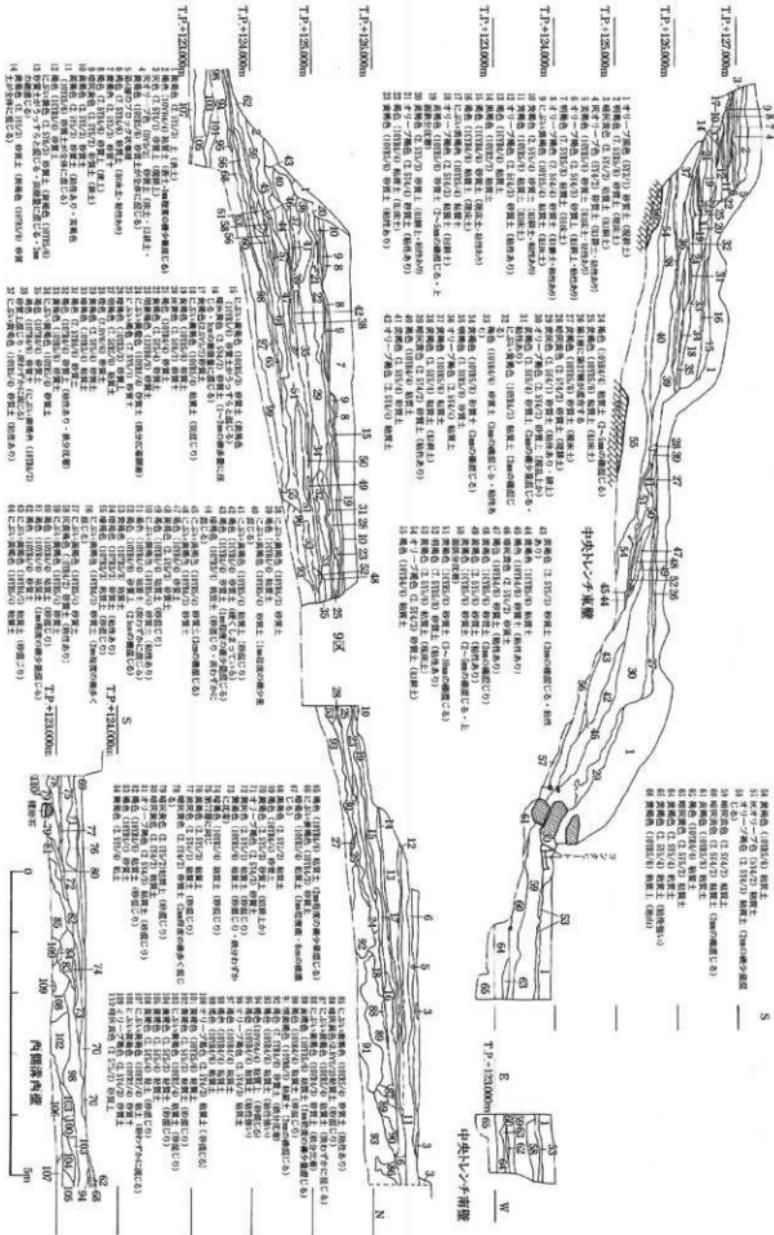
第14図 第9調査区断面図



第15図 第9調査区石組溝平面・断面図



第16図 第10調査区平面図ほか



第17図 第10調査区断面図

の山頂が迫り、背後にこの山を意識して築かれたことは明白である。

墳丘 後世の棚田造成により削られて全形をとどめていないが、西側は墳丘～堀割肩までが確認できる。墳丘盛土は削られているが高さ2.0m程度が残り、石室の天井石が一部露呈した状態である。掘えられた墳丘の北西コーナーと石室前面との位置関係から、平面形態は東西15.0～16.0m、南北9.0～10.0mの長方形となる方墳で、周囲には北西から下る尾根の先端を南西～北東方向に断ち切って掘り込まれた、幅6.0m程度の掘割が墳丘の西側そして北側をめぐる。東側は損なわれて原状をとどめていないが、地形からみて尾根の西側と北側の二方を大きく逆L字形に切って、堀割としその南側に墳丘を築いている。

墳丘の盛土はコンクリート擁壁を取り除いて露呈した古墳前面の南側の東西断面（第19図8-8'）と搅乱された墳丘東北部の断面（同図5-5'）によって観察した。東西断面では北西から南東にのびる尾根の先端を北東～南西に断ち切ってある程度の平坦面を確保した後、この平坦面に石室構築の基盤を築く盛土を行なっている（第19図8-8' 断面図198～272層）。また石室周囲では側石を据えた後、その下半を固定させ（173～178層）、上半は何層も薄く土を盛り上げている（139～172層）。墳丘北半部の搅乱部分の断面では層厚2～3cmの粘質土と砂質土を概ね交互に積み上げる版築状盛土を観察できた。

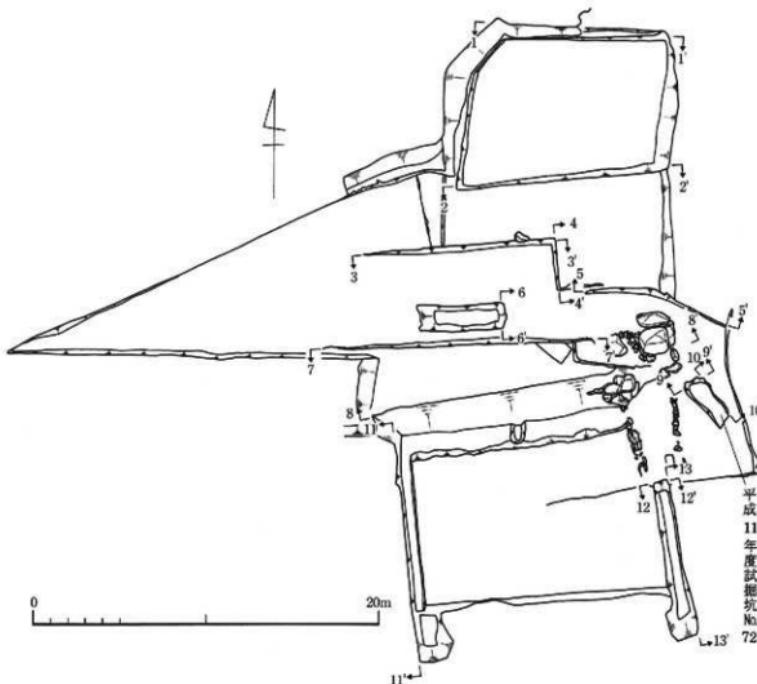
石室 本墳の石室は1つの墳丘に石室を2つ同時に並列して築く双室の形態をとっている。規模、主軸、構造とともに同じ企画のもとに築かれ、墳丘の南北中心軸を挟んで東西に対称的な位置関係をとっている。石室の前面にはそれぞれ排水暗渠が設けられている。

東石室は損壊が激しく、入口天井石とその側石が既に取り外されて、側石抜き取り穴だけがその痕跡をとどめ、また2枚目の天井石は東端がそれを支持する側石の内側に落ち込んだ状態であった。さらにその天井石の西側には盜掘の痕跡と思われる疎溜りがあり、北西側斜め上から盜掘坑を入れて東石室に侵入したことがあったようである。疎に紛れて近世磁器碗（105・106）が出土しているので、18世紀前半にはこの盜掘が行なわれたとみられる。

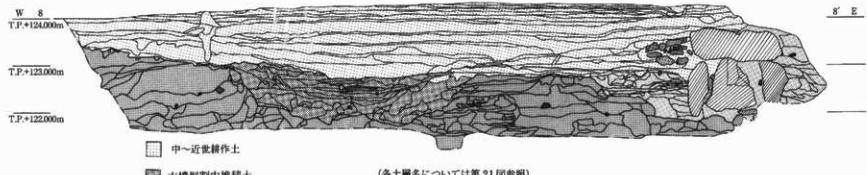
東石室内は天井まで泥土が溜っていたが、筆者が現場に不在の間に、手違いで現場作業員がこの天井石の下の泥土を床面より15.0cmの高さまで掻き出しまっていた。入口の両側石の抜き取り穴の間には板状の凝灰岩の一部が露呈していたが、これが床石の一部であるかどうかはわからない。全体が露出した南から2枚目の天井石の大きさは1.7m四方、厚さ0.8mの自然石であった。厚みが減じる西端の下では、長さ30.0cm、厚み14.0cmの板状の川原石を側石の上に置いて内法の高さを整えている。床面の状態を確認するため10.0cm四方を掘り込むと、床面直上1.0～2.0cmの間に赤色顔料が付着し、その上に2.0cmほどの微砂混じりの粘土が堆積し、それより上は上記の粘泥であった。床石を洗うと暗褐色に沈着した鉄分の付着が確認された。おそらく株原石を使用しているものと思われる。さらに入口から5cm間隔に奥行き2.9mまで鉄ビンにて床面高を探ると、T.P. 122.260～122.277mを計測したので、床面はほぼ平坦であり、床石は完存していることが分かった。

なお石室床面上に堆積した微砂混じりの粘土から長さ2.11mm、径1.69mm、重量0.1g以下の管玉が1点が出土した（図版23）。黒みを帯びた赤色のガラス製で、縦縞がある。石室の奥行きはほぼ2.3mが残る。入口での石室幅は0.9m、高さ0.8mの石櫛状であり、自然石の平坦面を内側にしている。

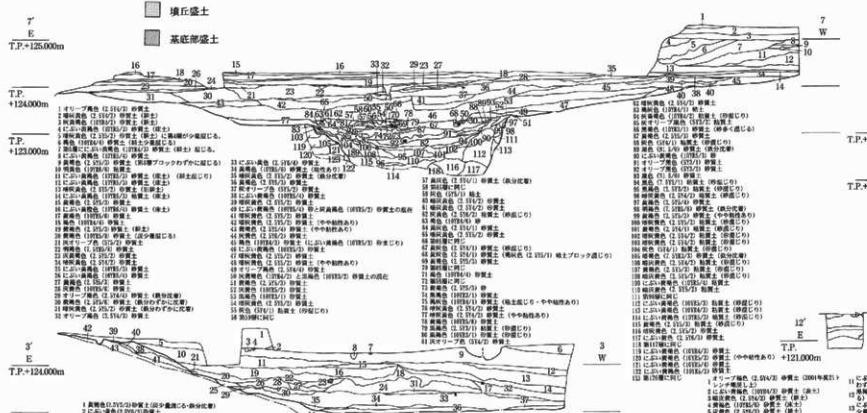
西石室は入口天井石とおそらく2枚目の天井石と思われる一部が露出していた。しかし東石室とは異なり、上部に搅乱の痕跡はなく、入口正面に高さ1.3m、幅1.2mの自然石を立てて塞いだ閉塞石が残っていた。右上隅を0.5m四方に割り取っているので、この部分から盜掘が行われたようである。このように西石室は原形をよくとどめている。天井石幅は約2.0m、厚さ0.7mで、入口の高さは2.0m、左側石は幅0.6m、高さ0.95m、右側石は幅0.4m、高さ1.2mで、閉塞石と両側石の隙間に長さ25.0～30.0cm、厚み10.0～20.0cmの川原砾を詰めている。また閉塞石の右下にも安定を図るために同様の砾がいくつか詰められていた。石室は奥行き3.0m程度とみられ、幅、高さともに1.0m程度で、東石室と同様の石櫛状である。磁北と石室の主軸の北での振れは、東石室がN-6°-W、西石室はN-4～5°-Wと推定され、両石室の中軸線は2.6～2.7mを隔ててほぼ平行している。



第18図 第11調査区平面図



(各土層名については第21図参照)



(各土層名については第21図参照)



5
W
T.P.+124,000m

6
N
T.P.+123,000m

7
S
T.P.+122,000m

8
E
T.P.+121,000m

9
W
T.P.+120,000m

10
N
T.P.+119,000m

11
S
T.P.+118,000m

12
E
T.P.+117,000m

13
W
T.P.+116,000m

14
N
T.P.+115,000m

15
S
T.P.+114,000m

16
E
T.P.+113,000m

17
W
T.P.+112,000m

18
N
T.P.+111,000m

19
S
T.P.+110,000m

20
E
T.P.+109,000m

21
W
T.P.+108,000m

22
N
T.P.+107,000m

23
S
T.P.+106,000m

24
E
T.P.+105,000m

25
W
T.P.+104,000m

26
N
T.P.+103,000m

27
S
T.P.+102,000m

28
E
T.P.+101,000m

29
W
T.P.+100,000m

30
N
T.P.+99,000m

31
S
T.P.+98,000m

32
E
T.P.+97,000m

33
W
T.P.+96,000m

34
N
T.P.+95,000m

35
S
T.P.+94,000m

36
E
T.P.+93,000m

37
W
T.P.+92,000m

38
N
T.P.+91,000m

39
S
T.P.+90,000m

40
E
T.P.+89,000m

41
W
T.P.+88,000m

42
N
T.P.+87,000m

43
S
T.P.+86,000m

44
E
T.P.+85,000m

45
W
T.P.+84,000m

46
N
T.P.+83,000m

47
S
T.P.+82,000m

48
E
T.P.+81,000m

49
W
T.P.+80,000m

50
N
T.P.+79,000m

51
S
T.P.+78,000m

52
E
T.P.+77,000m

53
W
T.P.+76,000m

54
N
T.P.+75,000m

55
S
T.P.+74,000m

56
E
T.P.+73,000m

57
W
T.P.+72,000m

58
N
T.P.+71,000m

59
S
T.P.+70,000m

60
E
T.P.+69,000m

61
W
T.P.+68,000m

62
N
T.P.+67,000m

63
S
T.P.+66,000m

64
E
T.P.+65,000m

65
W
T.P.+64,000m

66
N
T.P.+63,000m

67
S
T.P.+62,000m

68
E
T.P.+61,000m

69
W
T.P.+60,000m

70
N
T.P.+59,000m

71
S
T.P.+58,000m

72
E
T.P.+57,000m

73
W
T.P.+56,000m

74
N
T.P.+55,000m

75
S
T.P.+54,000m

76
E
T.P.+53,000m

77
W
T.P.+52,000m

78
N
T.P.+51,000m

79
S
T.P.+50,000m

80
E
T.P.+49,000m

81
W
T.P.+48,000m

82
N
T.P.+47,000m

83
S
T.P.+46,000m

84
E
T.P.+45,000m

85
W
T.P.+44,000m

86
N
T.P.+43,000m

87
S
T.P.+42,000m

88
E
T.P.+41,000m

89
W
T.P.+40,000m

90
N
T.P.+39,000m

91
S
T.P.+38,000m

92
E
T.P.+37,000m

93
W
T.P.+36,000m

94
N
T.P.+35,000m

95
S
T.P.+34,000m

96
E
T.P.+33,000m

97
W
T.P.+32,000m

98
N
T.P.+31,000m

99
S
T.P.+30,000m

100
E
T.P.+29,000m

101
W
T.P.+28,000m

102
N
T.P.+27,000m

103
S
T.P.+26,000m

104
E
T.P.+25,000m

105
W
T.P.+24,000m

106
N
T.P.+23,000m

107
S
T.P.+22,000m

108
E
T.P.+21,000m

109
W
T.P.+20,000m

110
N
T.P.+19,000m

111
S
T.P.+18,000m

112
E
T.P.+17,000m

113
W
T.P.+16,000m

114
N
T.P.+15,000m

115
S
T.P.+14,000m

116
E
T.P.+13,000m

117
W
T.P.+12,000m

118
N
T.P.+11,000m

119
S
T.P.+10,000m

120
E
T.P.+9,000m

121
W
T.P.+8,000m

122
N
T.P.+7,000m

123
S
T.P.+6,000m

124
E
T.P.+5,000m

125
W
T.P.+4,000m

126
N
T.P.+3,000m

127
S
T.P.+2,000m

128
E
T.P.+1,000m

129
W
T.P.+0,000m

130
N
T.P.-1,000m

131
S
T.P.-2,000m

132
E
T.P.-3,000m

133
W
T.P.-4,000m

134
N
T.P.-5,000m

135
S
T.P.-6,000m

136
E
T.P.-7,000m

137
W
T.P.-8,000m

138
N
T.P.-9,000m

139
S
T.P.-10,000m

140
E
T.P.-11,000m

141
W
T.P.-12,000m

142
N
T.P.-13,000m

143
S
T.P.-14,000m

144
E
T.P.-15,000m

145
W
T.P.-16,000m

146
N
T.P.-17,000m

147
S
T.P.-18,000m

148
E
T.P.-19,000m

149
W
T.P.-20,000m

150
N
T.P.-21,000m

151
S
T.P.-22,000m

152
E
T.P.-23,000m

153
W
T.P.-24,000m

154
N
T.P.-25,000m

155
S
T.P.-26,000m

156
E
T.P.-27,000m

157
W
T.P.-28,000m

158
N
T.P.-29,000m

159
S
T.P.-30,000m

160
E
T.P.-31,000m

161
W
T.P.-32,000m

162
N
T.P.-33,000m

163
S
T.P.-34,000m

164
E
T.P.-35,000m

165
W
T.P.-36,000m

166
N
T.P.-37,000m

167
S
T.P.-38,000m

168
E
T.P.-39,000m

169
W
T.P.-40,000m

170
N
T.P.-41,000m

171
S
T.P.-42,000m

172
E
T.P.-43,000m

173
W
T.P.-44,000m

174
N
T.P.-45,000m

175
S
T.P.-46,000m

176
E
T.P.-47,000m

177
W
T.P.-48,000m

178
N
T.P.-49,000m

179
S
T.P.-50,000m

180
E
T.P.-51,000m

181
W
T.P.-52,000m

182
N
T.P.-53,000m

183
S
T.P.-54,000m

184
E
T.P.-55,000m

185
W
T.P.-56,000m

186
N
T.P.-57,000m

187
S
T.P.-58,000m

188
E
T.P.-59,000m

189
W
T.P.-60,000m

190
N
T.P.-61,000m

191
S
T.P.-62,000m

192
E
T.P.-63,000m

193
W
T.P.-64,000m

194
N
T.P.-65,000m

195
S
T.P.-66,000m

196
E
T.P.-67,000m

197
W
T.P.-68,000m

198
N
T.P.-69,000m

199
S
T.P.-70,000m

200
E
T.P.-71,000m

201
W
T.P.-72,000m

202
N
T.P.-73,000m

203
S
T.P.-74,000m

204
E
T.P.-75,000m

205
W
T.P.-76,000m

206
N
T.P.-77,000m

207
S
T.P.-78,000m

208
E
T.P.-79,000m

209
W
T.P.-80,000m

210
N
T.P.-81,000m

211
S
T.P.-82,000m

212
E
T.P.-83,000m

213
W
T.P.-84,000m

214
N
T.P.-85,000m

215
S
T.P.-86,000m

216
E
T.P.-87,000m

217
W
T.P.-88,000m

218
N
T.P.-89,000m

219
S
T.P.-90,000m

220
E
T.P.-91,000m

221
W
T.P.-92,000m

222
N
T.P.-93,000m

223
S
T.P.-94,000m

224
E
T.P.-95,000m

225
W
T.P.-96,000m

226
N
T.P.-97,000m

227
S
T.P.-98,000m

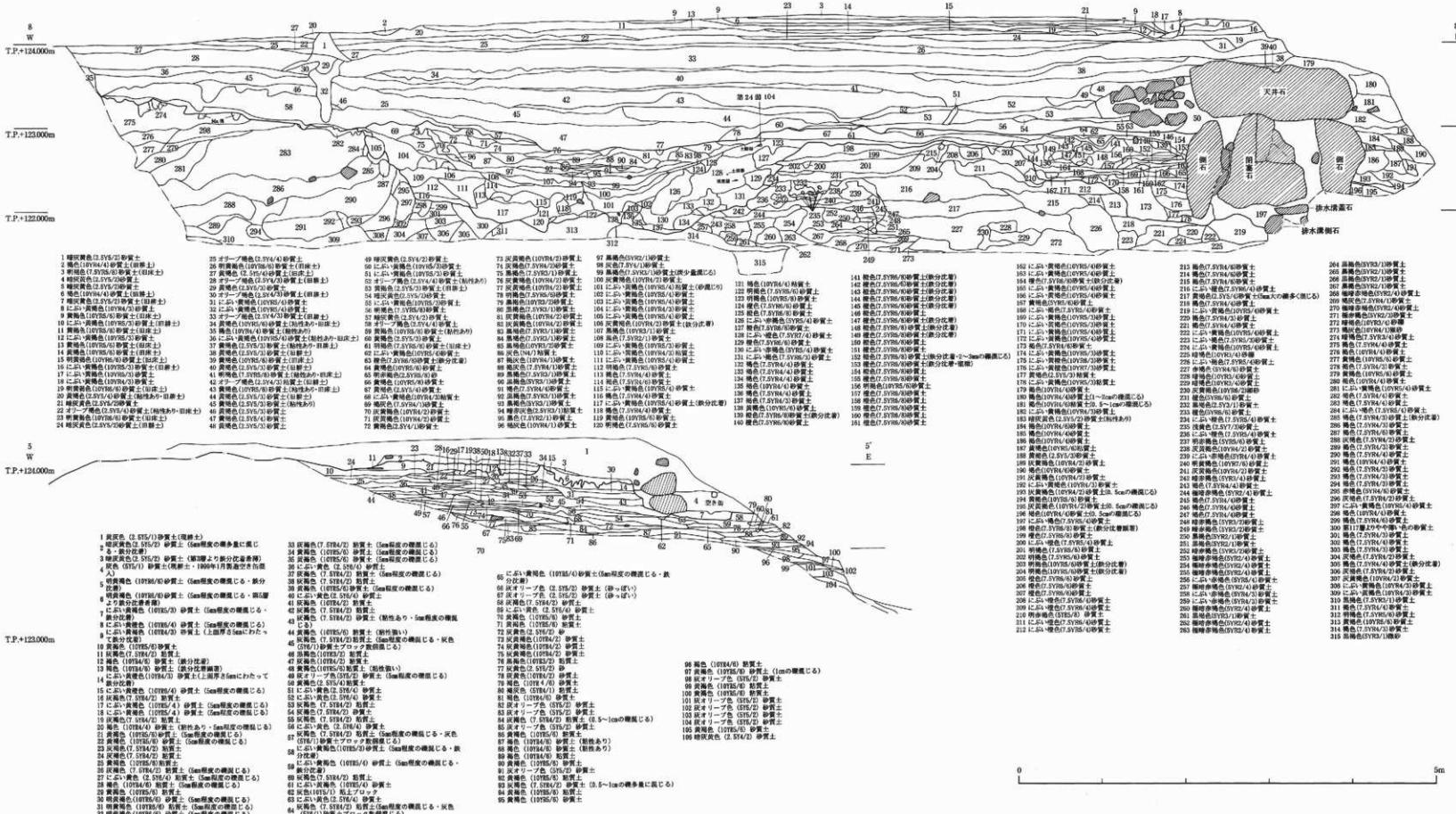
228
E
T.P.-99,000m

229
W
T.P.-100,000m

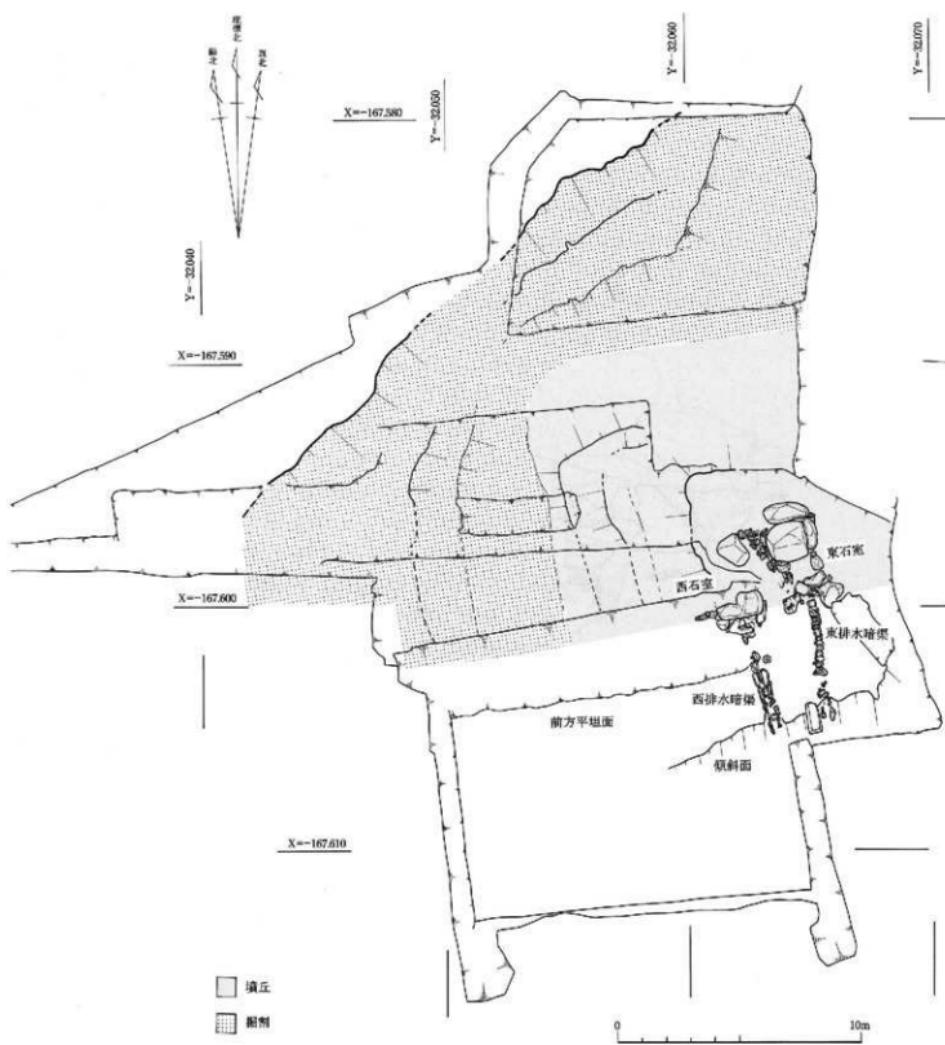
230
N
T.P.-101,000m

231
S
T.P.-102,000m

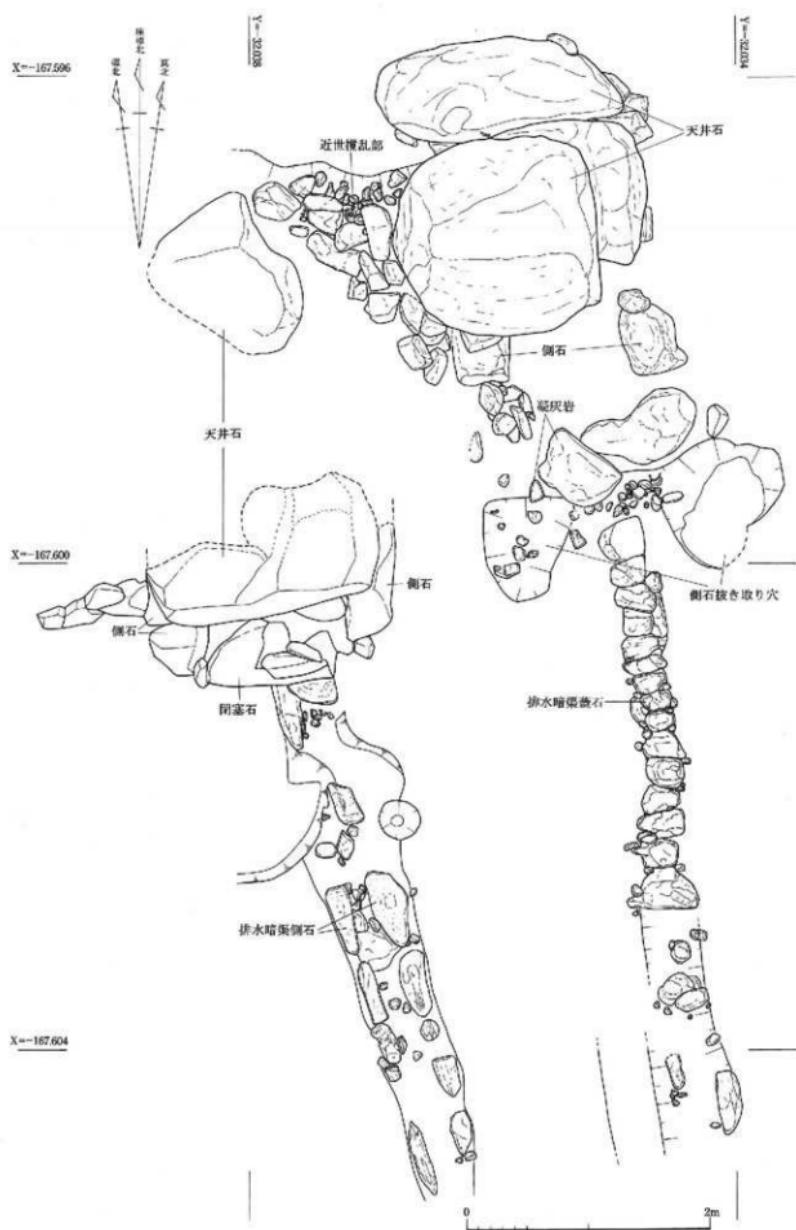
232
E
T.P.-103,000m



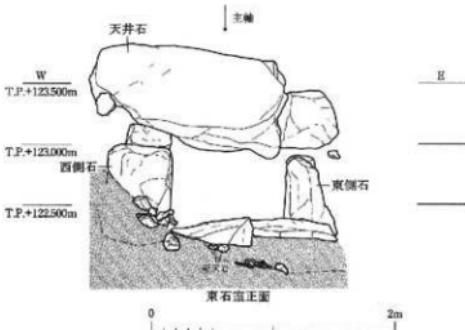
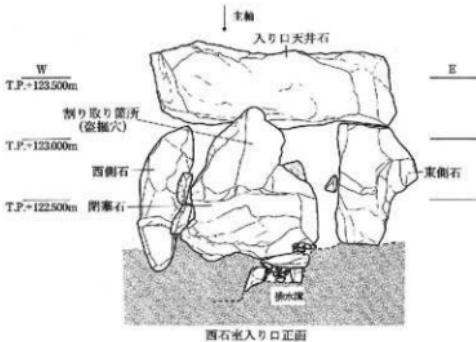
第20図 第11調査区断面図（2）



第21図 第11調査区駕田古墳平面図



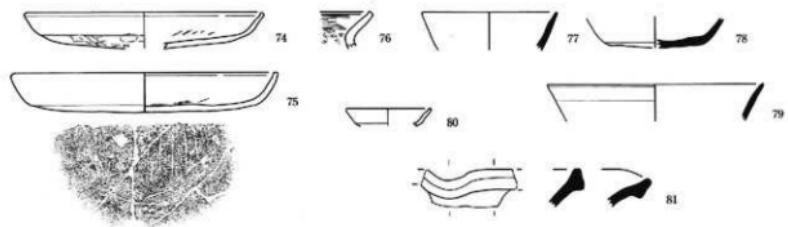
第22図 第11調査区鷺田古墳埋葬施設平面図



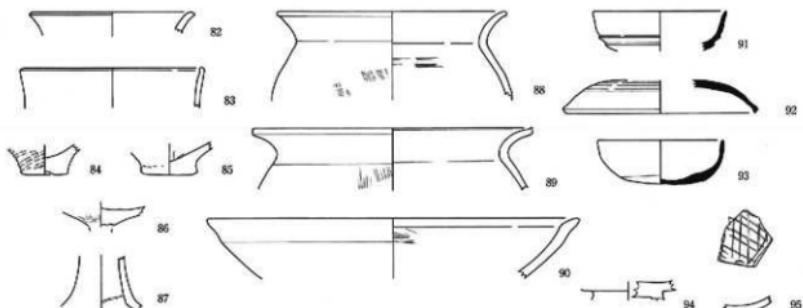
第23図 第11調査区駕田古墳東西石室前方立面図

排水施設 石室前面では耕作土を除去すると直ちに暗渠の蓋石が露出し、排水溝の掘り方上面が現れ、東西両石室の前面に南へ排水暗渠が延びていることが判明した。そしてこの暗渠の途切れるところから南側は傾斜面となっている。東側石室から延びる暗渠は、延長約5.0mで、南端より北へ2.0mの間には既に蓋石ではなく、一部に掘方に据えた側石が残るのみであった。蓋石は長辺25.0～50.0cmの川原石を横長に置いていたが、15個の石が原状をとどめていた。蓋石のない部分では溝の内法は30.0cm程度で、掘り方は50.0～70.0cmである。深さは20cm程度である。

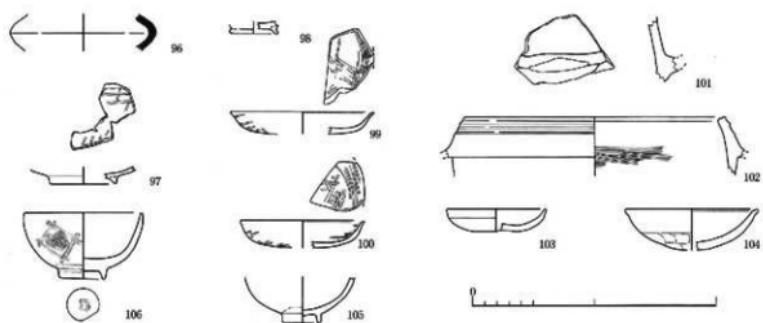
西側石室から延びる暗渠は閉塞石下より南端まで約4.5m、蓋石の残るところはなく、幅55.0～80.0cmの溝の掘り方内側に、35.0～60.0cmの長手の川原石を縦長に置き連ねて側石としている。溝の内法は20.0cm程度、溝の深さは20cm程度である。いずれの暗渠も石室の主軸の延長線上に位置するが、東のそれは中ほどでやや西に振り、西のそれはやや東に振りの傾向が認められる。



第9調査区



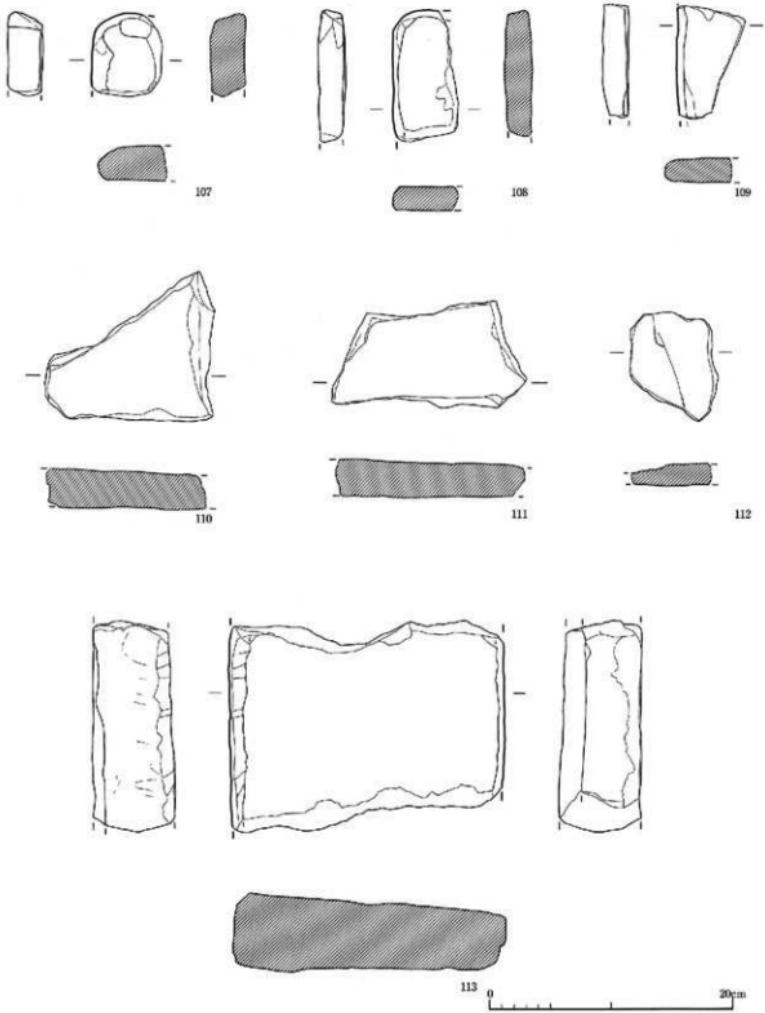
第10調査区



第11調査区

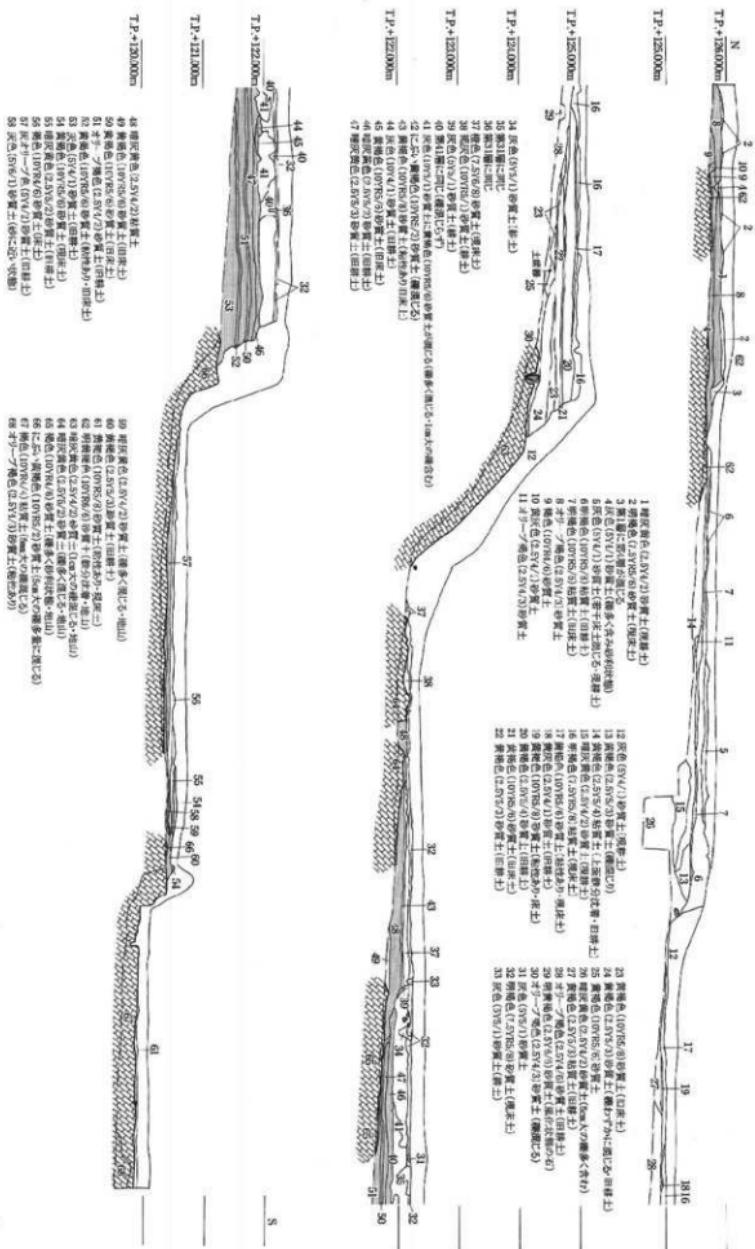
第24図 第9～11調査区出土土器

掘削 幅6.0m、深さは約1.0m程度で、最初に述べたように墳丘の西と北の二方で画されている。南側断面では堀削の底面に最初に崩落したブロック状の土塊（第100～138層）が深さ0.5～0.6m堆積した後、基本的にはレンズ状に堆積を繰り返して徐々に埋没する過程が観察された（第69～99層）。このうち崩落土と思われる第123・128層から土師器・須恵器片が出土した。

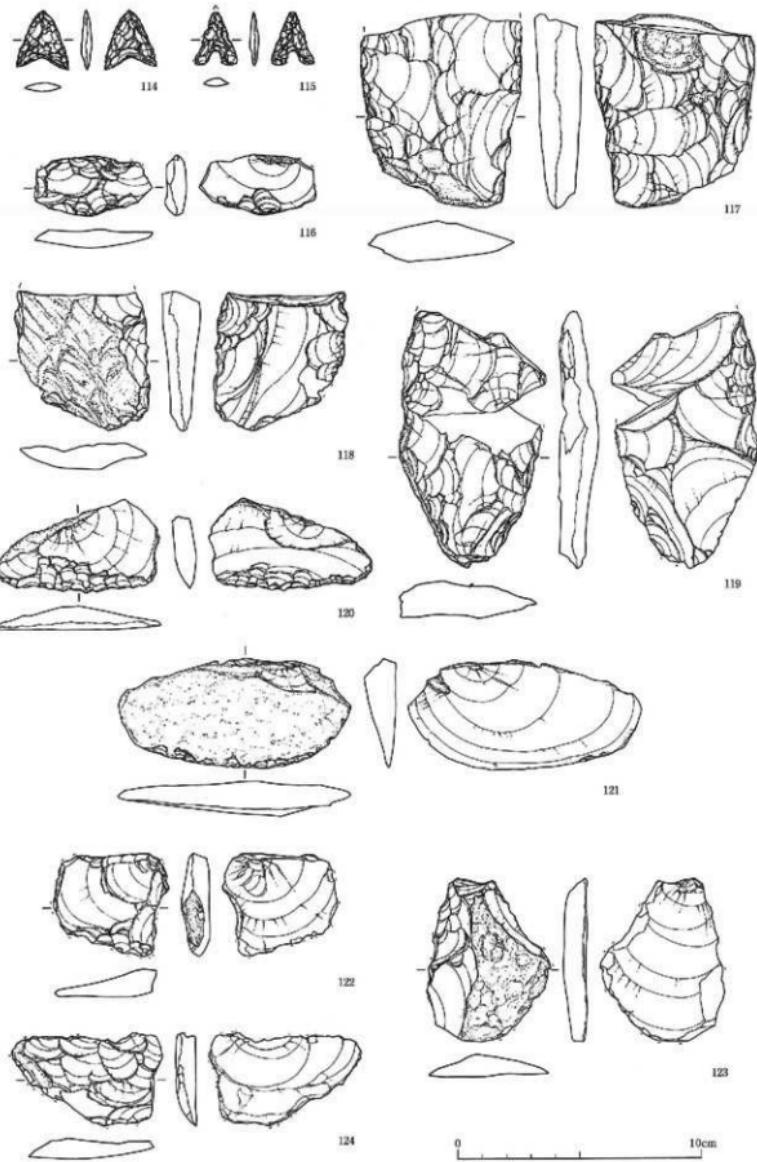


第25図 第10調査区出土標原石

出土遺物 本調査区の出土遺物のうち古墳に伴うものは東石室床面堆積土より出土した管玉のみである。それ以外に堀割の埋没過程で混入した第123・128層出土の土師器・須恵器の破片がある。このうち形態の判明したのは第123層出土の土師器坏身（104）、堀割の北側底面より出土した須恵器小型壺（96）、排水施設の検出された古墳前面の平坦面に堆積する床土出土の瓦器（97・99・100）、土師器壺または鍋の把手（101）、東側斜面の搅乱堆積土出土の瓦質羽釜（102）、そして墳頂部擾乱石溜りの磁器碗（105・106）などがある。



第26図 第12調査区断面図



第27図 各調査区出土石器

第12調査区（第26図）

第1・8・9調査区の東は二ツ釜池より下る谷筋となる。本調査区はその左岸にあたる。この部分は圃場整備により削られ、コンクリートの擁壁が新設される計画であるため、南北方向に調査区を設定した。耕土・床土下は砂もしくは砂質の土壌が堆積し、その下は地山の砂礫土となる。重層する耕作土の堆積が観察されたのみで、遺構・遺物は検出されなかった。

第3章 駕田古墳の石材の石種とその採石地

奈良県立橿原考古学研究所共同研究員 奥田 尚

石室や排水溝に使用されている石材の石種を裸眼で観察した。石種の特徴・石材の採石推定地及び石材の使用傾向について述べる。

A 石材の石種の特徴とその採石推定地

当古墳に使用されている石材の石種は石英斑岩・アブライト・ベグマタイト・細粒黒雲母花崗岩・粗粒花崗閃綠岩・中粒花崗閃綠岩・角閃石黒雲母石英閃綠岩・片麻状中粒アブライト・片麻状粗粒アブライト質黒雲母花崗岩・片麻状中粒アブライト質黒雲母花崗岩である。

石英斑岩：色は淡茶色～灰白色で、粒形が角である。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明、粒径が2~6mm、量が中である。長石は白色、粒径が2~6mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~2mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は岩脈として産する。当古墳の付近に分布する領家式花崗岩中にも岩脈としてみられる。また、当古墳の南方を流れている平石川の川原石にもみられる。

アブライト：割石で、色は灰白色である。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1~2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1~2mm、量が非常に多い。

このような岩相を示す石はアブライト岩脈の岩相の一部に似ている。当古墳の付近に分布する片麻状花崗岩類中に部分的にみられる。また、当古墳の南方を流れている平石川の川原石にもみられる。

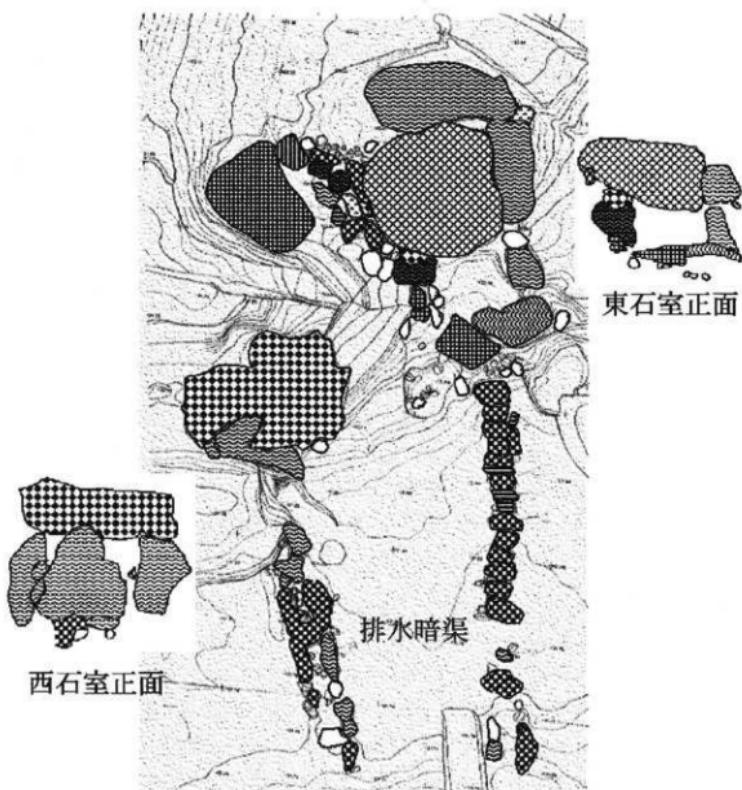
ベグマタイト：色は灰白色で、粒形が角である。アブライトの鉱物粒が粗くなったものである。脈状に粗粒をなして石英と長石が噛み合っている。

このような岩相を示す石はアブライト岩脈の粗粒部の岩相の一部に似ている。当古墳の付近に分布する片麻状花崗岩類中に岩脈としてみられる。また、当古墳の南方を流れている平石川の川原石にもみられる。

細粒黒雲母花崗岩：色は暗灰色で、粒形が亜円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5~1mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1~2mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1mm、量が中である。

このような岩相を示す石は平石付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。当古墳の南方を流れている平石川の川原石にもみられる。

粗粒花崗閃綠岩：色は灰白色、粒形が亜角である。石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2~4mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が3~10mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2~8mm、量が中である。角閃石は黒色、粒状で、粒径が



石種の凡例

[diagonal lines]	石英斑岩
[horizontal lines]	アブライト
[vertical lines]	ベグマタイト
[checkered pattern]	繩粒黒雲母花崗岩
[cross-hatched pattern]	中粒花崗閃綠岩
[diamond pattern]	粗粒花崗閃綠岩
[solid dots]	角閃石黒雲母石英閃綠岩
[wavy lines]	片麻状中粒アブライト
[diagonal wavy lines]	片麻状粗粒アブライト質黒雲母花崗岩
[solid black]	片麻状中粒アブライト質黒雲母花崗岩

第28図 駕田古墳の石材の石種

2~3mm、量がごく僅かである。

このような岩相を示す石は岩橋山から白木谷にかけて分布する花崗閃綠岩の岩相の一部に似ている。当古墳の南方を流れている平石川でもみられる石である。

中粒花崗閃綠岩：色は灰白色、粒形が亜角である。石英・長石・黒雲母・閃綠岩が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1~3mmで、量が中である。長石は灰白色、粒径が2~6mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状・粒状で、粒径が1~3mm、量が僅かである。角閃石は黒色、粒状で、粒径が1~3mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は岩橋山から白木谷にかけての付近に分布する花崗閃綠岩の岩相の一部に似ている。当古墳の南方を流れている平石川でもみられる石である。

角閃石黒雲母石英閃綠岩：色は灰白色で、粒形が亜角である。石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2~6mm、量がごく僅かである。長石は灰白色、粒径が2~8mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2~8mm、量が中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が4~8mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は葛城山に分布する石英閃綠岩の岩相の一部に似ている。採石地としては平石から南方に入る谷で採石された石と推定される。

片麻状中粒アブライト：色は灰白色で、粒形が角である。顯著な片麻状を示す。石英・長石が噛み合っている。石英は淡赤茶色透明、粒径が2~8mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2~6mm、量が多い。

このような岩相を示す石は当古墳の北側に分布する片麻状黒雲母花崗岩の一部にみられるアブライト質部の岩相に似ている。当古墳の北側の谷の石や平石川の川原石にみられる。

片麻状粗粒アブライト質黒雲母花崗岩：色は灰白色で、片麻状が顯著である。片麻状の方向に黒雲母が集中してレンズ状をなして延びている。レンズの厚さは2~5mmである。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2~6mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2~8mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は当古墳の北側に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。当古墳の北側の谷の石や平石川の川原石にみられる。

片麻状中粒アブライト質黒雲母花崗岩：色は灰白色で、片麻状が顯著である。片麻状の方向に黒雲母が集合してレンズ状をなして延びている。レンズの厚さは2~3mmである。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1~5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1~4mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は当古墳の北側に分布する片麻状黒雲母花崗岩の一部の岩相に似ている。当古墳の北側の谷の石や平石川の川原石にみられる。

B 石材の使用傾向

2基の石室に使用されている石材の使用傾向について述べる。

西石室：使用されている石材の石種は細粒黒雲母花崗岩・粗粒花崗閃綠岩・角閃石黒雲母石英閃綠岩・片麻状粗粒アブライト質黒雲母花崗岩である。石材の長径は50cm未満が10個、50cm以上100cm未満が4個、100cm以上200cm未満が3個、200cmより少し長いのが1個である。長径が1m以上ある石材は粗粒花崗閃綠岩・角閃石黒雲母石英閃綠岩・片麻状粗粒アブライト質黒雲母花崗岩である。粗粒花崗閃綠岩は平石付近や南方の山地で、角閃石黒雲母石英閃綠岩は平石の南方の谷で、片麻状粗粒アブライト質黒雲母花崗岩は当古墳の北側で採石されたと推定される。これに対して石室や排水溝に使用されている1m未満の石は当古墳の北側の谷や南方の平石川で採取されたと推定される。

東石室：使用されている石材の石種は石英斑岩・アブライト・ベグマタイト・細粒黒雲母花崗岩・中粒花崗閃綠岩・粗粒花崗閃綠岩・角閃石黒雲母石英閃綠岩・片麻状中粒アブライト・片麻状粗粒アブライト質黒雲母花崗岩・片麻状中粒アブライト質黒雲母花崗岩である。石材の長径は50cm未満が31個、50cm以上100cm未満が5個、100cm以上200cm未満が2個、200cmより少し長いのが2個である。長径が1m以上ある石材は中粒花崗閃綠岩・片麻状中粒アブライト・片麻状粗粒アブライト質黒雲母花崗岩である。中粒花崗閃綠岩は平石付近や南方の山地で、片麻状中粒アブライトや片麻状粗粒アブライト質黒雲母花崗岩は当古墳の北側で採石されたと推定される。これに対して石室や排水溝に使用されている1m未満の石は当古墳の北側の谷や南方の平石川で採取されたと推定される石が多く、平石付近まで行かなければ採石できない角閃石黒雲母石英閃綠岩のような石が僅かである。

観察される限りの石材から2基の石室の石材を比較してみれば、西石室は石材の採石が平石方面にまで及んでいるが東石室では古墳周辺の石材を主として使用されているといえよう。

表1 使用石材の石種と長径

石種	石室名 長径(cm)	西石室				東石室			
		<50	50≤<100	100≤<200	200≤	<50	50≤<100	100≤<200	200≤
石英斑岩						2			
アブライト						6			
ベグマタイト						1			
細粒黒雲母花崗岩	4	2				15	2		
中粒花崗閃綠岩									1
粗粒花崗閃綠岩						1	2		
角閃石黒雲母石英閃綠岩				1		2	1		
片麻状中粒アブライト									1
片麻状粗粒アブライト質黒雲母花崗岩	6	2	2			2	1	1	1
片麻状中粒アブライト質黒雲母花崗岩						1	1		
合計		10	4	3	1	31	5	2	2

第4章　まとめ

本年度もいくつか注目すべき調査結果があった。特筆すべきものは、第11調査区で発見された駕田古墳と第9調査区で検出された石組溝である。駕田古墳は1墳丘に2つの石室を構築するいわゆる双室墳であり、内部調査はできなかったが、シショツカ古墳の北東に接する尾根端を選んで築かれ、両古墳の南北の主軸はほぼ平行する位置関係にある。古墳は東半部の損壊が著しく、墳丘の東側はかなり削られていて、耕土・床土直下が墳丘盛土となる。東側石室の残存状態は悪いが、南側の擁壁を外して得られた断面から墳丘の構築状況がよく観察されたことは大きい成果といえよう。西側石室は一部に盜掘らしき痕跡が認められたけれども、閉塞石が残り、残存状態は東側に比べて良好であった。切石造りではないが、規模や形状などからみて主体部は横口式石槨の形状をとる。古墳前面は平坦面となり、ここに石組み暗渠を築いて排水施設を整えている。平坦面の南は傾斜面となる。一方、東側石室で一部確認したところでは平らに敷いた床石が残り、株原石を使用している点で、平石谷終末期古墳に通有の床石石材を採用しているようである。古墳の時期をとやかく言える資料は得られなかったが、シショツカ古墳との位置関係、シショツカ古墳と共有するかのような背後の山塊、南向き開口の石室、特徴的な石材の使用、これらの点からシショツカ古墳との関連がどうしても否定できない。

第9調査区の石組溝は、これまでの調査ではみられなかった非常に丁寧な造りの遺構であり、一見、官都の遺跡にみられるような印象を受ける。しかし溝底面に敷き詰められた石は割り石が多く用いられ、必ずしも溝底を平坦にしようとしていたわけではなく、むしろ石の継ぎ位を意識して敷き詰め、その結果全体として殊更凹凸をつけている。現在でも水路改修などでは新設のコンクリート溝の底面にわざわざ石を据えて凹凸をつけたものをみかけることがある。おそらく流速を減じるための処理のひとつと考えられるが、この溝も同じような機能をもたせ、排水溝というより積極的に水を引く施設として設けられたものではなかろうか。溝は北20mに控える山塊裾の緩傾斜面に南北方向に設置されている。北端は調査区外の現在の府道敷きの下に及んでいる（註）。平成13年度第15トレンチでは投棄された8世紀代の土器類に紛れて須恵質円筒管の破片が出土した。これは導水管と考えられるものであり、上記の石組溝の存在と併せて注目される。

第10調査区で中～近世の遺物とともに出土した10数点もの株原石の出土は注意される。この調査区も北東から南西にのびる尾根の端部の南面に位置しているが、肝心の北側は調査区外で民有地、そしてその北に府道が東西に通っているから、本来の地形は推し量りがたい。しかし株原石が転落してきたのはその方面をおいてほかには求められない。株原石は少なくともこの平石谷では終末期古墳以外に作るはずのない石材であり、かりに第9調査区の石組溝に混入していたような事例を考慮するにしても、既に述べたようにそれは二次的に紛れ込んだものか、再利用されたものにすぎない。また流土から出土した須恵器無蓋高壺壺部の破片（91）も気になる遺物である。

このような状況からすれば本調査区の北側の尾根端を利用した同時期の古墳が存在した可能性は非常に高い。シショツカ古墳や駕出古墳の立地する尾根と、それより東北東約370mのアカハゲ古墳の立地する尾根とのほぼ中間に位置するこの地点もまた、古墳を築造する場に選ばれたといえるだろう。

その他出土遺物の点では、第3・5調査区で検出した不定形土坑に陶邑Ⅲ型式2段階とみられる須恵器壺蓋が出土していることも、アカハゲ古墳南西90mの同じ尾根に位置する関係上注目されよう。第9調査区の石組溝は8世紀前半とみられるこの時期の唯一の遺構であったが、その他はほとんど中世以来の開墾によって削られた包含層の二次堆積層である。しかし8世紀を中心とする土師器・須恵器は今回も量的にその他の時期の遺物をはるかに超える量である。それは付章の平成13年度のシショツカ古墳周辺のトレンチでの調査結果とも共通する。中世以前の開墾のはじまりがこの時期にあるといえないだろうか。

その他量的には多いとはいえないが、縄文時代や弥生時代の石器類、弥生式土器、古式土師器なども中世包含層から出土することは両年度を通じて変わらない平石谷の調査結果の特徴といえよう。古墳の立地する尾根の部分で古墳時代以前のこのような遺物が出土する傾向は、その当時においても尾根が人間の生存活動に適した地形であった一面を表しているようである。古墳を除去すればおそらく当時の遺構や遺物包含層の痕跡が認められるだろう。いずれにしても古墳時代後期以前の平石谷の土地利用の歴史を語る資料と位置づけられよう。

以上のように、地表に立体的な表徴をはっきりととめる古墳は、中世以降の棚田造成に代表される当地の開発の営みの中でも、それほど激しく改変されることはないが、廃絶後の結果として平面的にならざるを得なかったそれ以外の遺構は削平と盛土を繰り返す棚田の段状整形の過程で、二次堆積層の中にかろうじてその存在の証を残したにすぎない。これも既往の調査結果と共通する現象である。

註) この位置関係の参考となるのは地元の方からうかがった以下の話である。

「小学校の頃（昭和30年代）、現在の幸重機のコンクリートで囲まれたところはもっと下で、今自動販売機が置かれているところには野ツボが見えていた。その付近の現在のカーブのところは急な坂で、地道であり、小学生のとき大八車に弟を乗せて下ってきたが、支えきれず、弟を乗せたまま山沿いの側溝（現在より3mも低かった）に落ちたことがある。その側溝は東から山の縁に沿って流れ下っていたが、この辺りで暗渠が何かになってそこから南に流れていた。その側溝の東のほうにはワンドがあり、そこでよく水を飲んだ。昭和初期に道路が拡張されたが、幅員は今と同じくらいである。道路のアスファルト舗装は昭和38年くらいだった。」

『河南町誌』に「大正二年、府費の補助を得て平石街道三百六十間を道巾九尺（もと六尺）に広げて大改修を実施した。屈曲も大いに少なくなり、ほぼ現在の路線に道がついた。…大正十一年（1922）道路法施行にあたり平石街道は、富田林高田線の名をもって府道に加えられ府費によって改修せられる途が開けた。かくて昭和八年

から大阪府の手で現在の大道路が施工せられたのである。」(同書829頁)とある状況に統く情報である。この調査区の北側に拡張した部分の北壁断面(c断面)には石組溝の東寄りに中世耕土層上面から切り込む形の穠溝がかかっている。ほぼ同じ位置に後世やはり溝をついたことを示している。

参考文献

- 大阪府教育委員会『平石地区・桜山地区発掘調査概要』2000年
大阪府教育委員会『加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要』2002年
大阪府教育委員会『加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・Ⅱ』2003年
大阪府教育委員会『陶邑Ⅲ』1978年
河南町誌編纂委員会『河南町誌』1968年
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』1975年
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976年
中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』1990年
田辯昭三『須恵器大成』1981年
野村豊『水利史料の研究—南河内に於ける水利問題の歴史地理学的研究—』
大阪府農地部耕地課 1953年

最後になりましたが、現地調査に参加した庵ノ前智博、佐藤三和子、進藤智美、周藤光代、田口直人、原田亮子、整理作業に頑張っていただいた東英美子、荒木波子、井上能子、宇沢ヒデ子、江藤豊子、大上馨、大矢ノリ、奥野容子、川東貴子、小門邦代、高田真由美、中辻三沙穂、野崎明美、東野穂澄、二見雅子、細川眞弓、堀口友里、増川順子、松谷文江、村井律子、八柄あさ代、山下美佐子、山田洋子の皆さんには、心から感謝申し上げます。

付章 平成13年度の調査の概要

—シショツカ古墳以外の調査区—

平成13年度の調査の概要については、先に刊行した『加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・Ⅱ』(2003年3月)に、シショツカ古墳の調査結果を中心に報告したが、その際、掲載しきれなかったその他の調査区やトレンチ部について報告する。なお調査経過については、上述書の第2章第2節に述べたので、それに譲りたい。

第2・3調査区（第30・31・35図）

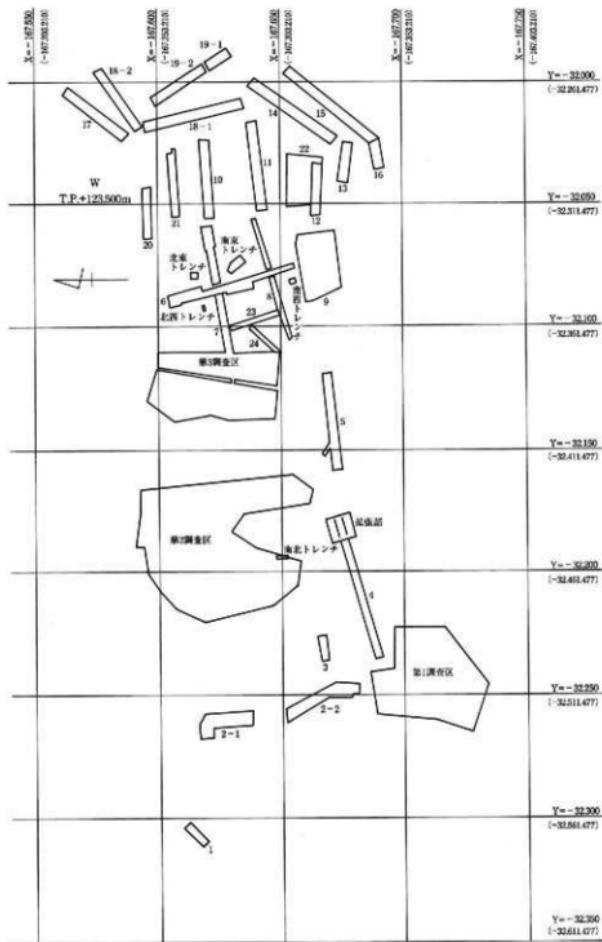
第2調査区 現状は、府道竹内河南線に接するT.P.127.0mから118.0mに下る尾根に築かれた4から5面の棚田である。先端は東西に分岐し、その西側に突出する部分で、棚田造成によって破壊された横穴式石室の残骸を検出した。舌状の尾根の先端のT.P.116.5～117.0m付近で検出した玄室部分の掘り方である。東西4.0～5.0m、南北6.0m、深さは北側で0.5m、南側で0.1～0.2mの残存長を測る。側壁・奥壁の石はすべて抜き取られていた。そのうち左側壁の2石、右側壁の2石、奥壁の3石ほどの抜き取り穴が認められる。石室中軸線は磁北に対して北でN-21°40'-Eで、南の平石谷開口部を望む形で築かれている。平面形状からみて、左片袖の横穴式石室と思われる。石室周辺の等高線の屈曲からみて、墳丘の径約10.0mで、その周囲に幅約2.0mの周溝が巡る円墳であったと考えられる。その他の施設の痕跡はなく、出土遺物もない。輪方向からすると加納古墳群第5・6号墳に近い。出土遺物は棚田造成により盛り上げられた中世耕土層より土師器Ⅲ、瓦器椀、須恵器片（125～127）が出土している。

南北トレンチ 尾根の東側の谷部の状況を把握するために設定した2.0×5.0mのトレンチである。このトレンチでは尾根の東縁に沿うかのようにT.P.116.2～115.2mにかけて堆積する遺物包含層を検出した。包含層からは古式土師器、須恵器の破片（128～130）が出土した。北側の尾根から流れ込んだ状況である。このトレンチの位置は上記の横穴式石室の痕跡が確認された東側に接しているので、あるいはこの古墳に伴う遺物の一部が含まれている可能性もある。

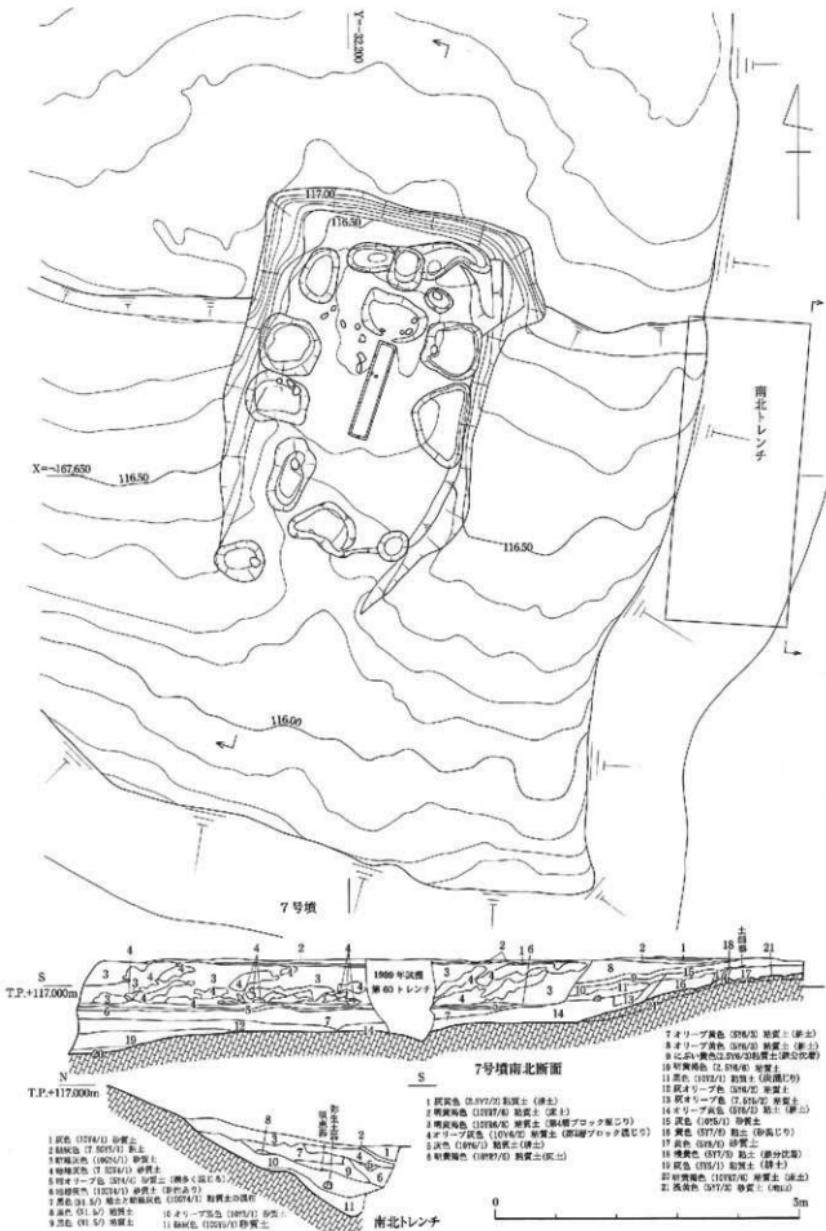
第3調査区 現状は高さ1.5～2.0mの造成田が7段、T.P.127.4m付近からほぼ南に向かって、T.P.115.6m付近に下る棚田である。主として中世以後の開墾により、南に下降する尾根の地山を削って平坦面を作り、削った土を南側の低所に盛って平坦面を継ぎ足すという具合に、前方へ耕地の面積を拡大していく過程が堆積状況からうかがわれた。つまり、棚田の高さは身の丈ほどを確保して、また新たな棚段をその下方に造成するという過程である。ここではこのような造成の痕跡以外に遺構・遺物は検出されなかった。

第1トレンチ（第32図）

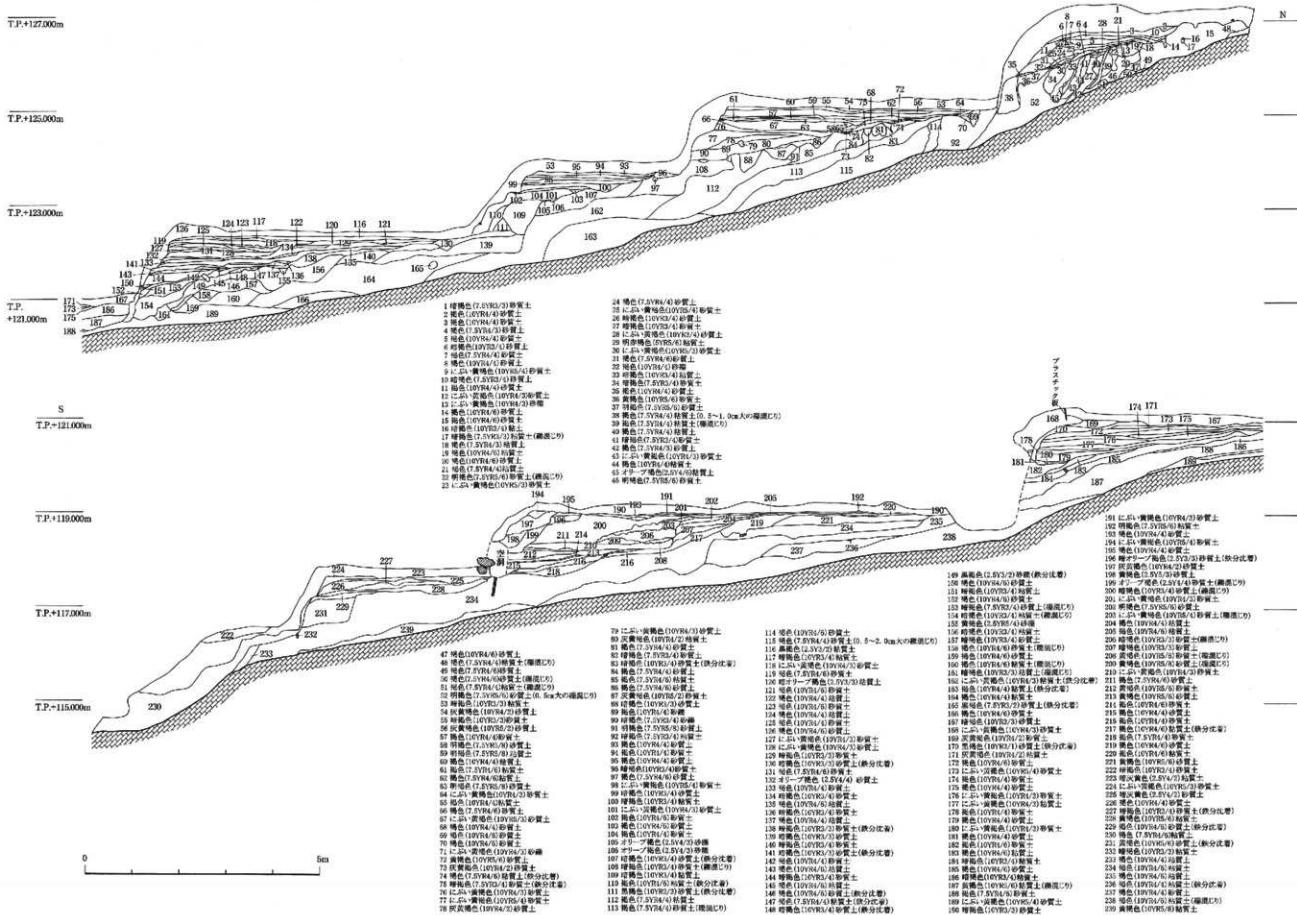
加納古墳群の北西部で、現在の里道の東斜面上に南に延びる痩せ尾根の鞍部（T.P.127.0m付近）



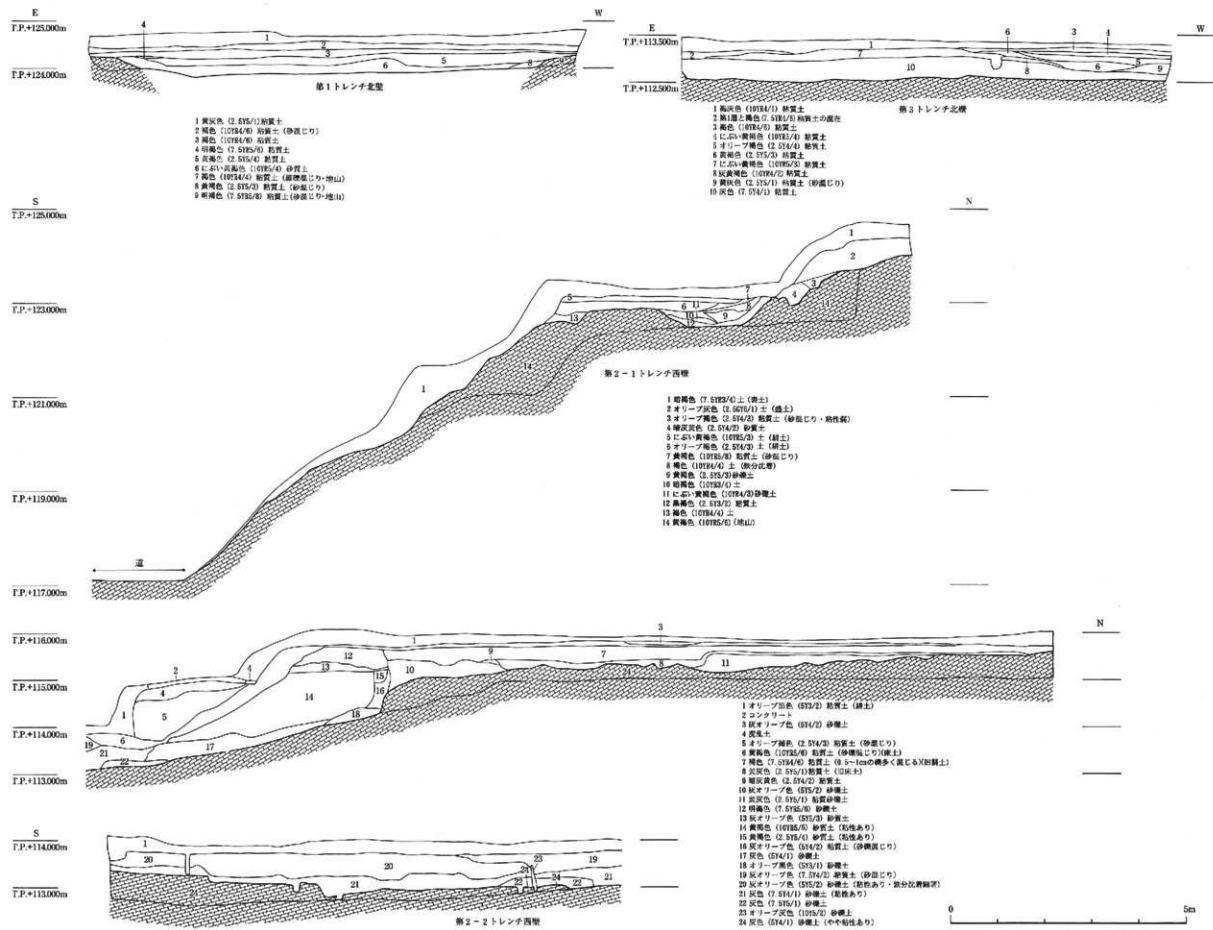
第29図 平成13年度調査区位置図



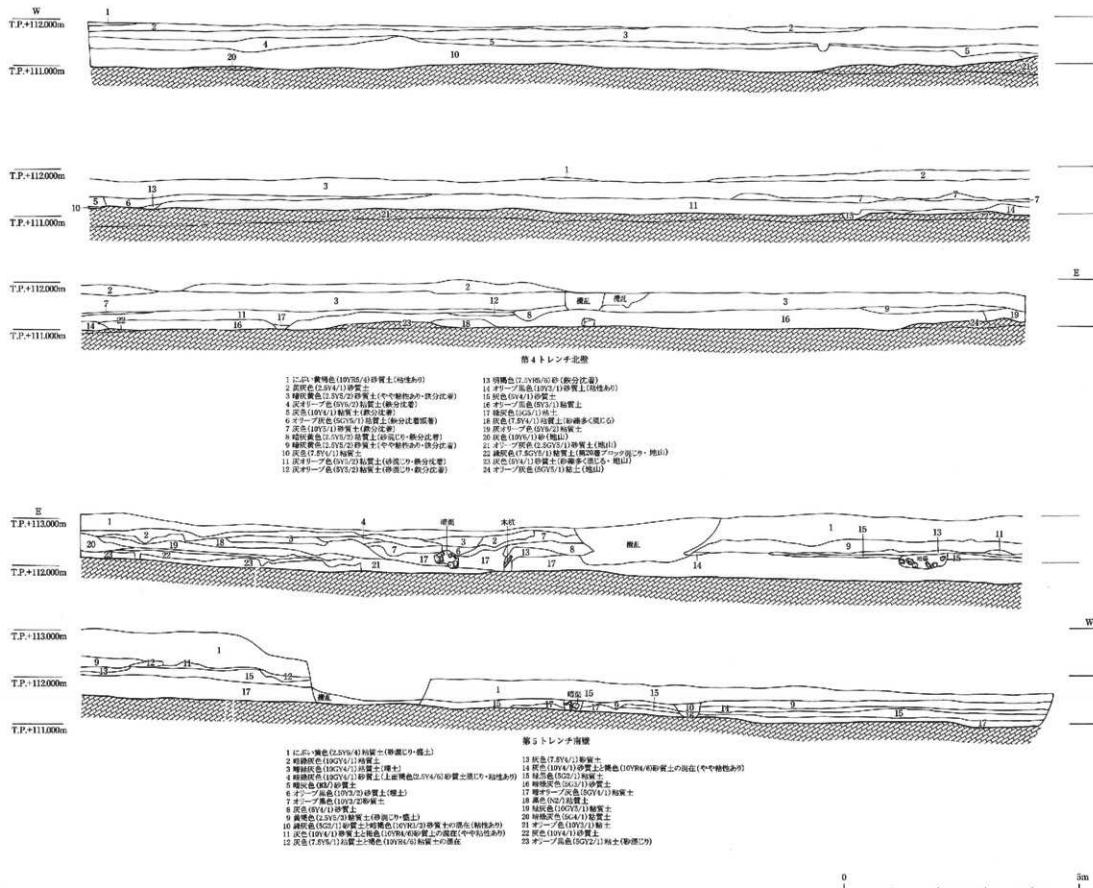
第30図 第2調査区横穴式石室跡平面・断面図



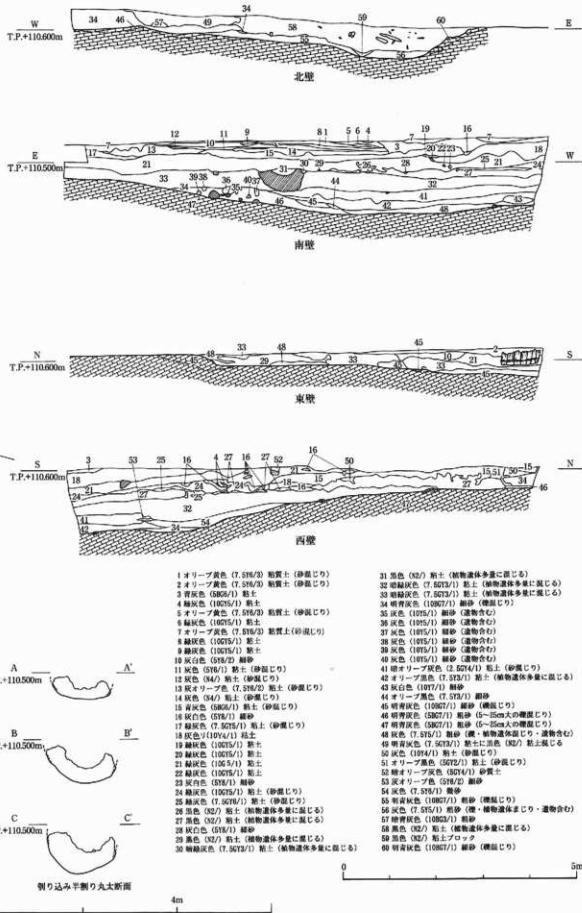
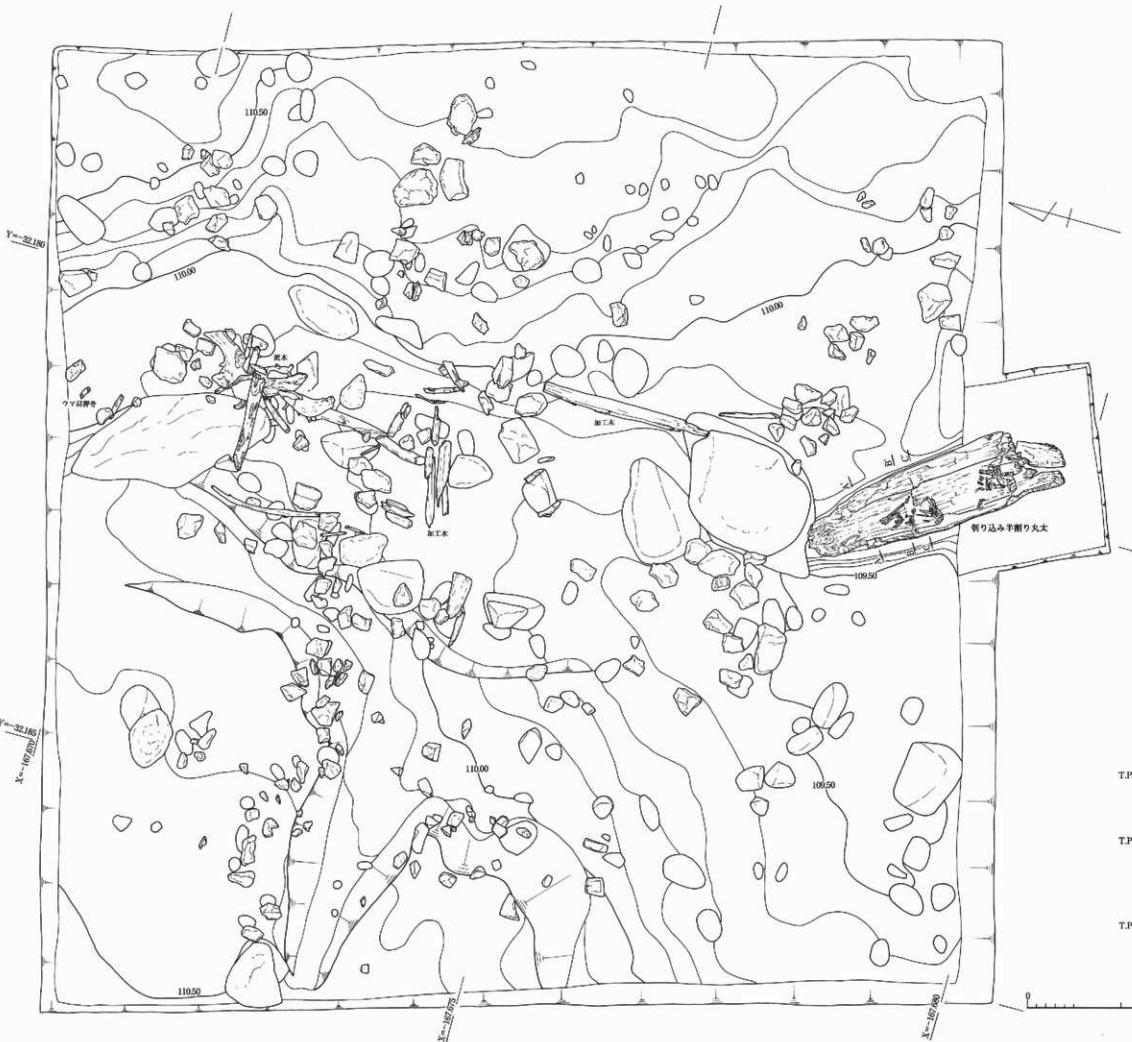
第31図 第3調査区断面図



第32図 第1~3トレンチ断面図



第33図 第4・5トレンチ断面図



第34図 第4トレンチ拡張部流跡平面・断面図

に設定した3.5×11.0mのトレンチである。耕土を除去すると流土となった旧地山層が堆積する。深さ0.7~0.8mで砂礫を含む締まった黄色の地山面に達した。遺物包含層・遺構は検出されなかった。

第2トレンチ（第32図）

第1トレンチと同様、その東35.0mのT.P.124.7mから途中里道を南北に横断する形で設定して、T.P.114.0mまで下る延長55.0m、幅5.0mの一連のトレンチである。里道より北のT.P.120.0mまで棚田造成を反映する盛土が観察され、それらが耕土化した様子がうかがわれる。その耕土の一部から瓦器碗の細片が出土しているので、中世以来の開墾と考えられる。里道より南はT.P.114.5~115.5mにかけてやはり削られた地山土を含む盛土状況が観察される。さらに南下して再度里道を横断する付近では、尾根の基盤層となる地山面がT.P.113.3~113.4mとほぼ一定し、その地山面が南西の加納古墳群1号墳へと続く丘陵へと延びる。このトレンチでは遺構は検出されなかった。

第3トレンチ（第32図）

第2トレンチ東10.0mのT.P.113.4mの田に設定した3.0×10.0mの東西トレンチである。ここは第1ブロックと第2ブロックを分ける旧谷地形の中に位置する。耕土以下の土質は水分を含む粘質土が主体である。遺物・遺構は検出されなかった。

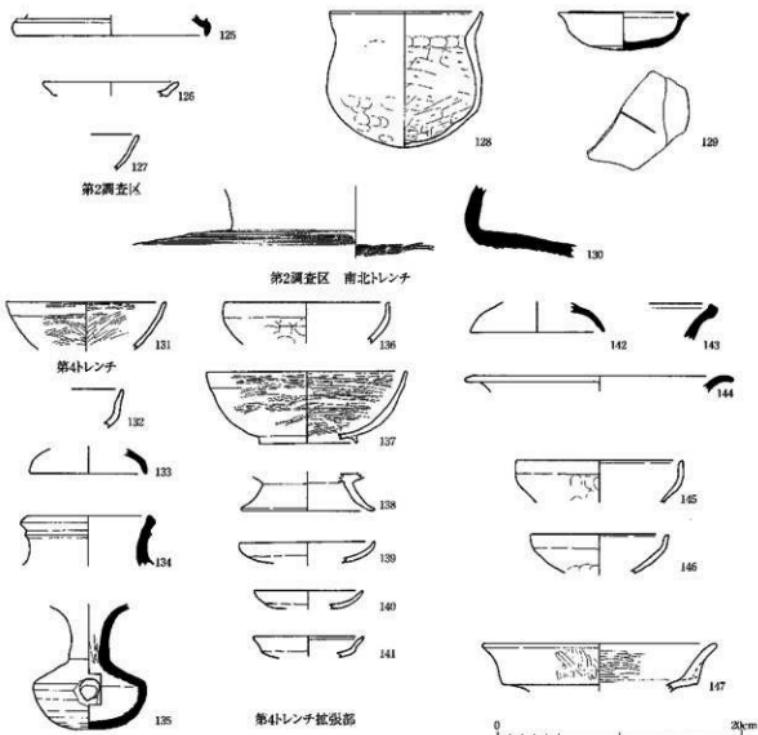
第4トレンチ（第33・35・48図）

第1調査区東のT.P.111.7~111.9mの旧谷地形を横断する形で設定した東西トレンチである。厚さ0.4mの耕土・床土下に谷地に堆積した粘質土がある。耕土以下に灰色系の旧耕土の粘質土層が堆積し、T.P.111.0mで地山の砂質土に達する。これら一連の旧耕土の粘質土（16層）より須恵器・瓦器碗（131）、サスカイト剥片（435）が出土している。

第4トレンチ拡張部（第34・35図）

第4トレンチ東端の第23層で加工した板材の破片が出土した。その破片は遺構に伴うものか、単に遊離して土層に紛れたものか、そのことを確認するため、トレンチの東端に新たに設定した10.0×10.0mの調査区である。

耕土・床土以下で埋没した南北方向の旧谷地形を検出した。上面は北でT.P.110.8~111.0m、南ではT.P.110.9~111.0mを測る傾斜面となる。埋没後はこの地区で一般的にみられる棚田造成と同じく、北を削平して南との落差を除き、平坦な耕作面を築くものである。谷底は北でT.P.110.0m、南ではT.P.109.5mを測る。長さ1.5~2.0mの大石や0.1~0.5mの転石が谷底に散在し、現在の平右谷の川底を思わせるような状況である。北東に砂、南西に粘土を中心とし、かつて流水があったと考えられ、粘土上面からは中世土器、底面近くに堆積した砂からは古式土師器、須恵器などの破片が出土する。トレンチ南壁ではT.P.109.7mから110.3mにかけて堆積する粘土層（32・33層）で、一部に加工痕あるアカマツの半割丸太が南北方向にかかった。よってさらに南に1.1~1.4m拡張したところ、長さ2.8m、厚さ0.5mの材と判明した。この粘土層は谷の底面に激しい流水の痕跡を示す砂の上に位置していた。丸太は山手からの土砂により流され、この地点にとどまって以後、



第35図 第2調査区・第4トレンチおよび拡張部出土土器

滞水状態の中で埋没していったようである。

北向きのアカマツの樹幹の節の部分の厚みは薄く、南端が厚く、自然木が何らかの状況で裂けたように折れたものであり、一定の大きさに切って材を得たものではない。その縦の裂けた面を削って半截状にし、さらにその中央に槽状に削り込みを入れている。削り込みは幅3.0～5.0cmの刃の痕跡をとどめる部分がある。削り込みの凹部には削り屑が多量に残っていた。削り込み部分は幅34.0～47.0cm、長さ18.0cmにわたり、深さは18.0～20.0cmに及んでいる。南端は折れたような断面を呈し、削り込みはその端部では浅くなる。いずれにしても何らかの槽状のものを得るに至る途中放置された状態である。それ以外に大石周辺では長さ1.8m、幅5.0～9.0cm、厚み1.0～1.5cmの板材の破片が散在していた。山裾の谷間で切り出した材木の荒加工を行っていたのかも知れない。その時期は堆積層からの出土遺物によって中世までと考えられる。

出土遺物としては、半削丸太の出土した第32層、その下の第35層と41層から旧谷地形が埋没していく時間的経過を反映する土器が出土している。植物遺体を含む粘土の第32層からは、土師器・須恵器・瓦器など7世紀から13世紀に至る遺物が、砂利を含む粘土の第35層からは7世紀から中世の土師器・須恵器が、細砂の第41層からは8世紀の土師器が出土している（136～147）。このことから8世紀にはまだ流水状態であったが、中世になると谷底に徐々に粘泥が堆積し始め、第32層の粘土堆積後は湿地状態となつたらしい。なお、北壁近くの大石に接してウマの肩胛骨片が出土している。

第5トレンチ（第33図）

第4トレンチ東18.0mに設定した3.0×40.0mの東西トレンチである。厚さ0.4～0.6mの盛土の下に耕土があり、その耕土の下には床土を介して西より11.0～14.0mのところで、北西から南東方向にかけてトレンチを横断する暗渠が検出された。方向はN-42°20' -Eで、幅0.5m、深さ0.3～0.4mで、10.0～20.0cmの砾を敷き詰めている。この地点は第2ブロックと第3ブロックを隔てる小規模な旧谷地形に当たっている。したがって耕土以下は水分を多量に含んだ強い粘性のある土質である。第41層から土師器小皿が出土している。上記の暗渠のほかに遺構は検出されなかった。

第9トレンチ（第36・37図）

第5トレンチの東、シショツカ古墳の前面テラス南側の標高115.3～115.5mの2枚の田に設定したトレンチである。シショツカ古墳の南北方向の第6トレンチの最南端と接する。現状の厚さ20.0～30.0cmの耕土を除去すると、古墳前面テラス裾近くで直ちに暗灰色の粘質土が不定形に拡がる様相を見せたので、その拡がりを掘むため、約400mを拡張した。その結果、2.0×3.0mの不整円形に拡がる落ち込みと2.0～4.0m幅の溝状に南東方向へ延びる落ち込みが確認された。これらの落ち込みの埋土には須恵器・土師器が多く含まれている。

出土土器の内容は、シショツカ古墳前面テラス先端（第6トレンチ南端）から続く一連の搅乱盛土出土の土器と似た状況であり、おそらく一連のものと思われる。しかしテラス裾部直下よりやや離れた南側平坦面で検出された遺物のほうは、本来第9トレンチの位置に掘り込まれた土坑や溝から出土した遺物である。いずれにしてもこれらの遺物はシショツカ古墳の前面に存在したと考えられる何らかの遺構との関連が強い。なお、本地点は圃場整備事業の盛土部分に当たっているため、損壊を免れるところがあるので、遺構の発掘は検出にとどめ、埋め戻した。

第10トレンチ（第39・48図）

シショツカ古墳の東の里道を挟んだT.P.126.5mの田に設定した3.0×30.0mの東西トレンチである。里道から東4.0mは現在のコンクリート舗装にする際の工事によって搅乱され、深さ0.6mで地山層に及んでいる。0.3～0.4mの現耕土・床上の下は地山面であり、南では若干低くなり、そのレベル差を解消して平坦面とするために嵩上げされた旧耕土のブロックを含む整地土（南壁断面図第5・6・8・9層）がこの地山面上にある。地山面では2.0～3.0m、深さ0.3～0.4mの落ち込みがいくつか



第36図 第9トレンチ平面図

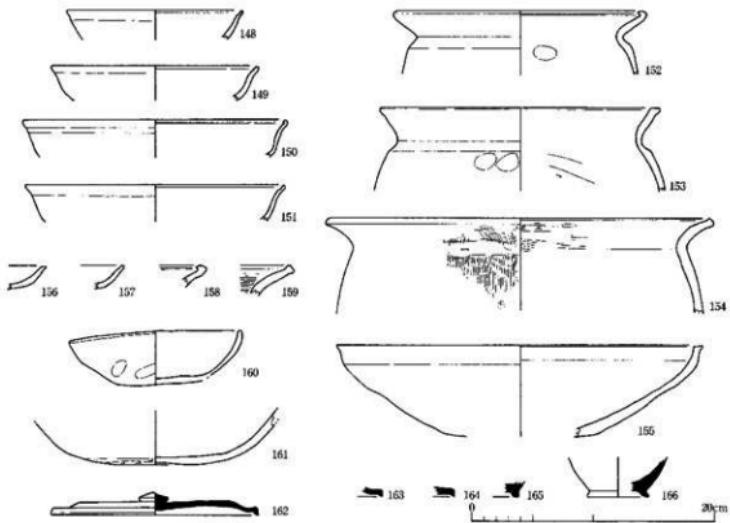
見られ、土師器細片を含む部分もあった。北壁断面に示した第12層からサスカイト製削器（436）が出土している。

第11トレンチ（第40図）

第10トレンチ南の標高119.2mの田に設定した3.0×36.0mの東西トレンチである。西端から東0.3mまではやはり里道の工事によって現地表面から深さ0.9mまで搅乱されている。厚さ0.4mの耕土・床土を除くと、暗い褐色の粘質土（第3・4・16層）が現れ、これを除くと西側で0.6～0.8m、深さ0.2mのピットが2箇所に認められ（第7・8層）、炭粒・土師器細片が含まれていた。これらのピットは第5層上面より掘り込まれているが、この層自体も地山とは認めがたく、その下位にある砂質土（第6層）が地山と思われる。

第12・22トレンチ（第38・39図）

第11トレンチ南、第9トレンチの東の標高116.0mの一枚田に設定したトレンチである。厚さ0.2～0.4mの耕土の下には0.4mの盛土があり、その下に部分的に包含層を残す箇所があり、土師器・須恵器など遺物の出土を見た。またピットと思われる斑状の落ち込みを認めたので、トレンチを北側へ拡張し、この一枚田をほぼカバーする315.0m²の範囲で遺構の分布を精査することとした。この拡張部を新たに第22トレンチと呼称したが、ここでは両トレンチを一括して説明する。

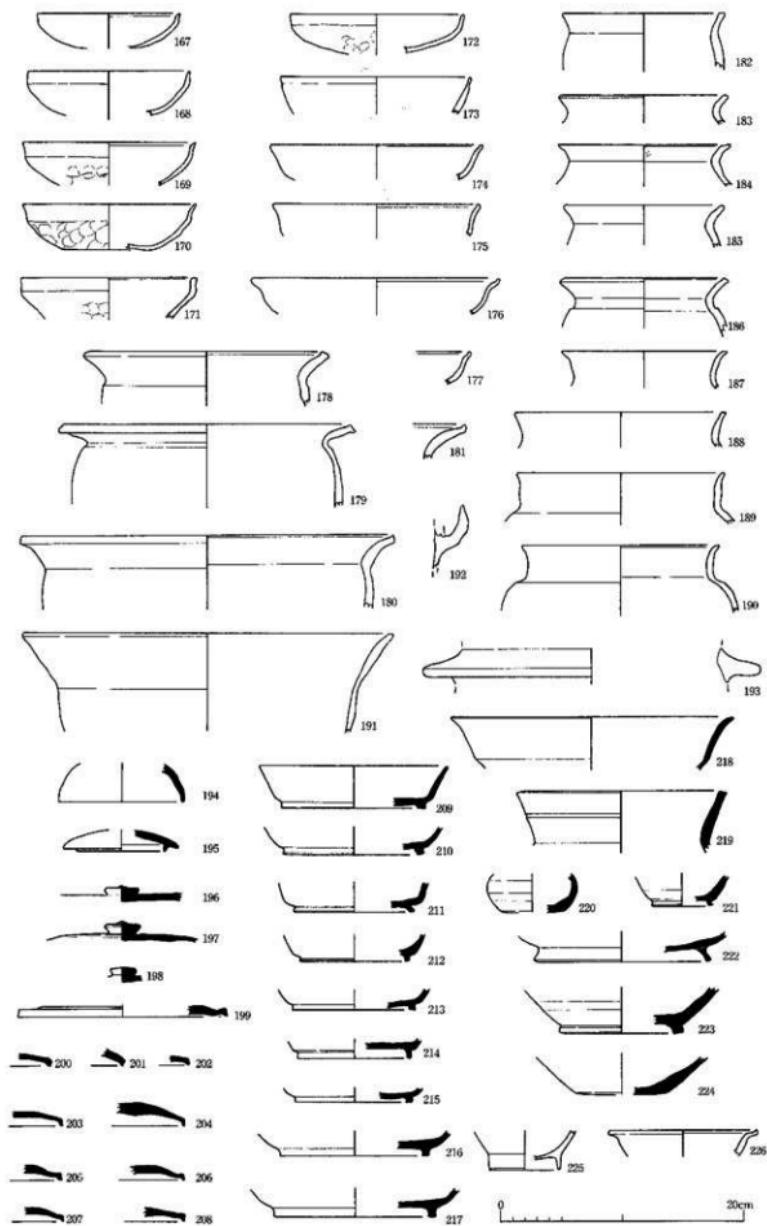


第37図 第9トレンチ出土土器

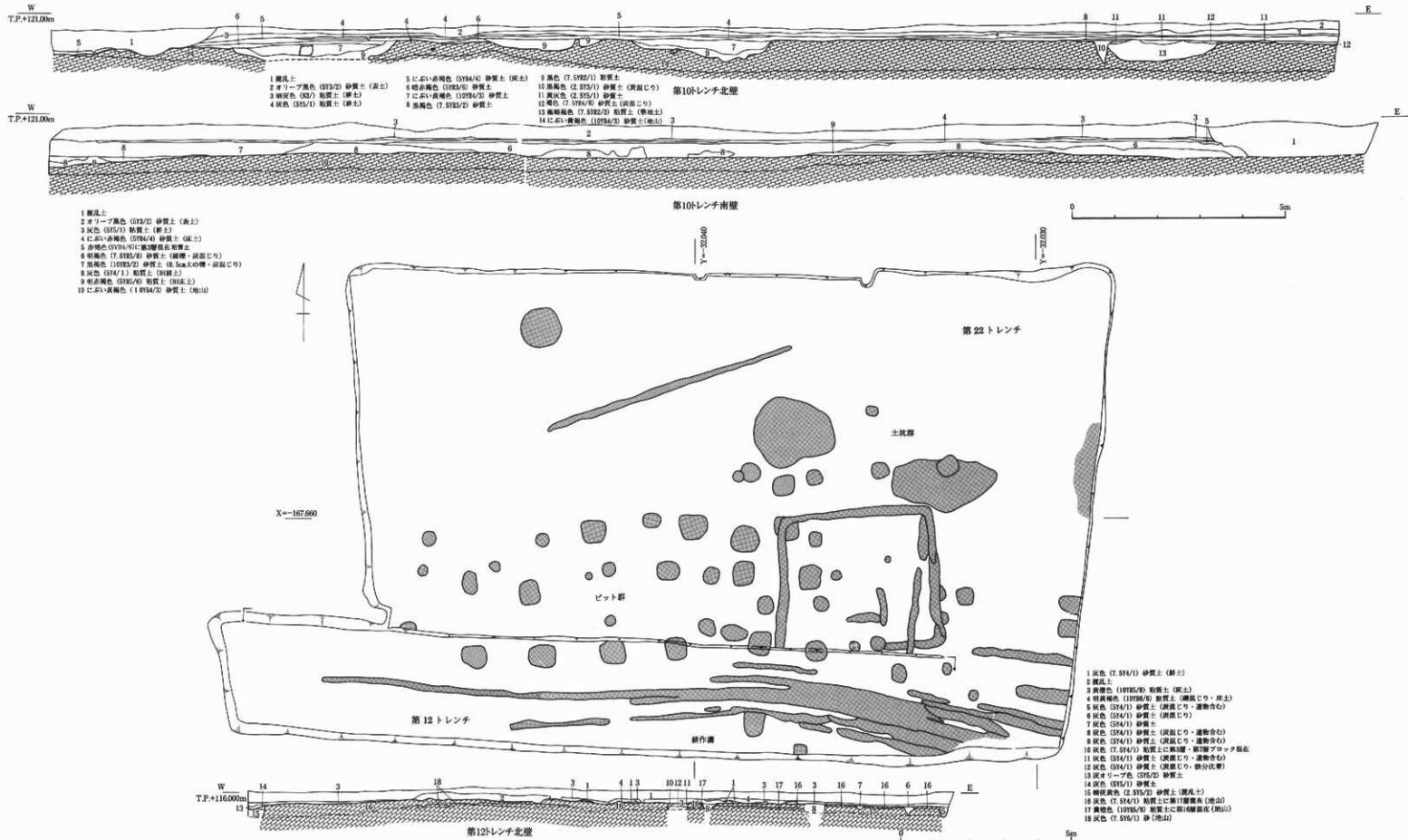
拡張し、耕土・床土を取り除いた結果、北側では耕土下は黄色沙礫の地山で、南の盛土は北側を削平した土を南の低所の嵩上げに使用し水平な耕作面を造成したことが分かった。地山面は南側でT.P.115.4m、北側でT.P.115.7mと南に緩やかに傾斜するが、南半分を中心にピット、土坑、溝などが集中して検出された。遺構検出の過程で土師器・須恵器・瓦器などが耕土や搅乱土からコシテナ2箱程度採取された。破片の残存状態から見てこれらの遺物の大半は、検出された遺構から遊離したものとみられる。

遺構は時期の異なるものが重複している状況である。まず、トレンチ南辺に沿って方形の柱穴の掘方をもつ建物（2間×3間以上、1辺0.5～0.7m、東西柱間1.9～2.3m、柱間2.15～2.16m）およびこれに関連すると思われる同規模の柱穴が注意される。これ以外に径0.4～0.5m円形ピットもあり、別の建物があったかも知れない。これらの建物位置からやや北に離れて2.0～3.0×1.5～2.0m不定形な土坑がある。そしてこの土坑とさきほどの建物との間に掘り込まれた幅0.4～0.6mの溝で囲まれた一辺4.0～5.0m方形区画がある。

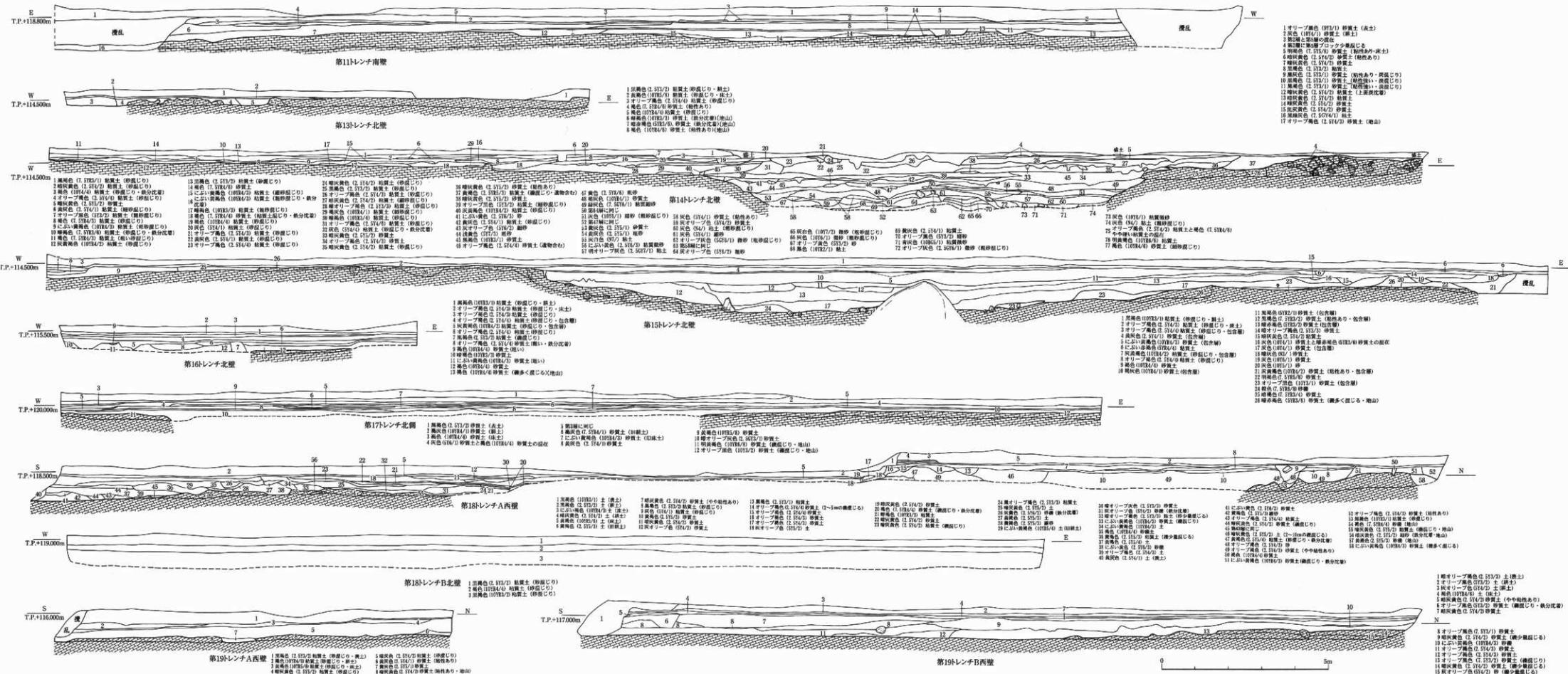
方形建物の東西辺は磁北に対してN-94°-E振れている。区画溝もほぼ同じ方向である。円形ピットの建物の規模は分からぬ。これらの遺構の後に掘り込まれるのが、土坑群であり、またトレンチ南辺沿いの東西掘溝群である。北側にも南側の掘溝と方向を異にする掘溝がある。これらの遺構のうち最も注意される方形の柱穴掘方をもつ建物は、出土遺物からみて8世紀代と考えられる。とすれば第9トレンチで検出された溝状落ち込みや不定形土坑と同時期ということになる。なお、これらの遺構は圃場整備の際には盛土部分にあたり、損なわれることはないため検出面で調査を終え、埋め戻した。



第38図 第12・22トレンチ出土土器



第39図 第10・12・22トレンチ平面・断面図



第40図 第11・13~19トレンチ断面図

第13トレンチ（第40・41図）

第12トレンチ南のT.P.114.9m田に設定した3.0×15.0m東西トレンチである。厚さ0.2～0.3m耕土・床土を外すと砂質土の地山層となる。トレンチ西端から2.5mの間はこの地山面上に粘質土・砂質土の堆積がみられる（第3・4層）。これらの土層から須恵器片が出土している。遺構の疑いあるものはこれらの上層の上面から掘り込まれた第6層を埋土とする不定形な落ち込みであるが、出土遺物はなかった。出土した須恵器（227～229）は8世紀代を中心とするものであり、北側の第12・22トレンチの調査結果と似ている。

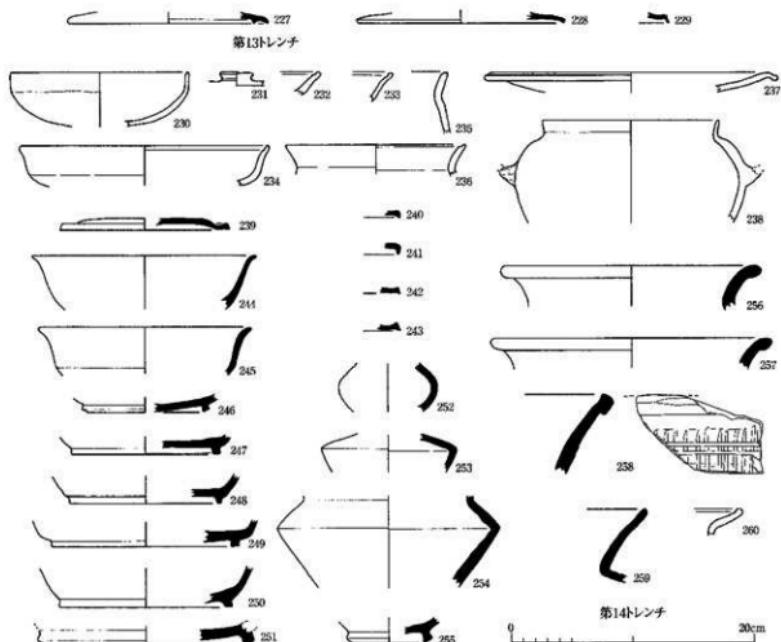
第14トレンチ（第40・41図）

第13トレンチの東北に接し、第3ブロックの東を限る谷地形の左岸斜面に当たるT.P.114.9m棚田に設定した3.0×41.0m西トレンチである。0.3～0.5mの土・耕土・床土などを除くと、西でT.P.114.4m、東T.P.114.8mから落ち込む旧谷地形の埋没跡が検出された。砂層に礫や植物遺体を含む流水堆積を示し（第13・14・20～22・24・26・33～40・45・46・49～77層）、下層では10.0～40.0cm大の川原石の流れ込みもみられる。谷の幅は25.0mで、深さは1.3～1.5mまで掘り下げたが、遺物は深さ0.8m以下ではまったく出土しない。すなわち、遺物は第22層以下第50層にわたって集中的に出土し、同時にこれらの土層の堆積後、この谷地形がほぼ埋没し、その後はそれまでの砂層とは異なり、粘質土が溜まって西側の平坦な耕作面が形成されていく。

出土遺物の大半は8世紀代の土師器・須恵器であるが、これにわずかながら近世遺物が混在する。以上のような状況から判断すると、近世の開墾に際して遺構や遺物包含層は大規模に削り去られたと考えられるが、いずれにしてもこれらの遺物は第12・22トレンチで検出された遺構に伴うものであろう。

第15トレンチ（第40・42～45図）

第14トレンチの南の一段低いT.P.113.6mの田に設定した3.0×45.0mの東西トレンチである。厚さ0.2～0.4mの耕土・床土の下ではトレンチ西端から14.0m東で第14トレンチで検出された谷の西肩が認められる。東端は西に向かって4.0m間が後世の搅乱があるので、東肩は検出されない。おそらく東は現在の谷地形の中に収束されてしまうのであろう。この流水堆積層の深さは1.3～1.5mを測り、底面には径2.3m、高さ0.8mも立ち上がる大石が露呈するところや、0.2～0.5mの転石が散在する。谷が埋没し終える頃、砂質土が水平に堆積して現在の棚田の基盤を整えるが、それ以前は砂・砂礫の堆積の繰り返しだ。遺物は、床土下の第4・5層の粘質土と、それ以下の砂・砂質土である第9～15・17層、地山の礫を多く含む砂質土の底面まで全体にわたって出土する。その数量はコンテナにして約5箱である。第13・14トレンチと同様、第12・22トレンチの遺構に関係する遺物と思われる。ここではこれらの遺物とともに中世の土師器皿なども出土している。周辺一帯が中世に棚田造成された際に、建物の存在する第12・22トレンチの高所から投棄された可能性が高い。



第41図 第13・14トレンチ出土土器

第16トレンチ（第40・46図）

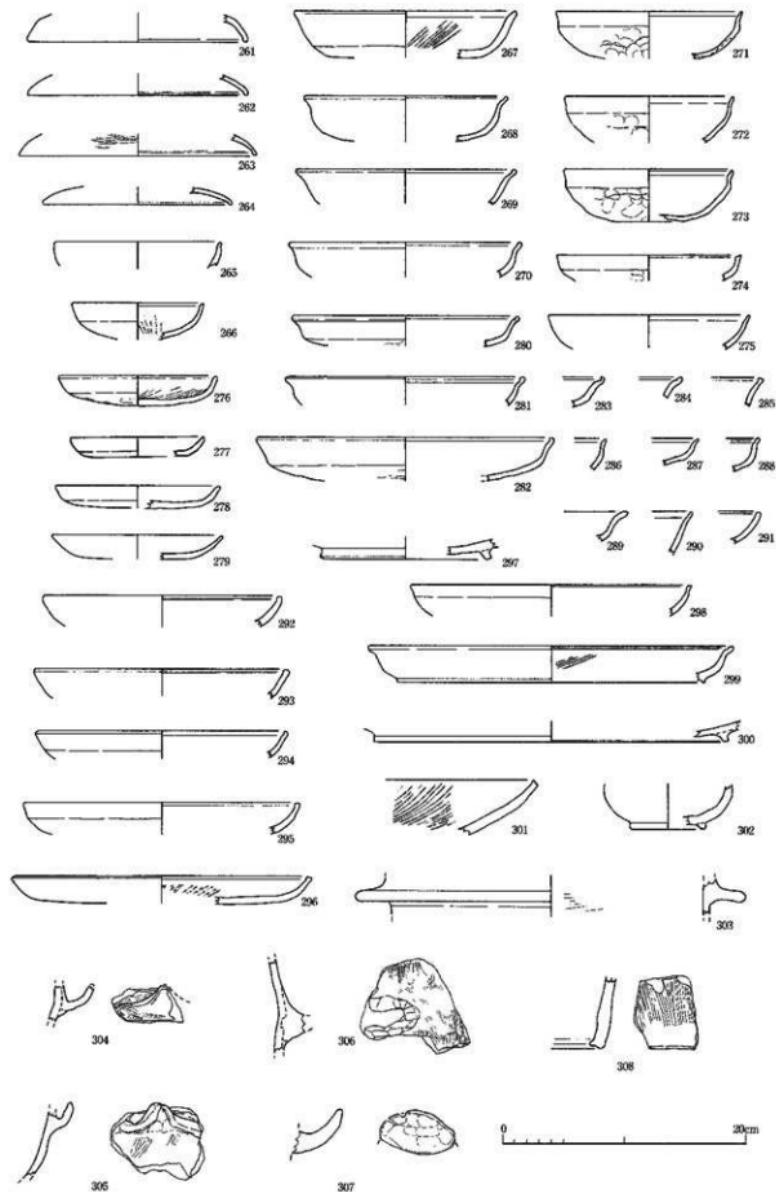
第15トレンチの西端に統けてT.P.113.5mの田に設定した3.0×10.0mのトレンチである。厚さ0.3mの耕土・床土を除いて厚さ0.2~0.4mの遺物包含層が確認された。わずかながら土師器・須恵器の破片を含んでいる。この包含層の下に長さ1.4mにわたって砂質土を埋土とする落ち込みが検出されたが、これには出土遺物はない。出土遺物や包含層の堆積状況から見て第13トレンチと同様、第12・22トレンチで検出された遺構に関連する遺物の散布範囲に入ると思われ、その西の端にあたるので量的には希薄になるのだろう。

第17トレンチ（第40図）

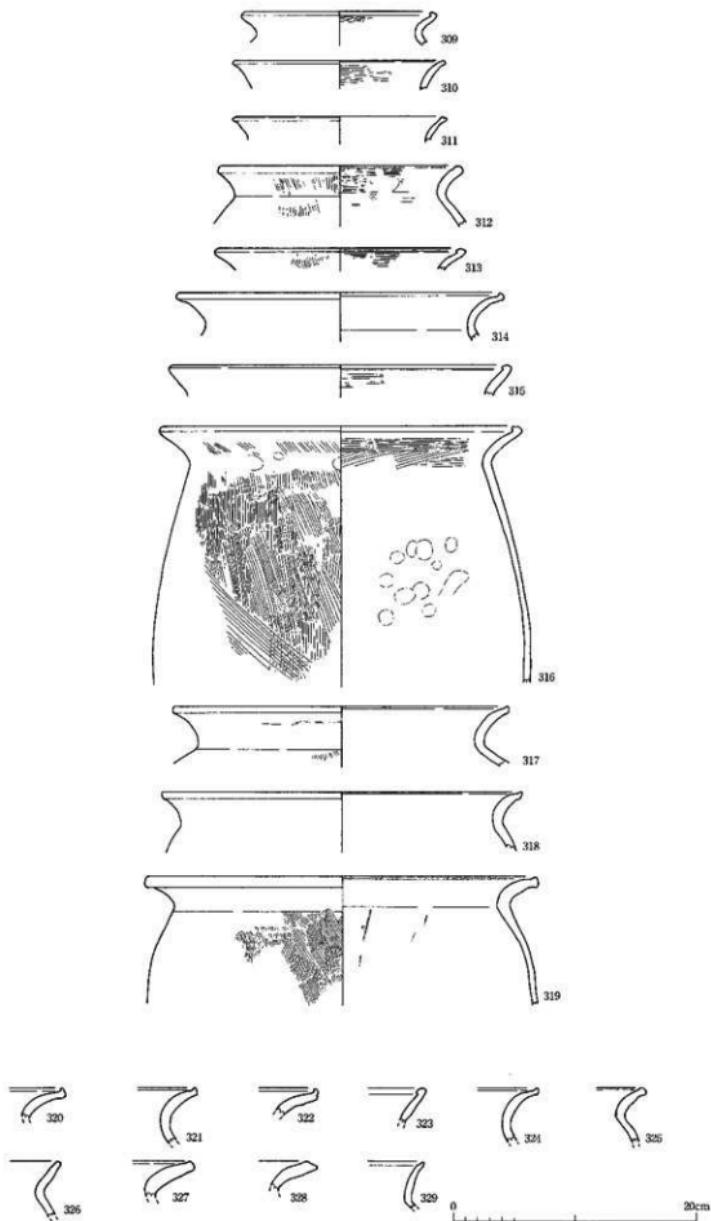
第3ブロックの東の谷地の斜面のT.P.120.2~120.4mの棚田に、北東~南西方向に設定した3.0×30.0mのトレンチである。厚さ0.2~0.5mの表土・耕土・床土の下は西側約4m間では深さ0.1~0.4mで砂礫の地山が確認されるが、これより東は急激に傾斜する。代わってその地山と耕土までの間には暗い黄色の砂質土が堆積する。出土遺物や遺構は認められない。

第18トレンチ（第40図）

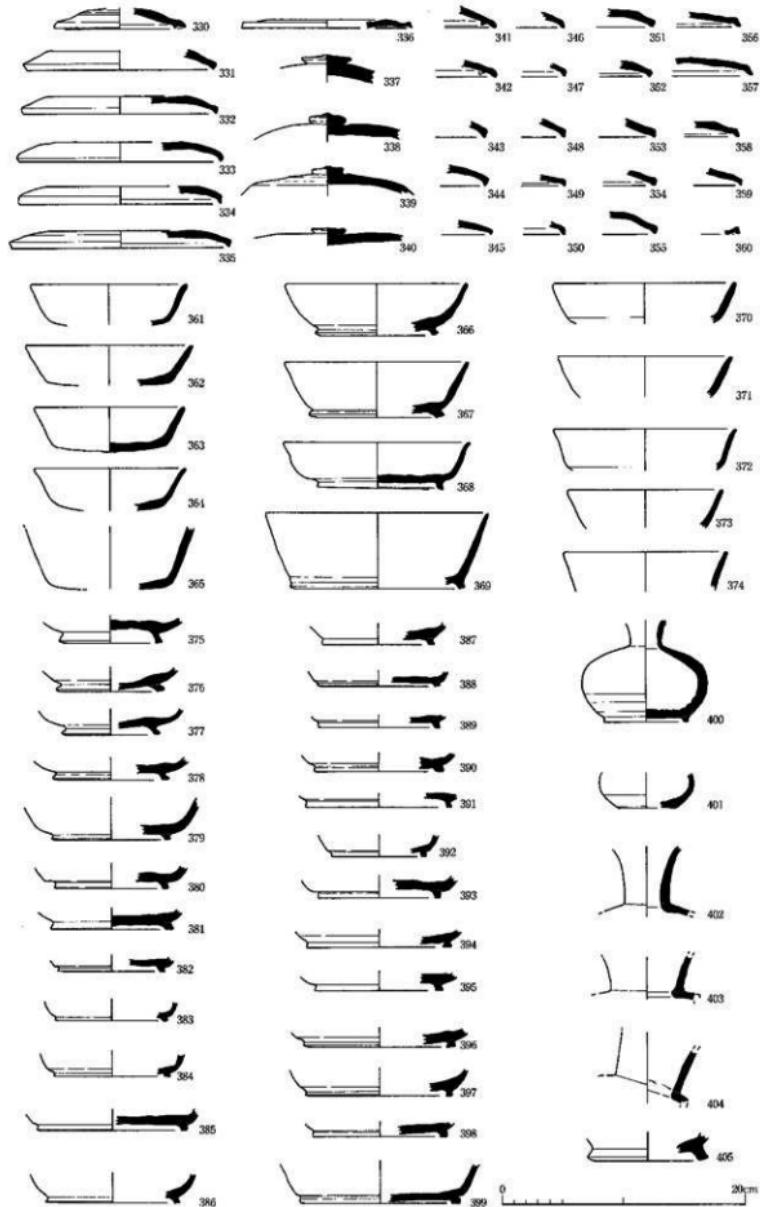
第17トレンチの南の棚田に設定したトレンチで、第18-Aトレンチと第18-Bトレンチの方向を若干異なる2箇所のトレンチである。



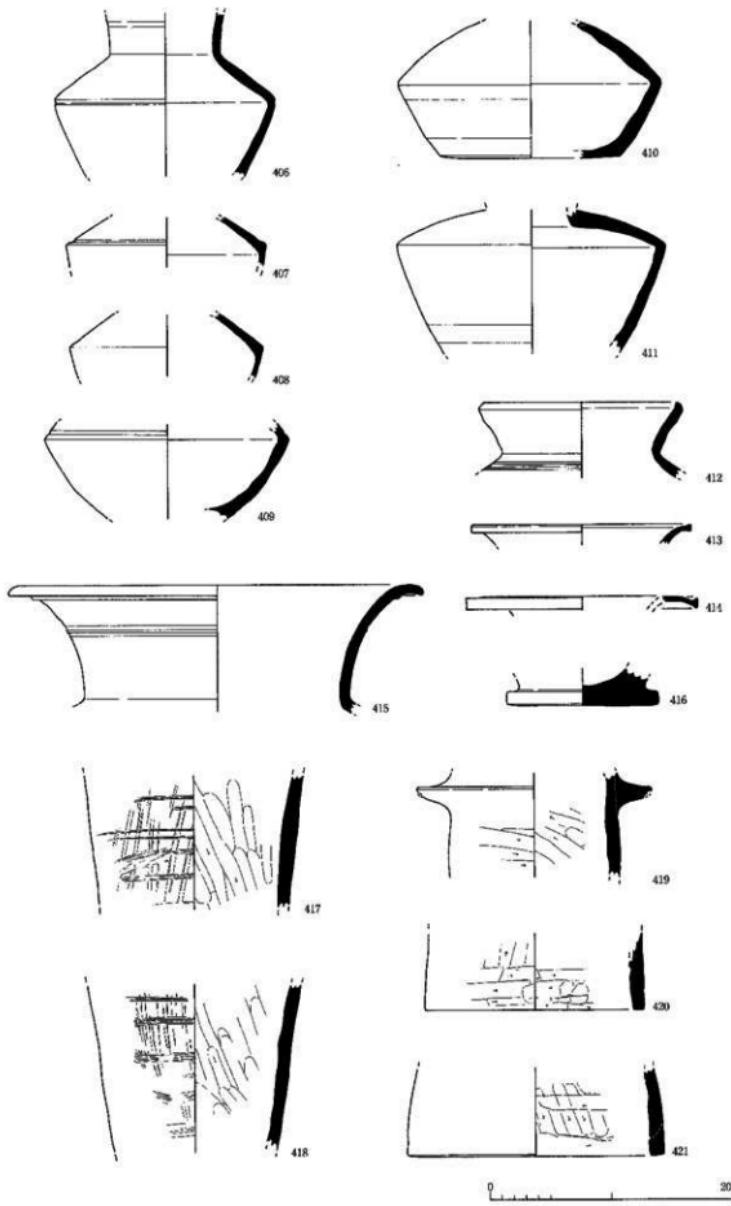
第42図 第15トレンチ出土土器 (1)



第43図 第15トレンチ出土土器 (2)



第44図 第15トレンチ出土土器 (3)



第45図 第15トレンチ出土土器 (4)

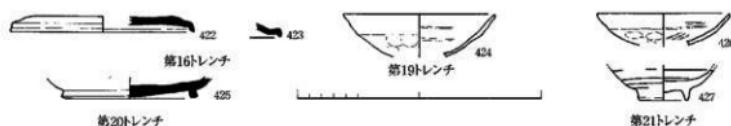
第18-AトレンチはT.P.118.4～118.7mには南北に2.0×40.0mを設定した。南より23m付近ではT.P.19.1mの一段高い棚田となる。厚さ0.3～0.6mの耕土・床土の重層が認められ、浅いところではその下に、深いところではさらに0.5mで砂礫の地山に達する。その上に堆積するのはすべて砂もしくは砂質土である。耕土には土師器細片がわずか混入する。第18-Bトレンチは第18-Aトレンチの北端から北東へ、第17トレンチの南側に設定した2.0×28mのトレンチである。標高は119.0～119.1mである。耕土直下に流水堆積に見られる粗い砂泥じりの粘質土が見られた。遺物・遺構は検出されない。

第19トレンチ（第40・46図）

第18-Aトレンチ東の一段低い棚田に2箇所に分割して設定した。第19-Aトレンチは延長10.0m、現地盤T.P.116.0mで、厚さ0.2～0.6mの表土・耕土・床土を剥ぐと、層厚0.2～0.4mの暗い黄色の粘質土（表面が床土化した旧耕土）を経て、南でT.P.115.4m、北でT.P.115.4mで地山の砂質土に達する。遺物・遺構は検出されない。第19-Bトレンチは延長23.0m、現地盤T.P.は117.5mで、厚さ0.2～0.3mの表土・耕土・床土の下は、南で約0.6m、北で約0.3mで地山の礫を含む砂質土になる。繰り返された流水による砂質土の堆積状況が認められる。この砂質土（第5～13層）より瓦器碗（424）が出土している。

第20トレンチ（第46・47図）

シヨツカ古墳北東の、里道を挟んで北から南に張り出す小さい尾根の頂上に設定した3.0×20.0mの東西トレンチである。現地盤高はT.P.125.5mで、それより下0.4mは現耕土、その下にはかつて現耕土を得るために嵩上げしたことを見出す厚さ0.4～0.6mの盛土が存在する。旧耕土と床土の混在するブロックが西から東へ順次積み上げられ、最後はトレンチ西端より約12.0m付近から東にかけて一気に盛りあげられている。この盛土の下ではT.P.124.4～124.6mにかけて旧耕土が水平に堆積する。これがこの地点で最初に耕地として利用されたときの土壤だろう。その下にはさらに厚さ0.1～0.3mの上の耕土に対する床土が形成されている。西側ではこの床土の下に石・砂を含む褐色の地山層が露呈する。しかし東へ8.0m付近からこの地山面が東に徐々に傾斜面をなし、14.5m付近では急激に落ち込み、15.0～16.0mでは標高はT.P.122.1mを測る。実に2.0mの落差である。しかしこの落ち込みの肩はそれより東で再び立ち上がり、単純に東の谷地に落ち込む状況ではない。



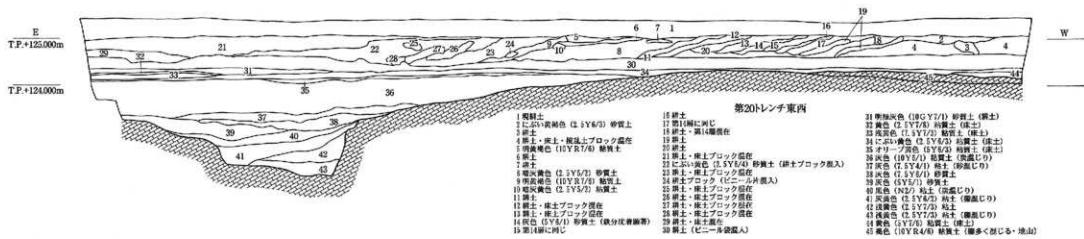
第46図 第16・19～21トレンチ出土土器

要するに上幅6.0m程の落ち込みが、その底面でさらに幅3.6mに深くなる溝状となっている。この落ち込みは最終的に炭を若干混入する灰色粘質土（第37層）によって埋まるが、それ以前にも7層ほどに分層できる堆積土が認められ、その内T.P.122.9～123.3mの2層の砂質土（第38・39層）はかつて流水があった形跡を反映している。その流水以前には逆に滌水の形跡を示すような粘土層が底面より4層にわたって堆積している。この粘土層の上層（第41・42層）では8世紀代の須恵器片（425）が出土した。

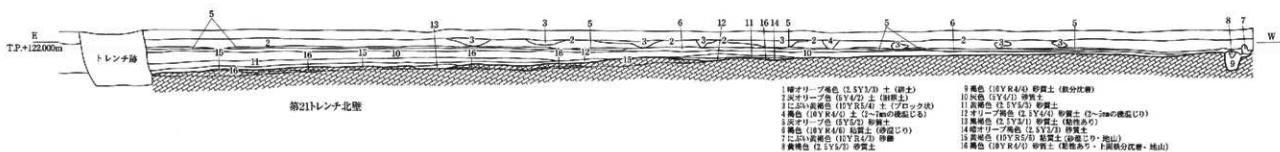
このトレンチの位置する尾根の東は北の「竜ヶ池」から下る谷地形の開口部の西斜面に接し、仮にその方面から大規模な出水があったにしてもその谷を下って平石川へ落ちるはずである。ところがこの落ち込みはその西斜面から少し離れて、別に西に振る形で流路をつけたかのようである。

第21トレンチ（第46・47図）

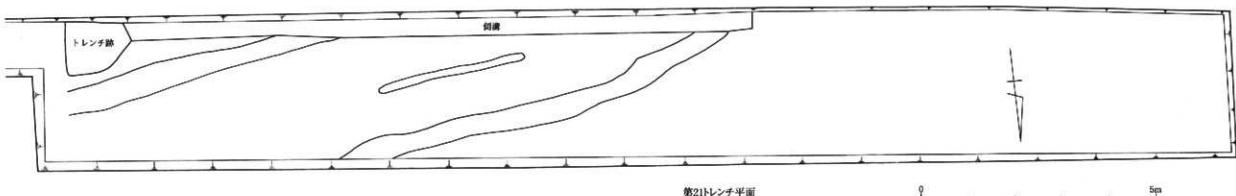
第20トレンチ南のT.P.122.2～122.3mの棚田に設定した3.0×25.0mの東西トレンチである。厚さ0.4～0.6mの現耕土・旧耕土と床土を剥がすと数層の砂質土の堆積が認められる。トレンチ西端では標高121.8mで砂質土の地山となるが、東では121.3mと傾斜面をなす。この地山面上に堆積する数層の砂質土からわずかではあるが、中世～近世土器片が出土している（426・427）。地山面では北東～南西方向の幅0.3～0.4m、深さ0.05mのやや粘性のある砂質土を埋土とする鋤溝が検出された。第20トレンチ東端で検出された南北溝に繋がる遺構は検出されなかった。



第20トレンチ平面

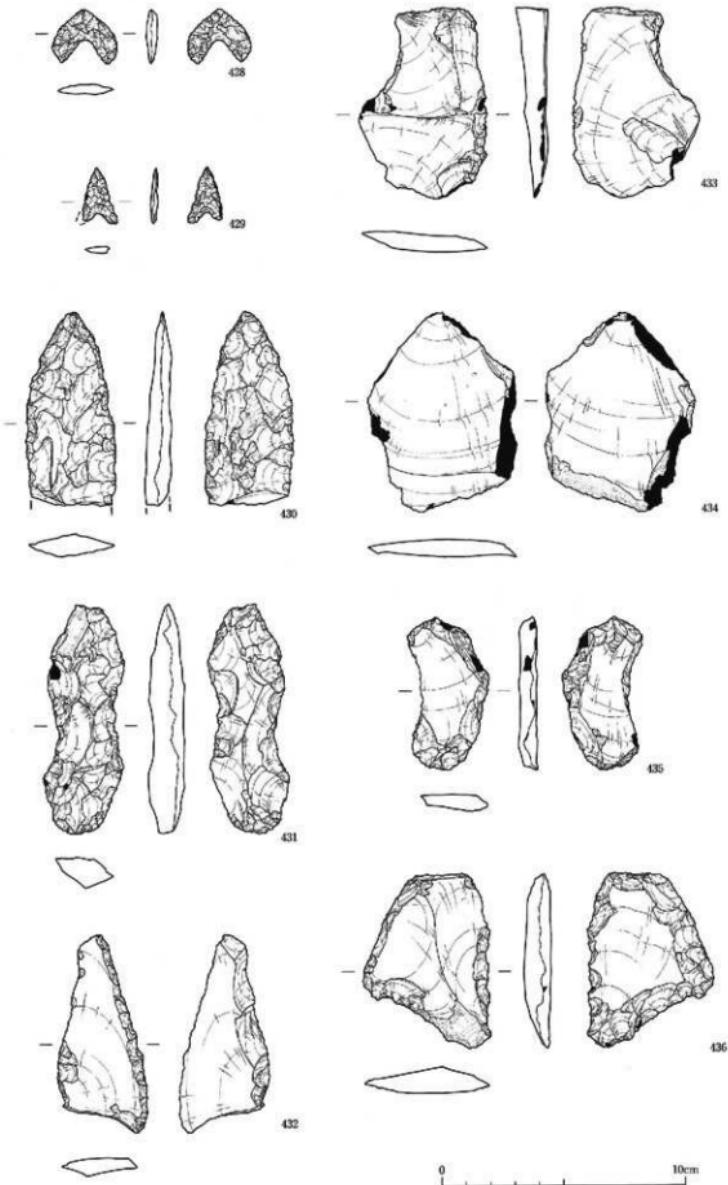


第21课 心血管病



第21トレンチ平面

第47図 第20・21トレンチ平面・断面図



第48図 各トレンチ出土石器

平成14年度調査区出土遺物観察表

調査 区分 番号	基 礎 名	出 土 場 所	発 見 地 点	出 土 量 (g)		特 徴	時 期
				U径	高(深)径	幅	
1 土師器部	第1調査区	24.22.35層	15.40	3.70		口縁部が延長からみをもつて斜方に立ちかるが、瓶型は主張的 な形があら、白練底なし・内面リコア、内面に施釉の模様。	平安Ⅱ・Ⅲ
2 上野原遺跡	第1調査区	25~30層	17.50			口縁部が延長からみをもつて斜方に立ちかるが、口縁部の外側カラナ、縦縫合 部に横縫合アーチ、口縁部に沿う凹部。	7世紀後半~8世紀代
3 小糸河原遺跡	第1調査区	25~30層				くの字型に外側する口縁部をもつて、内面に上表面をもつ、ない所近 リコア。	7世紀後半~8世紀代
4 上野原遺跡	第1調査区	25~30層	25.40			くの字型に外側する口縁部をもつて、内面に上表面をもつ、ない所近 リコア。	7世紀後半~8世紀代
5 小糸河原遺跡	第1調査区	24.32.33層				底部の内面(底)の三輪形孔。	平安代
6 開原郡芦ヶ谷	第1調査区	25~30層			図2.3 小糸河原遺跡のつまみで中央がやや突出する。	平安Ⅳ~5・6	
7 横瀬湯之井	第1調査区	29~30層	13.40	3.80		中内面に窓状に立ち上がる突起部、底部に窓ヘラモリ。	南北Ⅳ
8 上野原小窓	第1調査区	22層	18.70	1.10		断壁は厚く、想ぐせちがうが。	12~14世紀
9 瓦器類	第1調査区	22層	7.90			口縁部の内側を滑らか。	14世紀代
10 斧頭劍	第1調査区	25~30層	14.80			直刃の大きさで口縁部に立てるが、通する刃脚と縫合部 に丸頭のV字型大切妻をもつ。	6世紀後半~中唐
11 木舟・火・土器等	第2~1調査区	32層		6.40		内面タクナは、内面張アザ。	V式
12 上野原遺跡	第2~1調査区	27層				内反する耳溝のある内面。	6世紀
13 田舎器	第2~1調査区	37層	13.70			象頭の首をもつて円柱状に内側を立てるが、外 面ハゲタ。	6世紀
14 土師器耳舟	第2~1調査区	27~30~34層				横縫合・耳きみなし。口縁部なし・口縁部アザ、直刃のフカズリ。	平安Ⅰ~Ⅲ
15 田舎器耳舟	第2~1調査区	27~30~34層	22.80			内輪裏地に内側を立てる耳舟。	平安Ⅰ~Ⅲ
16 田舎器耳舟	第2~1調査区	27~30~34層	22.80			内輪裏地に内側を立てる耳舟。	平安Ⅰ~Ⅲ
17 田舎器耳舟	第2~1調査区	27~30~34層	13.70			内輪裏地に内側を立てる耳舟。	平安Ⅰ~Ⅲ
18 黒瓦片耳舟	第2~1調査区	27~30~34層			図2.4 簡単な曲工法をもつて中央がやや突出する。	南北Ⅱ~3~4	
19 黒瓦片耳舟	第2~1調査区	27~30~34層				下方向へ曲させる形。	南北Ⅳ~1~2
20 黒瓦片耳舟	第2~1調査区	27~30~34層				下方向へ曲させる形。	南北Ⅳ~1~2
21 黒瓦片耳舟	第2~1調査区	27~30~34層	20.60			下方向へ曲させる形。	南北Ⅳ~1~2
22 黒瓦片耳舟	第2~1調査区	27~30~34層	13.60			下方向へ曲させる形。	南北Ⅳ~1~2
23 黒瓦片耳舟	第2~1調査区	37層	11.20			下方向へ曲させる形。	南北Ⅳ~1~2
24 黒瓦片耳舟	第2~1調査区	27~30~34層	19.00			下方向へ曲させる形。	南北Ⅳ~1~2
25 陶器破片	第2~1調査区	27~30~34層	14.40			24形ループをして中央に突起する。	南北Ⅳ~2~3~IV
26 陶器破片	第2~1調査区	27~30~31層	16.80			外斜方にのびる横縫合。	南北Ⅳ
27 陶器破片身追造	第2~1調査区	27~30~34層	10.00			外縫合の内側形に低い丸きがつく。	南北Ⅳ~5
28 陶器破片身追造	第2~1調査区	27~30~34層	8.90			外縫合の内側形に低い丸きがつく。	南北Ⅳ~5
29 陶器破片身追造	第2~1調査区	27~30~34層	9.60			外縫合の内側形に低い丸きがつく。	南北Ⅳ~5
30 陶器破片身追造	第2~1調査区	27~30~34層	13.00			外縫合の内側形に低い丸きがつく。	南北Ⅳ~3~IV~5
31 陶器破片身追造	第2~1調査区	27~30~34層	10.80			外縫合の内側形に低い丸きがつく。	南北Ⅳ~5
32 陶器破片身追造	第2~1調査区	27~30~34層	18.00			テッPに付く。表書きと被詠。	南北Ⅳ
33 陶器破片身追造	第2~1調査区	27~30~34層				表書きの外側する内縫合。	南北Ⅳ
34 陶器破片身追造	第2~1調査区	27~30~34層				縫合部に上方向に付く。	南北Ⅳ~3~V
35 表書き小字追造	第2~1調査区	27~30~34層				表書きの内側する内縫合。	南北Ⅳ
36 表書き小字追造	第2~1調査区	27~30~34層				表書きの内側する内縫合。	南北Ⅳ
37 陶器破片身追造	第2~1調査区	27~30~34層	18.00			表書きの内側する内縫合。	南北Ⅳ
38 陶器破片身追造	第2~1調査区	27~30~34層	7.50			表書きの内側する内縫合。	南北Ⅳ
39 陶器破片身追造	第2~1調査区	39層	12.40			表書きの内側する内縫合。	南北Ⅳ~5
40 七輪器小窓	第2~1調査区	4層	8.40			表みのあら「今(の)表はは」丸。	11世紀
41 丸窓小窓	第2~1調査区	27層	7.30			11世紀の内側の表書き。	11世紀代
42 七輪器身	第2~1調査区(井戸)	17層(底面) 15層(内側底面)	16.00			表するする横縫合、縫合部わざと心がつく。	平安Ⅱ~Ⅲ
43 上野原遺跡の轍跡	第2~1調査区(井戸)	ピッタ				表するする横縫合、縫合部わざと心がつく。	7世紀後半~8世紀代
44 陶器破片身追造	第2~1調査区(井戸)	17層(底面) 15層(内側底面)	9.30			縫合部内側から1.5cm、縫合部のより下方向へは出でていない。井戸縫合部 に上方向に付く。	南北Ⅳ~5
45 陶器破片身追造	第2~1調査区(井戸)	17層(底面) 15層(内側底面)	10.00			縫合部に付く。縫合部。	南北Ⅳ
46 陶器破片身追造	第2~1調査区(井戸)	17層(底面) 15層(内側底面)				縫合部の表書き。	南北Ⅳ~3~4~V
47 陶器破片身追造	第2~1調査区(井戸)	17層(底面) 15層(内側底面)				縫合部の表書き。	南北Ⅳ~4~V
48 陶器破片身追造	第2~1調査区(井戸)	17層(底面) 15層(内側底面)				縫合部の表書き。	南北Ⅳ~4~V
49 一輪小窓	第2~1調査区	土				平面の縫合。	南北Ⅳ
50 一輪小窓	第2~1調査区	土	8.10	1.40		表たる表書きの外側する口縁部のひび。	12世紀代
51 一輪小窓	第2~1調査区	土	8.10	1.40		手平い表書きの外側する口縁部のひび。	12世紀代
52 一輪小窓	第2~1調査区	土	6.30	1.20		手平い表書きの外側する口縁部のひび。	12世紀代
53 一輪小窓	第2~1調査区	土	14.00			内縫合大きく開く。内面・底面封緘封緘。	南北Ⅳ
54 一輪小窓	第2~1調査区	32層	11.80			内縫合を抜いてぐらぐらがある部分。	南北Ⅳ~5
55 土師器	第2~1調査区	24層	17.60			内側して立ち上がる口縁部の無地をわずかに内側に巻き込む。	平安Ⅱ~5

33	土師漆器	第6調査区	32層	32.00		内側して立ちがちなる漆の刷毛を内側に巻き込む様A1。外側に漆刷毛を以てD1～D2。
54	上塗漆器	第6調査区	32層	37.30		
55	土師漆器(1)脚部	第6調査区	32層	18.70		立たせざる口底の刷毛を内側に巻き立てる様A1。 3世紀後半～8世紀代
56	上塗漆器	第6調査区	32層	15.00		兩面とも立たせざる口底の刷毛がつま、刷毛は丸く立たせた外底をも。外底に圓筒形で下から立てる様A1。 7世紀末～8世紀
57	土師漆器(1)脚部	第6調査区	32層	30.40		外底丸い脚部の口底刷毛をも下から立てる様A1。施墨外底面となり、トに下す 7世紀後半～8世紀
58	如意頭耳环	第6調査区	32層	13.50		如意頭を内側へ巻き立てる。
59	漆皮胎耳环	第6調査区	20～22層	16.40		漆皮胎を内側へ巻き立てる。
60	弧形耳环	第6調査区	120層	19.60		内底が直線から丸みのもって上方方に立ち上がる形。輪郭不規。
61	弧形耳环	第6調査区	20～22層	9.00		
62	弧形耳环	第6調査区	24層	16.00		
63	弧形耳环	第6調査区	22層	15.40		
64	弧形耳环	第6調査区	24層			
65	弧形耳环	第6調査区	20～22層	32.80		
66	弧形耳环身彫器	第6調査区	24層			直線横に立ちがち。
67	弧形耳环身彫器	第6調査区	20～22層	25.40		直線横の「」の形の底を立てる。
68	淡黄漆不會依恋	第5調査区	9層		8.30	足跡柄に「△」の形の底を立てる。
69	土師漆器	第6調査区	32層	25.40	16.50	平たい底から内側して立ちがちの刷毛をもつ。
71	上塗漆小皿	第6調査区	9層	8.00	1.10	平たい底から内側して立ちがちの刷毛をもつ。
72	土師漆器	第6調査区	32層	19.90	2.50	平たい底から内側して立ちがちの刷毛をもつ。
73	漆器	第6調査区	22層		5.50	中国古式。
74	上塗漆器	第6調査区(東西)	10層(△脚部)	19.40	3.10	内側して立ちがちの口底の刷毛をわずかに内側に巻き込む様A1。直 線横の「△」の形の底を立てる。
75	土師漆器	第6調査区(東西)	11層(△脚部)	21.60	3.30	内側して立ちがちの口底の刷毛をわずかに内側に巻き込む様A1。
76	上塗漆器口跡部	第6調査区(東西)	9層(△脚部)		8.50	平底Ⅱ～Ⅲ。
77	弧形耳环身彫器	第6調査区(東西)	10層(△脚部)	17.60		この平底に外底する口底刷毛をもつ。内底斜削をわずかに巻き立てる。
78	弦纹耳环	第6調査区(東西)	33層(△脚部)	8.80		直線横に「△」の形の底を立てる。
79	弧形耳环	第6調査区(東西)	34～35層(△脚部)			やや内側に立ちがち。
80	上漆漆小皿	第6調査区(東西)	30層(△脚部)			内側しなら立ちがちの刷毛が外方にひき、細部は丸くさめる。
81	弧形耳环身彫器	第6調査区(東西)	30層(△脚部)			3～14世紀。
82	上漆漆口跡部	第10調査区(中段)	28～54層(△脚部)			口片の外底する口底刷毛をもつ。内底斜削をわずかに巻き立てる。
83	子脚漆耳环身彫器	第10調査区(中段)	31層(△脚部)			直線横に「△」の形の底を立てる。
84	华纹上漆漆器	第10調査区(中段)	50層(△脚部)		3.40	直線横に「△」の形の底を立てる。
85	华纹上漆漆器	第10調査区(中段)	55層(△脚部)		4.60	直線横に「△」の形の底を立てる。
86	华纹上漆漆器身彫器	第10調査区(中段)	28～54層(△脚部)			直線横に「△」の形の底を立てる。
87	华纹上漆漆器身彫器	第10調査区(中段)	50層(△脚部)			内側に斜坡堆积する。
88	上漆漆器	第10調査区(中段)	28～54層(△脚部)			丸みのある体幹から外側する口底部が細く、外底に直角的に下傾する。
89	十脚器	第10調査区(中段)	54層(△脚部)	22.80		直線横に「△」の形の底を立てる。
90	灰质漆口沿器	第10調査区(中段)	30層(△脚部)	30.60		やや内側に立ちがちの口底の刷毛が外方にひき、細部は丸くさめる。
91	弧形耳环盖身彫器	第10調査区(中段)	33層(△脚部)	10.80		所持する口底が直角に傾する。外底は斜度で内側の口底が深く。
92	弧形耳环	第10調査区(中段)	35層(△脚部)	15.50		天井型で、内側に立ちがち。
93	出足器	第10調査区(中段)	37層(△脚部)	10.20	3.60	内側斜削に立ちがちの口底。直線横に「△」の形の底を立てる。
94	青釉陶瓶	第6調査区(中段)	橘上、未上			直線横底。
95	瓦器陶瓶	第6調査区(中段)	63層(△脚部)			瓦器底。
96	红蓝彩小型作乐俑	第11～12調査区(中段)	97～107・106層(△脚部)			直線底。
97	瓦器陶瓶	第11～12調査区(中段)	橘上	5.20		直角底。
98	瓦器陶瓶	第11～12調査区(中段)	97～107・108層(△脚部)	3.80		三角高台、朱点み斜削字状文。
99	瓦器小皿	第11～12調査区(中段)	橘上	31.80	2.00	直線から斜削に外方にひき、直線はさらに外方に向かう。尖り底。
100	A器小皿	第11～12調査区(中段)	橘上	10.20	2.20	直線から斜削外方にひき、直線はさらに外方に向かう。尖り底。
101	土师漆耳子	第11～12調査区(中段)	橘上			尖または尋の底。
102	瓦器口跡部	第11～12調査区(中段)	21層(△脚部)			内底斜削する。
103	土师漆小口	第11～12調査区(中段)	橘上	8.00	1.80	丸みのある口底から立ちがちの口底。
104	上漆漆耳子	第11～12調査区(中段)	102層(△脚部)	10.80	3.40	尖り底で、丸みのある底面から口底が細く立ちがちの口底。
105	瓦器	第11～12調査区(中段)	108層(△脚部)			直線底。
106	瓦器底	第11～12調査区(中段)	129層(△脚部)	9.60	3.50	直線底。コニカル斜削。

平成13年度調査区出土遺物観察表

平成14年度調査区出土石器一覧

井岡 番号	器種	出土箇所		法 量 (cm・g)				材質	備 考
		調査区	土層	長さ	幅	厚さ	重さ		
114	凹基式石鏃	第10調査区西半部	16層	2.43	2.21	0.45	1.7	サスカイト	素材形態は剥片
115	凹基式石鏃	第10調査区東半部	21-36層	2.19	1.74	0.39	0.9	サスカイト	素材形態は剥片
116	両側石器	第8調査区	5-25層	2.51	4.78	0.91	10.9	サスカイト	素材形態は横長剥片
117	前述形石削器	第1調査区	112層	7.96	6.59	1.93	104.1	サスカイト	素材形態は横長剥片
118	前述形石昌木	第8調査区	4-5層	5.74	5.51	1.6	46.7	サスカイト	素材形態は薄剥片
119	前述形石昌木	第8調査区	24-27・64層	10.49	6.03	1.67	85.1	サスカイト	素材形態は剥片
120	削器	第10調査区西半部	29層	4.5	9.51	1.45	52.6	サスカイト	素材形態は薄剥片
121	削器	第10調査区西半部	耕土・底土	3.8	6.67	1.01	22.4	サスカイト	素材形態は横長剥片
122	一次加工剥片	第5調査区	11層	4.21	4.69	1.19	21.2	サスカイト	剥片
123	剥片	第2・1調査区	22-26・28層	6.7	5.05	0.99	32.0	サスカイト	横長剥片。点状に近い打面。
124	剥片?	第11調査区	耕土	3.85	6.18	0.86	19.1	サスカイト	横長剥片。表面の風化が強い。古いガジリ跡が跡にみられる。

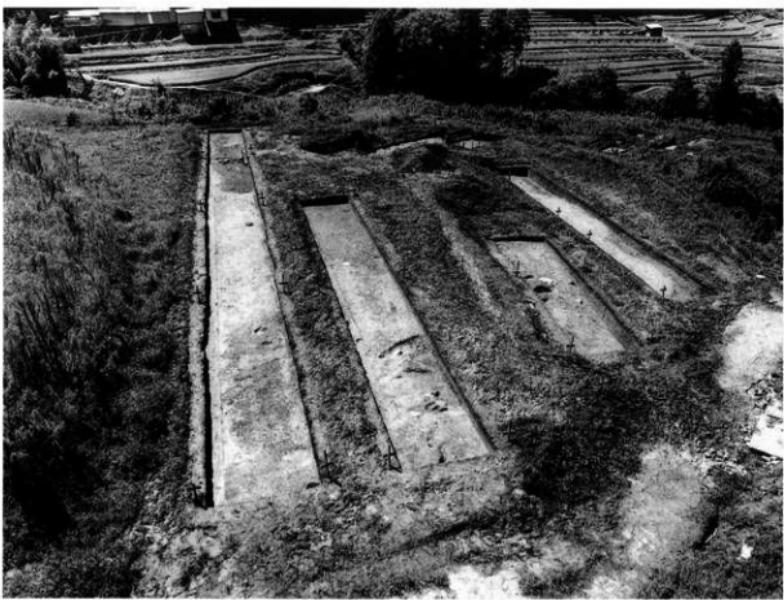
平成13年度調査区出土石器一覧

井岡 番号	器種	出土箇所		法 量 (cm・g)				材質	備 考
		調査区	土層	長さ	幅	厚さ	重さ		
428	凹基式石鏃	6トレンチ南端	240層	2.25	2.61	0.42	2.0	サスカイト	剥片を素材。凹脚の抉りが比較的深いハート形を示す。
429	凹基式石鏃	7トレンチ内側	37層	2.30	1.40	0.30	0.6	サスカイト	剥片を素材。脚部・端欠く。
430	鏡先	4トレンチ北東部	32-33層	7.95	3.65	0.95	32.1	サスカイト	剥片を素材。下端欠失。
431	不定形石器	23トレンチ		9.40	3.30	1.25	43.0	サスカイト	風化
432	削器	6トレンチ南端	282-294層	8.10	3.70	0.75	21.9	サスカイト	横長剥片を素材。風化
433	剥片	8トレンチ西側	2-25層	7.85	5.20	0.89	36.1	サスカイト	一边自然面残す
434	剥片	7トレンチ東側	47層	8.19	6.15	0.70	48.0	サスカイト	横長剥片。一边自然面残す
435	剥片	4トレンチ	32-33層	6.22	3.30	0.70	17.2	サスカイト	横長剥片を素材。
436	削器	10トレンチ	12層	7.15	5.20	1.19	40.4	サスカイト	横長剥片を素材。風化して白っぽい

図 版



北東から



第2～5調査区全景（北東から）



北壁断面（南東から）



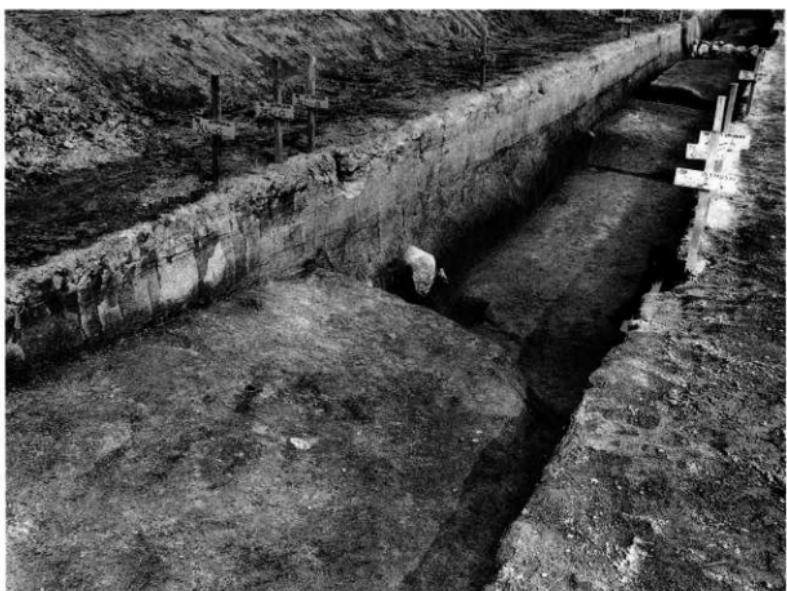
土壟検出状況（南から）



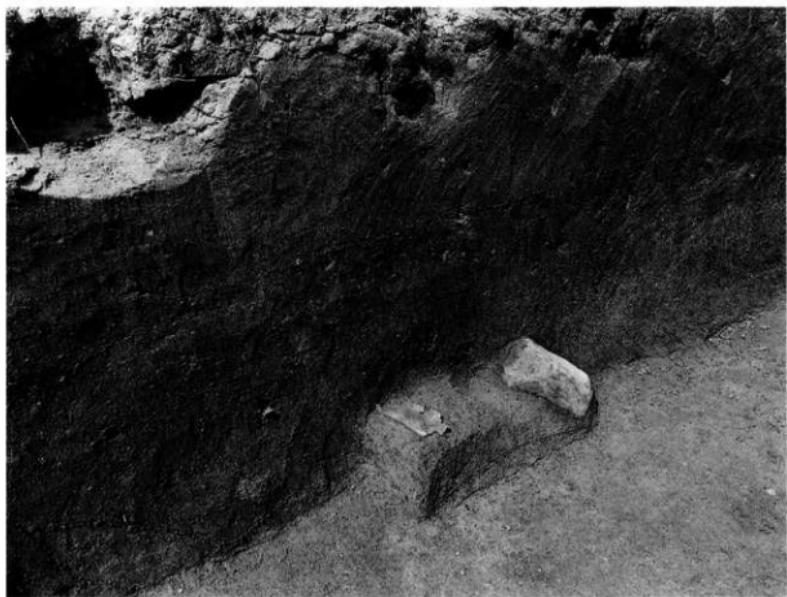
東西溝およびビット群検出状況（北から）



東西溝埋積土内産出土状況（東から）

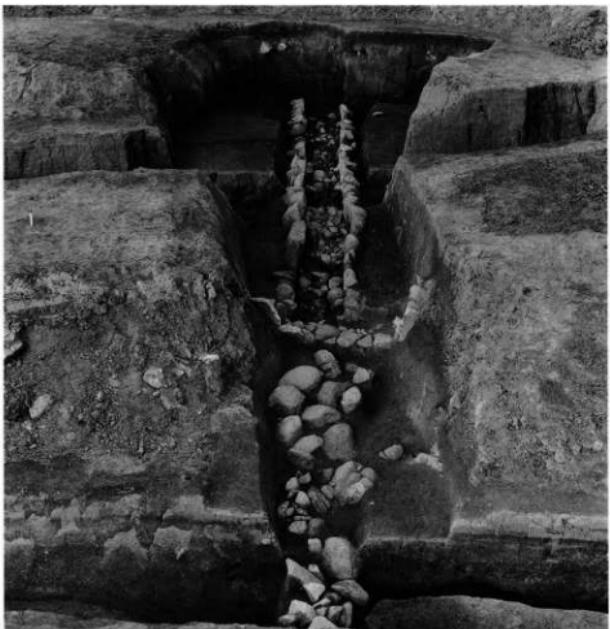


全景（南西から）

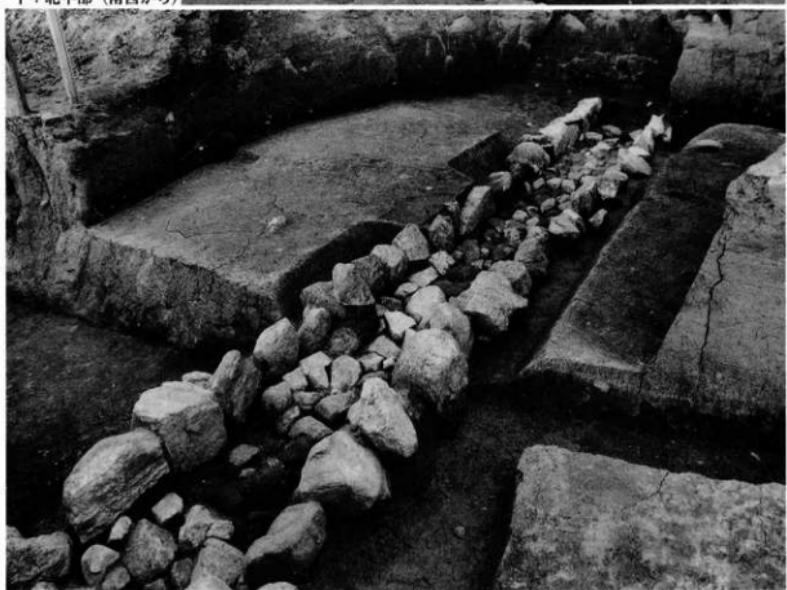


トレンチ西端土器出土状況（南西から）

右：全景（南から）



下：北半部（南西から）





北壁断面(南から)



溝底内擱原石片出土状況



北半部溝底細部（南から）



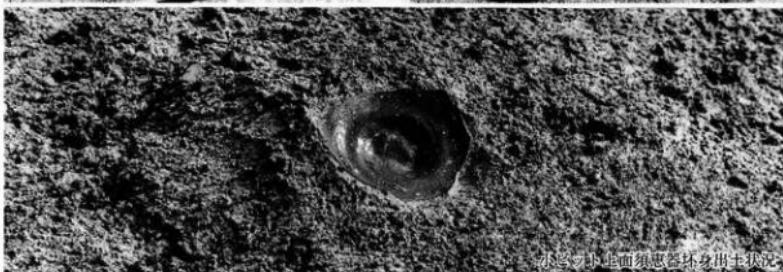
南半部溝底細部（南から）



南東から



南西から





右：東西石室（南から）

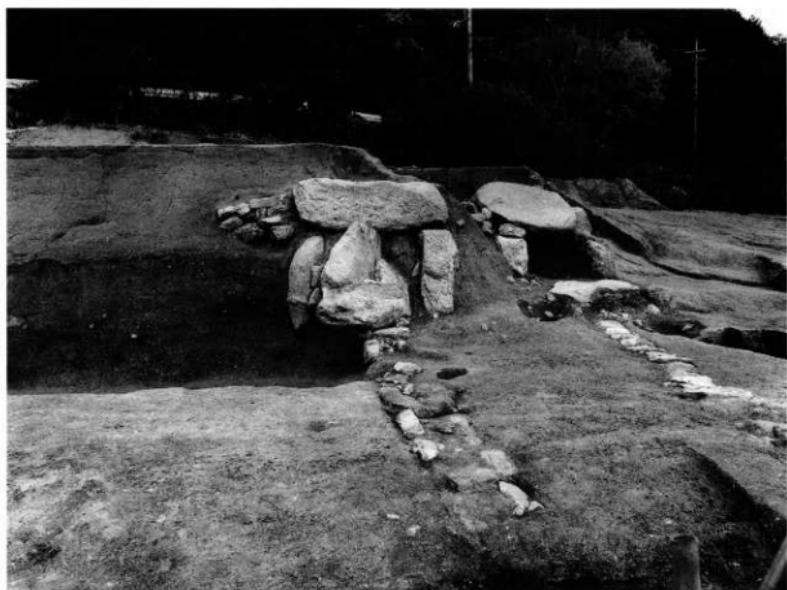
下：古墳正面（南から）



全景（南東から）



全景（南から）



東西石室正面（南から）



東西石室（南東から）



東西石室（東から）



東西石室（南から）



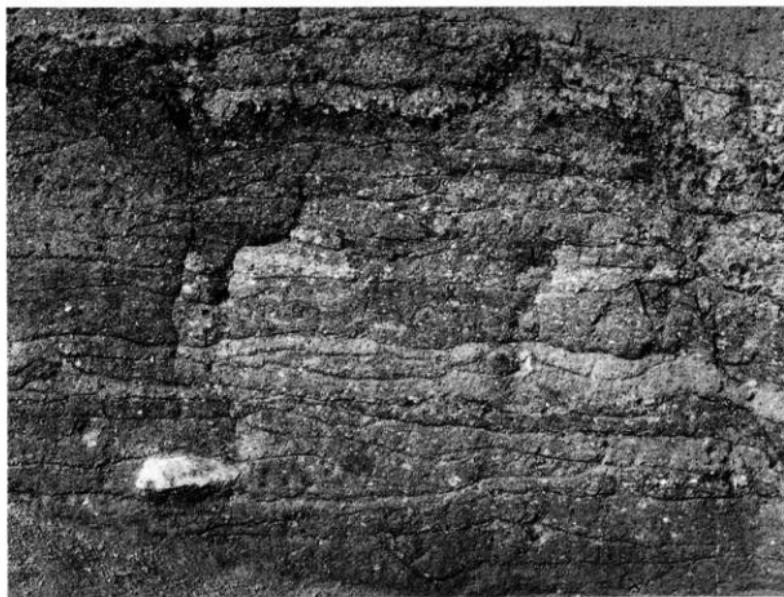
掘削・墳丘部断面（南西から）



掘削・墳丘部断面（北東から）



墳丘部盛土状況断面（南から）



墳丘部盛土状況細部（南から）



掘削・墳丘部断面（北西から）



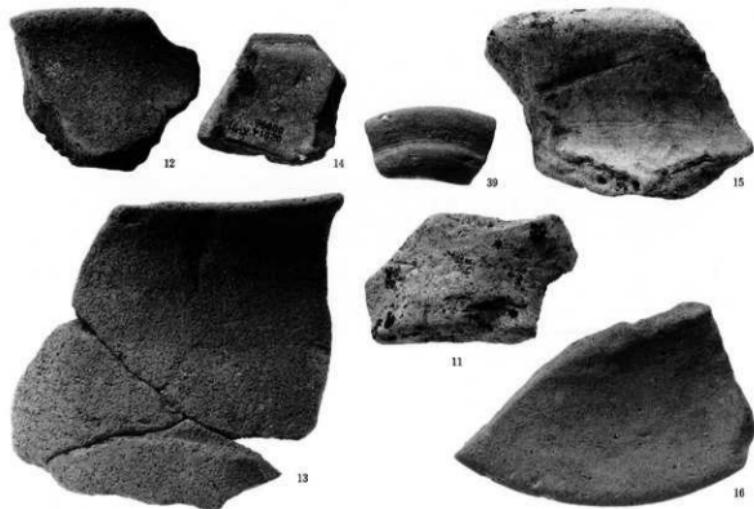
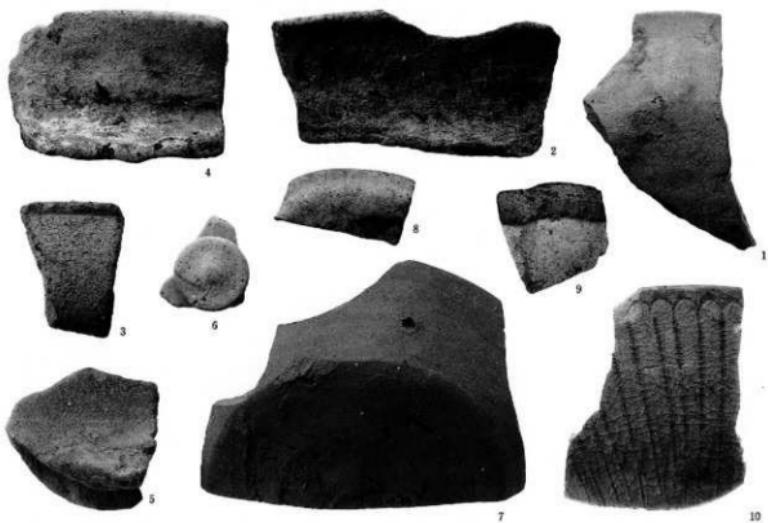
掘削断面（北から）



東石室天井石周辺攪乱部検出状況（西から）

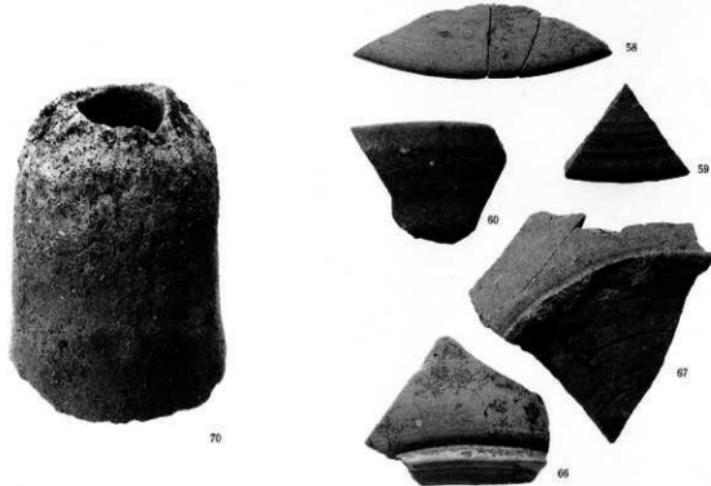
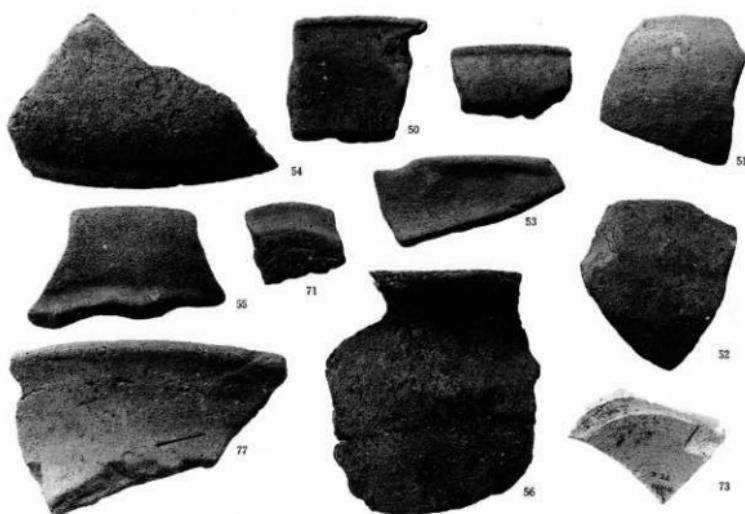


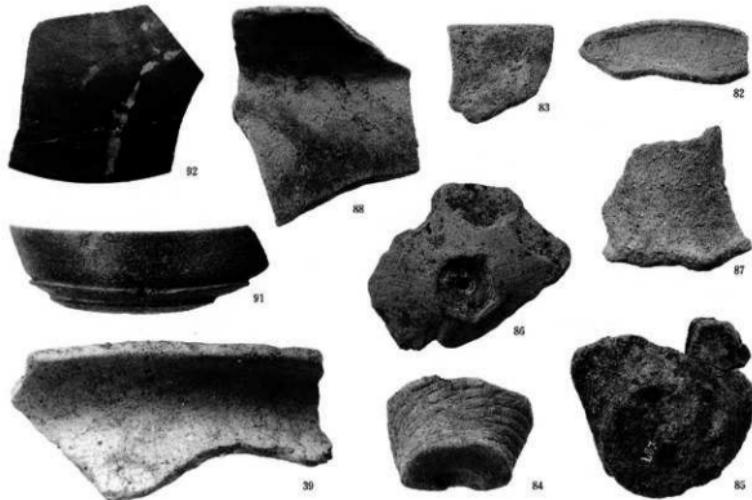
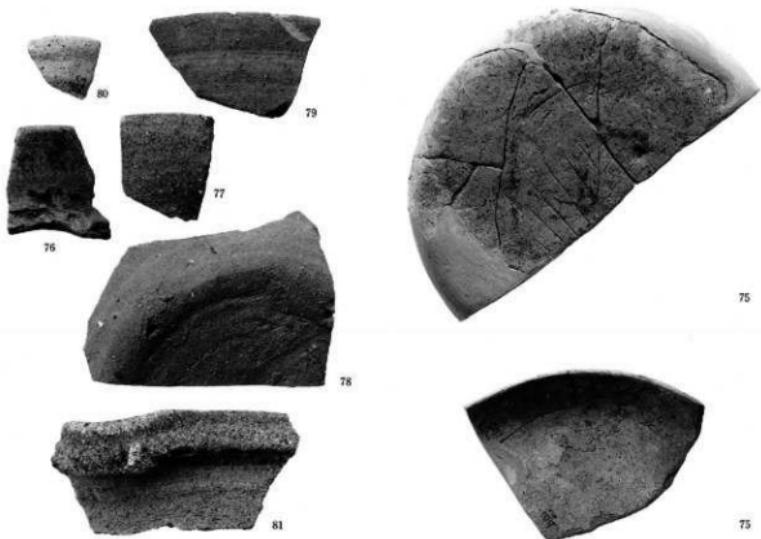
東石室前面凝灰岩出土状況（南から）



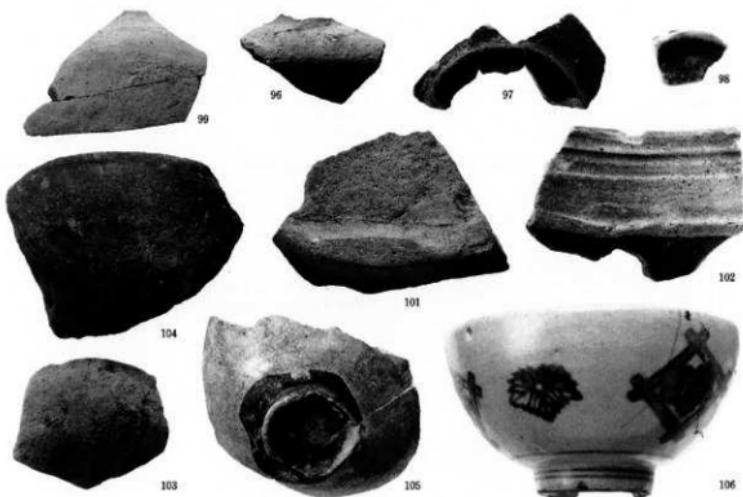
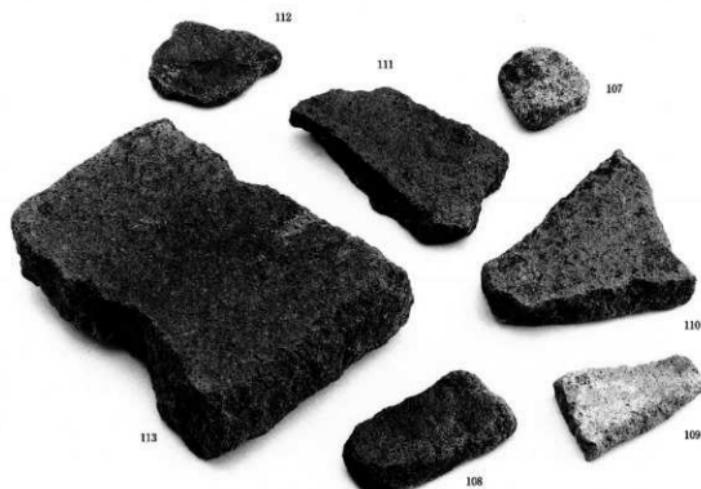


图版20 第8调查区出土土器·毓羽口

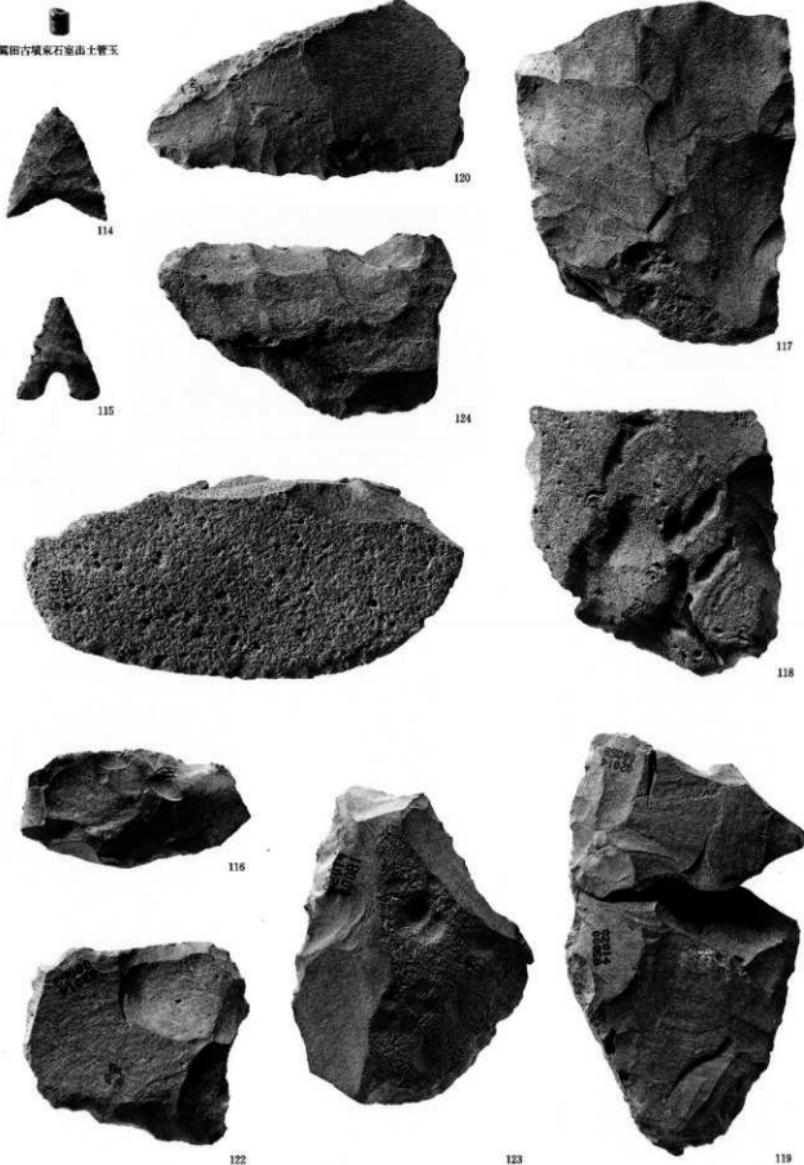




图版22 第10·11调查区出土砾石·土器



糸田古墳東石室出土菅玉





全景(南東から)



第七段(東から)



下段(東から)



第4トレンチ拡張部全景（南→北）



第4トレンチ拡張部 加工木出土状況（南→北）



第9トレンチ検出面全景（東→西）



第12・22トレンチ検出面全景（西→東）



第14トレンチ全景（西→東）



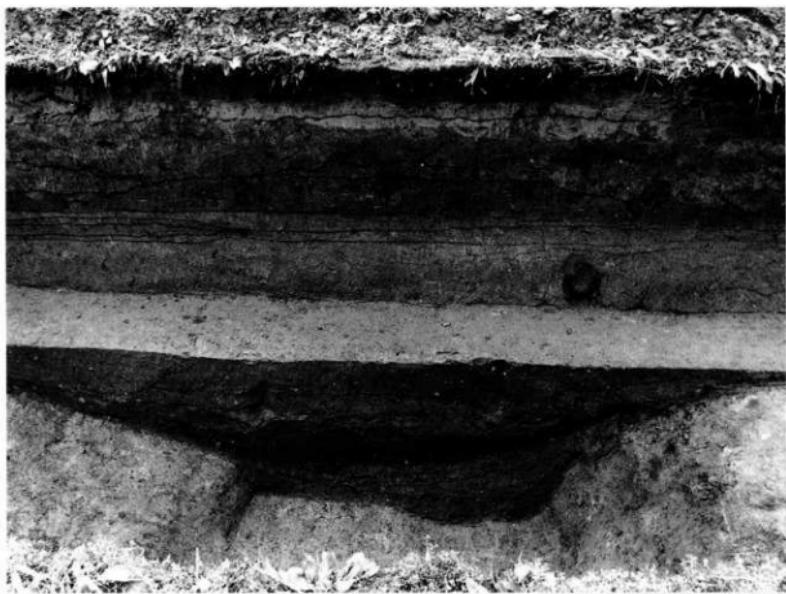
第15トレンチ全景（西→東）



第20トレンチ全景（西→東）



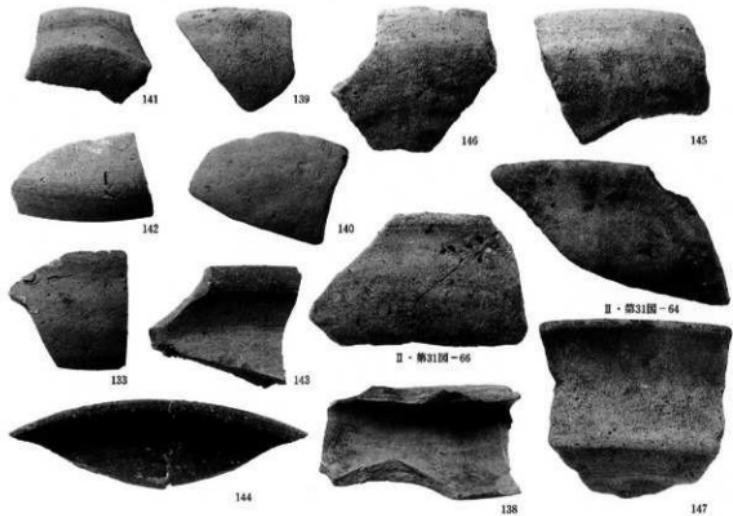
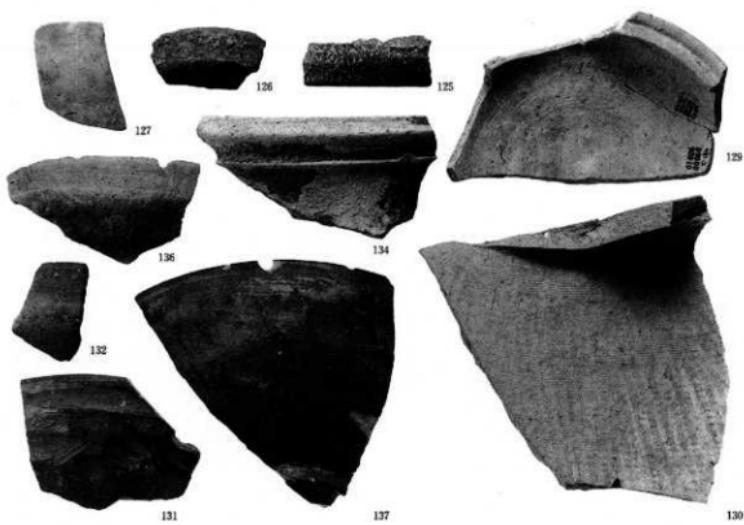
第20トレンチ南壁土層断面（北西から）



第20トレンチ東端溝断面（北から）

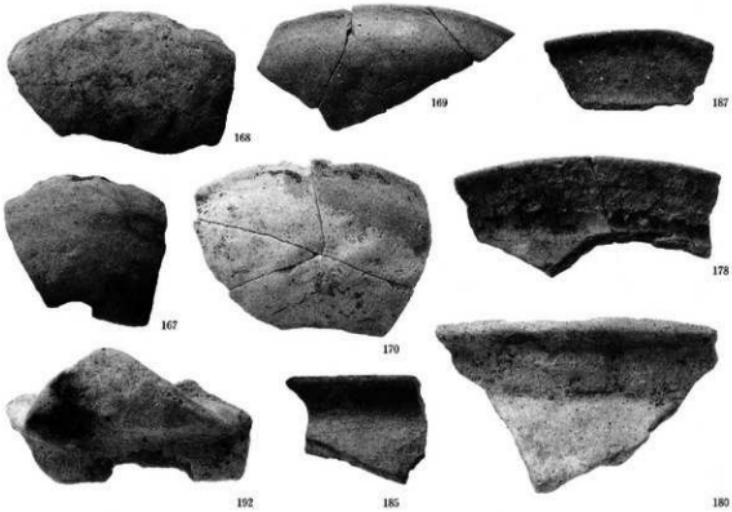
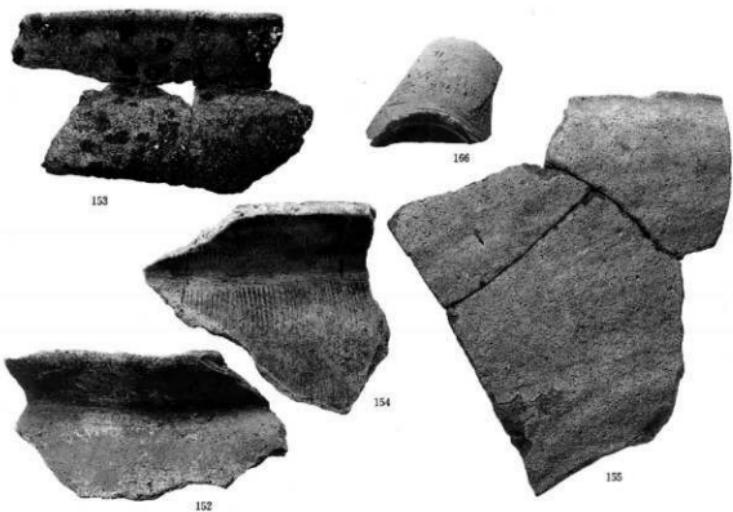


第20トレンチ東端溝断面（北東から）

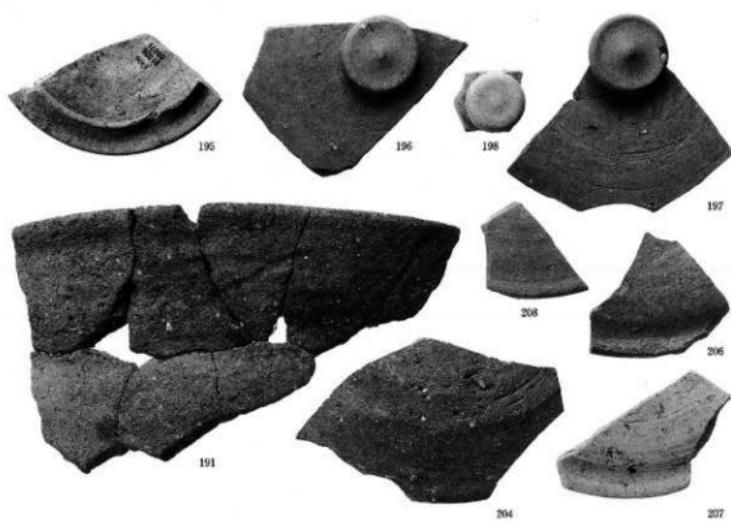


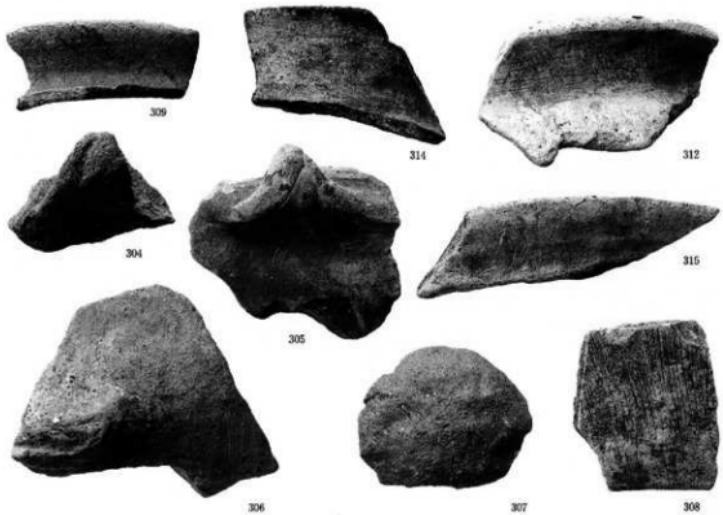
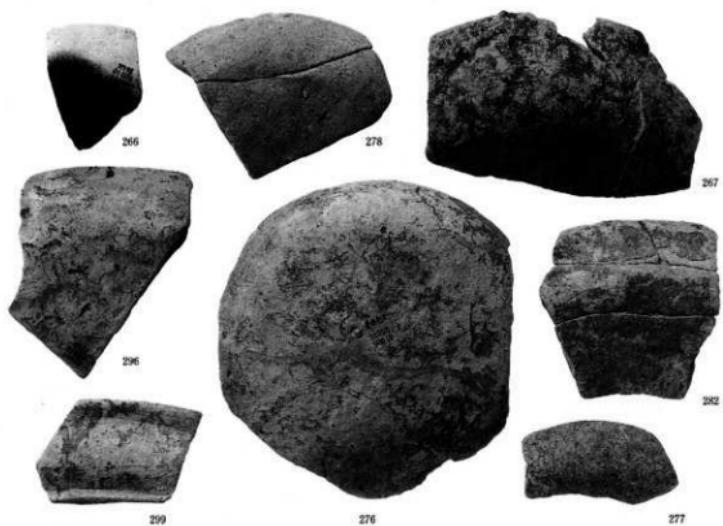


図版32 第9・12トレンチ出土土器

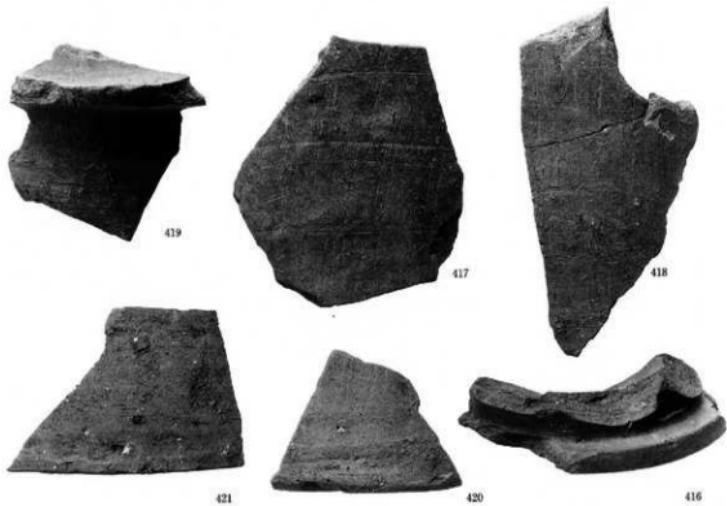


図版33
第12・14トレンチ出土土器

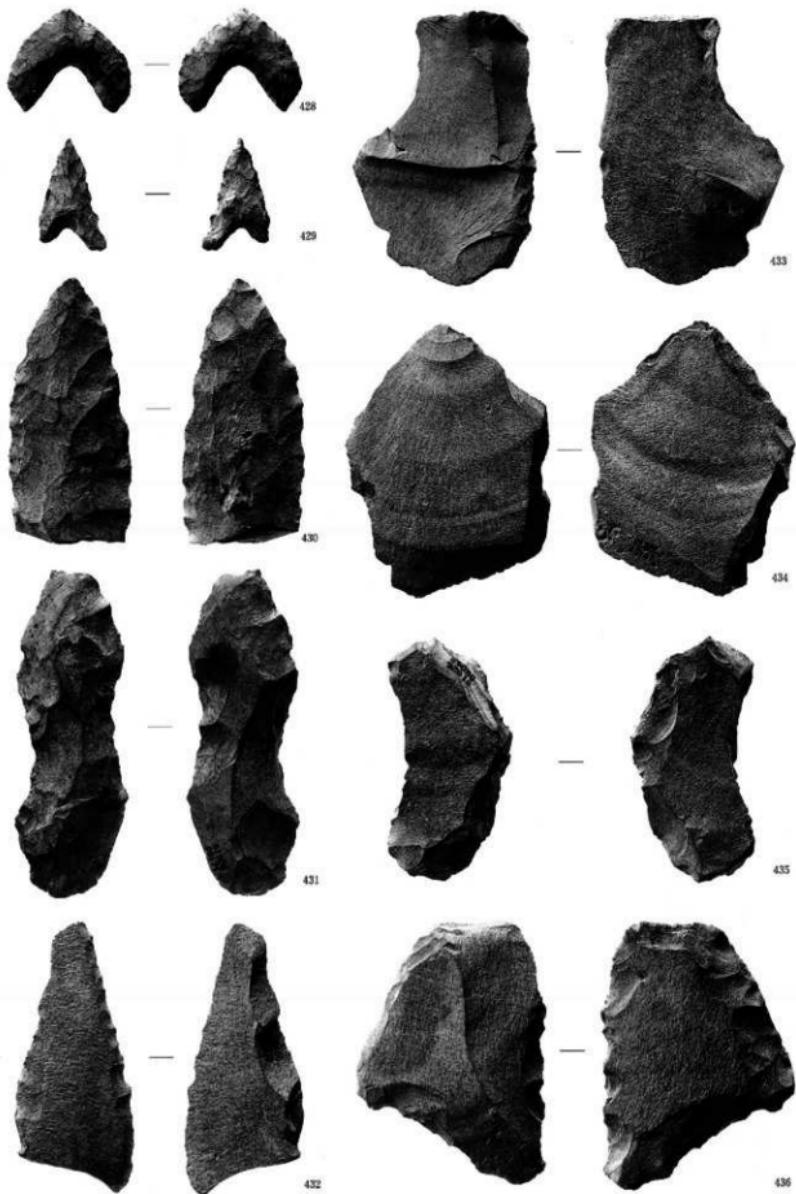




図版35 第15トレンチ出土土器（2）



図版36 各トレンチ出土石器



報告書抄録

ふりがな	かのうこふんぐん・ひらいしこふんぐんはくつちょうさがいよう							
書名	加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・III							
副書名	－中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う－							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	桥本哲							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °'" °' "	東經 °'" °' "	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
かのうこふんぐん・ 加納古墳群・ ひらいしこふんぐん 平石古墳群	みなみかわちぐん 南河内郡 かなんちょう 河南町 ひらいし 平石	27382	37・24	34° 29' 20"	135° 39' 09"	2002年7月 ～ 2002年11月	1,399m ²	中山間地域 総合整備事業 「南河内 こごせ地区」
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
加納古墳群・ 平石古墳群	古墳・ 集落跡	古墳時代 ～ 奈良時代	・横口式 石槨を主 体部とす る飛鳥時 代の双室 墳 ・奈良時 代の石組 の溝	土師器・ 須恵器・ 管玉・ 櫻原石	・7世紀代と思われる横口式石 槨を主体部とする1墳丘2石室の 方墳 ・8世紀代に構築された石組の 溝			

加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・III －中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う－

発行 大阪府教育委員会
 〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目
 TEL 06-6941-0351
 発行日 2004年3月31日
 株式会社 中島弘文堂印刷所
 印刷 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
 TEL. 06-6976-8761

